

今宵は満月

生崎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日十六夜咲夜は一枚の絵画を見つける。その絵に描かれたレミリアと二つの人影は、レミリア曰くレミリアと最初の従者たち。懐かしさを噛み締めながら、レミリアは古い記憶を口遊む。父に囚われた妹を救うために立ち向かったあの日々を。当主になるために旅をしたあの日々を。満月の姿を思い出して。

目次

レミリアちゃんと最初の従者	1
レミリアちゃんと門番小娘	17
レミリアちゃんと秘められた力	33
レミリアちゃんと死亡之虫	53
レミリアちゃんとヒマラヤ山脈	71
レミリアちゃんと青の都	87
レミリアちゃんと魔法使い	107
レミリアちゃんと吸血鬼	123
十五夜満月と島原の乱	139
レミリアちゃんとフランちゃん	153
レミリアちゃんと二人の従者	169
レミリアちゃんとレミリアIIスカーレット	182
おまけ 昨夜は満月	203
おまけ 草月の日々	210

レミリアちゃんと最初の従者

「……………これは？」

ふと、十六夜咲夜は掃除の手を止めて、目に付いたものへと手を伸ばす。

紅魔館恒例年末の大掃除。飛び交う妖精メイドに指示を出しながら、紅魔の主人、レミリアⅡスカーレットの部屋を掃除していた咲夜は、部屋に飾られた一枚の絵画を取り外した先にあつたものを眺めて手を止める。

絵画の下に隠れるように飾られた一枚の小さな絵画。色褪せたそれは、元の描かれたものはよく分からないが、人物画であることは間違いない。椅子に座った少女と、その背後に立つ二人の影。顔は分からず、辛うじて体の輪郭から男女一組であることが分かる。椅子に座った少女の褪せた青い髪色を見て、咲夜はすぐにその人物が誰か思い至った。

「……………お嬢様？」

「あら、呼んだかしら咲夜？」

背に掛かる聞き慣れた柔らかな声に、咲夜は背筋を直し慌てて振り返った。咲夜の振り返った先で待っていたのは、小首を傾げた紅魔の主人。レミリアは咲夜と、その背後にある絵画を見比べると、僅かに目を見開く。パタリつ、と背から伸びる黒い翼をはためかせゆっくり絵に近寄りそれに手を添えるレミリアの顔は哀愁を帯びて、その顔を見た咲夜は急いで頭を下げた。

「申し訳ございませんお嬢様、掃除をしていたら見つけてしまい、つい手に取ってしまいました」

「そう……………」

怒られることもなく、ただ愛おしく絵を見つめるレミリアの姿は珍しいもので、咲夜はバツの悪い表情を浮かべながらも、頭を上げて再びその絵へと目を向けた。絵の中のレミリアと二つの影。絵を撫でるレミリアの柔らかな横顔を眺めながら、一歩咲夜はレミリアへと足を寄せた。

「……大事なものののですか？」

「……ええ、昔ね、昔と言っても今から四百年くらい前、私が当主になった時に記念して描いてもらった絵なのよ」

「お嬢様が当主に……」

四百年前。

人間である咲夜には、想像もできぬ昔。当主のレミリアしか知らない咲夜からすれば、当主になる前のレミリアなど想像もできない。目を丸くする咲夜にレミリアは微笑み、絵からそつと手を放す。

「……お嬢様の後ろにいらっしやる方々はお嬢様のご両親なのですか？」

そう考えて咲夜は口にするが、即座にレミリアは首を横に振った。では誰なのだろう？ と首を傾げる咲夜にレミリアは笑いながら、懐かしそうに天井へと顔を上げる。その先にあるものを見つめるように。

「この二人は私の初めての従者たち。初めて私が掴んだ宝物」

「お嬢様の初めての？」

「そうよ、なあに咲夜聞きたいの？ この二人の話」

同じ従者であればこそ、咲夜は是非聞いてみたいと強く頷く。レミリアが昔の話をほとんどしないということもある。期待に目を輝かせる咲夜の顔を見上げて、たまにはいいかとレミリアは腰に手を当ててホツと小さく息を吐き出すと、「紅茶を淹れて」と言い部屋のベッドへと腰掛けた。

「少し長くなると思うから、口が渇くのは嫌なもの」

「あ、はい！ すぐに！」

一瞬で姿を消した咲夜にレミリアは笑い、力を抜いてベッドへと仰向けに倒れた。絵を見なくても鮮明に思い出せる昔の記憶。ただの小娘が当主になるまでの旅の軌跡。溢れてくる思い出をどう言葉にしようかと思いに耽るレミリアの耳に、すぐに走り寄って来る足音が届き体を起こした。

随分急いで来たかと笑いながら、咲夜が来るのに足音が聞こえるか？ と首を捻りながらレミリアが体を起こし切れば、ティーセットを

準備している咲夜に続き、図書室に籠っているはずのパチュリー、ノーレツジと小悪魔、紅魔の妹フランドール、スカーレット、門番紅^{ホン}美鈴^{マイリン}までもが部屋にいた。

そんなに私の昔話が聞きたいのかと苦い顔をするレミリアの前にティーカップが差し出され、レミリアは紅茶を一口飲むと仕方がないとため息を吐く。

顔を上げたレミリアは美鈴と少しの間目を合わせ、お互い小さく笑うと唇を一度軽く舐めて口を開いた。話すのは遙か昔の物語。レミリアが当主になるまでの物語。その始まりは――。

「その日は満月だった――」

その日は満月だった。

――カサリツ、と。

乾き切ったボロい布切れと、ベタつく潮の香りが交ざった風。それに包まれ内に隠された汚れの張り付いた細腕を摩る。路地の中、木造の壁を背に薄く重い色をした雲の切れ間から覗く目玉のような満月を見上げて、少女は人よりも幾分か伸びた犬歯を強く噛み締める。

――失敗したツ！

数ヶ月前に決死の覚悟で全てを賭けていた計画が脆くも崩れ去った。

信じていたのにツ！

賭けていたのにツ！

妹のためにツ！

少女の妹は類稀なる才能を持つてこの世に生まれた。その才能のまま母親の体を破り抜き、この世に産声を上げた悪魔の妹。あらゆるものを破壊しうる『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という性質を身の内に宿した恐るべき少女。

「フランドールⅡスカーレット。」

少女の父親は人間ではない。夜の世界を我が物顔で支配する夜の王。生物の体に流れる朱を啜る怪物。蝙蝠の翼と鋭い牙。指一本で人間を殺しうるだけの膂力。流れる風より速く動き、縦横無尽に空を舞う。

吸血鬼。

それが少女と少女の妹、フランドールⅡスカーレットの父親である。その娘である少女とフランドールもまた同じ。人を超える怪物だ。だが、怪物だからといって、人に必要なものが不必要なわけではない。それは優しさであったり、愛であったり、形はないが大切なもの。だがそれを親から少女が受け取ることはなかった。

少女の親は野心家だった。父も母も、他人を顧みず己のことしか見ていない。欧州、ルーマニアの夜をいかにして支配するかということにしか高尚な頭を使っていない。だから母が死んだところで少女にとってはどうでもよかった。所詮、血の繋がりにしかない相手。母から少女はなにも与えられていない。

だが、妹からは違った。

フランドールが初めて呼んだ人の名は、父の名でもなく母の名でもなく姉の名前。

「レミリアお姉ちゃん」

と口にした妹の笑顔を見て、初めて少女、レミリアⅡスカーレットは愛を知った。いつも後ろをついて来て、姉の名を呼び笑顔を向ける。誕生日にはプレゼントをくれた。そんなフランにレミリアもよく贈り物を。フランの笑顔を見るために。そんな無邪気な妹は、ただその性質が故にレミリアと違い父に気に入られた。

それが悪夢の始まりだ。

フランの力があれば夜を獲れる。醜悪に歪んだ父親の顔をレミリ

アは今も忘れない。フランの力を試すため、あらゆる試練を父はフランに課した。日に日に擦り切れてゆくフランの姿を、どうしてもレミアはそのままにしておくことはできなかった。

だから使用人に頼み、考えを巡らせ、父親の魔の手から妹を取り戻すためにレミアは計画を練ったのに。一人の使用人の裏切りで全てが終わった。

「惨めだなレミア。スカーレット。お前は惨めだ。ひとりぼっちの卑しい娘」

笑いながら見下ろしてくる吸血鬼の紅い瞳。

悔しくて、悲しくて、父の言う通り惨めで、それでも逃げるしかなくて。居場所のなくなった屋敷から追い出されて数ヶ月。常に惨めな想いを握り締め、故郷から遠く遠く離れるしかない。それがどれだけ気に入らない行為でもそれを続けるしかないことが余計に心を掻き巻く。

青い髪を小さく揺らし、枯れ果てた目元を強く擦る。常に妹への罪悪感と、自分の無力感に打ちのめされて。高鳴るお腹の音に手を添えて耐え、鼻を吸るも涙も出ない。頼る相手も、話す相手もいやしない。最後に零された父の言葉が楔のようにレミアの心に突き刺さったまま。ひとりぼっちの卑しい娘。手に取れるものなど一つだけ。フランから誕生日の日に貰った、首から下げた十字架のネックレス。洒落が効いている贈り物を握り締め、レミアはまた鼻を吸る。

——ドカッ！

そんなレミアの隣で響く乾いた音になる、小さくレミアは肩を跳ねる。背に付けた壁から感じた衝撃に少し背を浮かせ、レミアは恐る恐る顔を横へと向けた。感じた衝撃の通り、隣に佇む人の影。擦り切れた黒い着物を風に揺らした赤っぽい髪をした男。口には安っぽい煙管を咥え、首を擡げると男はボロ布を僅かに捲り中に隠れたレミアの顔を覗き込んだ。月明かりを反射して輝く紅い瞳と見合うは、青翠色をした瞳。男は眉を顰めて煙管を口から離すと、ふっと夜空に紫煙を吐いた。

「……………」なんだ、人がいたのか。今宵寝るのに丁度いいぼろ切

れがあると思うたのに。俺もツいてないな」

つまらなそうにまた煙管を啜えて紫煙を吐く男の無遠慮さにレミアはムツとするが、言い返す元気もなくそのまま壁にもたれてポロ布を纏い直す。夜風の寒さに鼻を鳴らしながらレミアは動かず、そして何故か男も動かない。ちらりとレミアが男を見れば、夜空を見上げて煙を吐くばかり。身なりからして家なき浮浪者かと首を傾げる吸血鬼の腹が再び鳴り、レミアは気恥かしさからギョツと体を縮こませる。他人であろうと近くに誰かがいる時に響く自分勝手な胃袋に向けてレミアが内心で悪態を吐いていると、軽く肩を小突かれる。

「いるかい？」

男は着物の懐から小さな包みを取り出して、中にあるものを少女へと差し出した。薄ら笑みを浮かべる男と差し出された食べ物と交互にレミアは見つめ、その様子に男は小さな笑い声を零す。

「そりゃあ『ぱん』とか言う食い物らしい。俺もさつき口にしたがどうにも口に合わなくての。白飯の方が口に合う。残り物でよけりゃあ、だが」

笑う男にレミアは顔を背け、より小さく縮こまった。いくらお腹が空いていても、施しは受けたくない。腐ってもレミアは良家の娘。それも異国の地で。知らない者に。顔を前へと向ければ、行き交うのは、スーツ姿の欧州人と着物姿の極東人。その両極端な人間たちを眺めて、またレミアは鼻を嚙る。

「なんだいらないのか？ あんなに盛大に腹を鳴らすものだからてつきり腹空かしだと思っただが。いらなひとなるとこれは鼠どもの晩御飯になるしかないのだがなあ。どうだ？」

しつこい！ とレミアは身を振るが、胃袋は素直である。しばらく何も入っていない腹はぐうぐう鳴る。我儘なお腹を睨みつけて、レミアは力の入らない手でお腹を叩くが、全く言う事を聞いてくれない。そんなレミアに笑いながら男はパンを差し出した手を引っ込めず、鬱陶しさから「いらない」とレミアは手を振って男に手を払おうとしたが、強引に口にパンを捻じ込まれた。

「なんだ喋れるんだな外来の娘。童は貰えるもんは貰っておくものぞ？ 痩せ我慢しても仕方がない」

お節介焼きの男にレミリアは牙を剥こうと口を開きかけるも、口の中のパンに抵抗虚しく意識を持つていかれる。久し振りの食料。どいう経緯であろうと、口に入れば味わうだけ。ボソボソのパンは決して味が良いとは言えないが、それでもその味に貪り付き、両手で急いで口へと振じ込む。急ぎ過ぎて咽せるレミリアに男はまた笑い、「ゆっくりでも、ぱんは消えん」と紫煙を燻らせる。

施しを受けた。それも人間に。

後から湧き上がって来る新たな無力感に自己嫌悪したところでパンを食べた事実は消え去らない。腕を掴み呻くレミリアへと男は目を落とすと、困ったように肩を竦める。

「で？ 外来の娘が一人でなんでこんなところにいるのだ？ 家出か？ なら早く戻らんと置いていかれてしまうぞ。こんな小さな島で一生を終えたくはあるまい」

男は指で地面を小突き、遠く路地の先、港に停泊している帆船へと目を向けた。

十七世紀、日本。

徳川幕府が日本を統一した世にあつて、日本は海外と通ずる道を断つ。所謂鎖国。だが、そんな日ノ本の地で唯一外国と取引できる小さな島が存在した。今で言う長崎の端に造られた小さな人工島。出島と呼ばれる小さな島でのみ、対ポルトガル貿易、対オランダ貿易が行われていた。厳しく規制された小島の中で、なぜ小さな少女が一人ぼろ切れ纏つて蹲っているのか？ それが男には分からず、家出なら早く船か宿に戻るのがいいと促すが、レミリアは動かずそっぽを向くだけ。唯一零した言葉も、「……子供じゃない」というさしてどうだつていいものだ。

「ほう童子ではないと？ その背丈でよく言ったものだ。早く帰らないと親が心配するぞ」

「私の親は心配などしない！ あっち行け人間！」

なにも知らないくせにツ！ とレミリアは吠え、男は困ったように

煙管を噛む。息を荒くするレミリアに、どうやら虎の尾を踏んだらしいと眉をハの字に曲げて、「そりゃ悪かった」とバツ悪そうに詫びた。「だがならなせこんな所にいる？ 身なりから見ても……まさか密航か？ そりゃあ重罪だぞ。童子一人で危ないの」

「だから子供じゃない！ 私はもう百歳を超えてる！」

「ひやくさいく？」

布に包まるレミリアの頭の天辺から足元までを見て、下手な冗談だと男は大きく笑った。「笑うな人間！」とレミリアは怒鳴るが、どう見てもレミリアは十歳ほどの子供にしか見えない。男の五倍以上生きていると叫ぶ少女に「そりゃ悪かった」と笑いながら男は謝り、目尻に溜まった雫を指で払う。

「では、えー、あー名前はなんて言うのだ？」

レミリアは口を引き結び、どうでもいいと答えようとしたが、一応は食料をくれた相手。気に入らなからうとレミリアの胃袋が限界であったことも真実であり、最低限の礼は払わねばならないという貴族としての矜持がレミリアの名を紡がせた。

「……レミリア＝スカーレット」

「れみ？ なんだ外来人の名は難しいな。れみいと呼ぼう。では、れみいはなぜここに居るのだ？ 女子一人で来るようなところではあるまいに」

早速名前を略しだす無礼者に言う必要はないとレミリアは顔を背けるが、お節介な男は諦めるという事を知らないのか全くめげない。「んー？」と首を捻る男の口を閉ざすには、この場から去るか、言葉を返すか、物理的に口を開けなくするかの三択。

だが、レミリアはもうくたくたで、何よりパンを食べたとはいえ未だに上手く力が入らない。去るのも怠く、人ひとり力で負かすのも気だるい状況に、二番目しか選ぶ選択肢がない。それでも正直に答えるなどという事はあるはずもなく、「……お前は？」と聞き返すことで話を反らした。そんなレミリアの問いに男は腕を組むと律儀に答える。

「俺は用心棒なのだ。それでここに居る」

「用心棒？」

「銭を貰って頼まれたものを守る仕事ぞ。今は丁度ここに運ぶためのものを護衛して来た帰りなのだ。夜も遅いし宿を取ろうと思ったんだが偉く高くてなあ、それで野宿というわけだ。なかなかいい場所を見つけたと思っただが、そしたられみいが先に居ったという具合だな」

特に言い淀むこともなく答える男に「ふーん」と適当な返答をレミリアは零す。そんなレミリアに「それじゃあ、れみいの番だな」と男は笑い、レミリアは口を痙攣させた。ここで野宿すると言った通り、男に動く気はなく、寝る前の暇つぶしとばかりに話を続けるらしい。煙管を啜え直して紫煙を零す男を見上げて、レミリアは弱く自分の肩を抱いた。

「……別に、家を追い出されただけ。でも、絶対帰るわ」

「……そうかい、……遠いのか？」

「距離は関係ないわ、絶対帰るの」

「……ひとりでか？」

「二人ですよ！ もう誰にも頼らないわ絶対！」

みしりツ、と音が聞こえるかのように歯を食い縛るレミリアの姿に、力なく男は肩を落とした。震えるボロい布切れをしばらくの間横目に見つめ、大きく息を吸い込んで肺を紫煙で満たすとゆっくり長く息を吐く。「なあ……」と男は間を置いて、レミリアへと顔を向けた。言わずにはいられないと言うように。

「一人じゃあできないこともある。頼れる時は誰かに頼った方がいいぞ」

「……それで裏切られても？」

「……そりゃあ——」

言葉に詰まった男に小さく笑い、レミリアは強く顔を顰める。鼻腔を擽る潮の香りに交じった獣の匂い。力ない体になんとか力を込めてレミリアは立ち上がると急いで歩き出す。背に掛かる男の声に一度振り返り、「パンありがと」と小声で礼を返してレミリアはもう振り返らず、ただ走る。

走る速度は速いとは言えず、肌を撫ぜる風の心地悪さにレミリアは荒い息を吐いた。物凄い速度で近付いて来る人ならざる者の匂いから逃れるように足を進めるが、風に搦り取られるようにレミリアの体は宙に浮き、無様に砂の大地へと身を転がす。

顔に降りかかった砂埃を振り払い顔を上げたレミリアの先に光る二つの眼光。鋭い牙と重く響く唸り声。月明かりを突き刺すような灰色の毛並みを見て、レミリアは小さく後退さった。

人の形をしていながら、頭は狼。手足から伸びる鋭い爪は、容易く肉を裂いて骨を断つ。ルーマニアの屋敷で何度か見た怪物の姿。その姿を見てレミリアは強く歯を食い縛った。ウエアウルフ。吸血鬼、フランケンシュタインと並ぶ三大怪物。最悪の裏切り者。

「貴様はッ!!!」

内で渦巻く激情を吐き出しレミリアは握った拳を握るが、力の足りない吸血鬼のスピードに遅れを取る人狼ではない。退屈そうに人狼はレミリアの覚束ない足を払って地に転がすと、その小さな体へと足を落とし軽く踏み付けた。口から空気を吐き出す吸血鬼に嘲笑を零し、人狼は大きく満月に吠える。

「やっと捕まえたぞレミアアスカーレット。鬼ごっこが得意らしい、こんなところまで逃げやがって。おかげで俺までこんな島国に来ることになった。お前があの時死んでいればこんな島国に来ることもなかったと言うのに」

「貴様ッ! この、裏切り者! アイツに口添えしたな!」

悲痛なレミアアの顔を味わうように人狼は舌舐めずりし含み笑う。熱くなっている小娘がなにを叫ぼうが、そんなものは力ない者の叫び。負け犬の遠吠え。敗者に敗北の二文字を突き立て刻み込むように、鋭い爪をレミアアの首元へと緩く当てる。

「小娘一人に協力してなにを得られる? お前を売ったおかげで俺の地位は上がったよ。その最初の仕事がお前のクビを持って来ること

というわけだ。お前はもういらぬとき！ 親に捨てられた哀れな娘！」

「くそッ！ くそッ!!? 貴様ッ！ 殺してやる！」

「はッ！ 殺す？ 俺を？ どうやってだ！」

強く踏み締められた人狼の足にレミアアの肋が痛く軋む。息を詰まらせ呻き声を吐き出した。それがご馳走であるというように人狼は歯をカチ鳴らし、潤む吸血鬼の瞳を覗き込む。それが溢れる様を見逃さないように。首に当てた爪をちよつとずつ押し込んで。レミアアが最も聞きたくないだろう言葉を吐く。

「あれから毎日お前の妹の泣き叫ぶ声が館に響いて止まないぞ。お前が失敗したからなあ。良かったな知れて、俺に感謝しろよレミアア!! スカーレット」

「ふざけっ!!? 貴様らフランをッ！ 私のたった一人の妹をッ！ 許さない！ 絶対許さないからな！」

「お前の許しなんて必要ないな。無様なレミアア、ひとりぼっちな哀れな娘」

—— 嫌だッ！

—— 嫌だッ！

声にならない悔しさが、レミアアの目の端から零れ落ちる。遠い島国で誰に知られることもなく命を散らす。妹の笑顔を再び見ることができず、ただ悔しさと自己嫌悪と妹への罪悪感が胸の中で掻き混ぜる。拳を握り締め、口から出る声は言葉になることなく夜空に木霊するばかり。それを聞いて身を躍らせながら、悲痛な声に人狼の笑い声が不協和音となって混ざり合った。

「くっはっは！ なんだその拳は、殴れるものなら殴ってみろ！」

「じゃあ遠慮なく」

「は？ —— ツ??」

間の抜けた人狼の声が置き去りにされ、巨体が木造の倉庫の壁に突っ込んだ。目を瞬いたレミアアのぼやけた視界の中に立つ、短い赤毛を揺らす青い瞳の男。振り抜いた拳を怠そうに振って、呆けた少女の紅い瞳に笑みを与える。

「だから言つたらうれみい、一人じゃあできないこともあるつて。頼れる時は頼つた方がいいつてな」

「貴方……、なんで……？」

「んー？ 童子が泣く姿は見たくなくてなあ。……まあ個人的な理由だ気にするな」

柔らかく笑つて差し出される男の手をレミリアは弱々しく見つめ、おずおずと手を差し出そうとすれば、強引に男に掴まれて引つ張り起こされた。同時に轟音を上げて吹き飛ぶ倉庫に遠くで叫び声上がり、困つたように男は頭を掻いた。這い出て来る人狼の鋭い眼光が男を射抜き、男は薄く笑い声を上げる。

「困つたなあ、これは早く終わらせないと人が来るぞ。それにしてもあれは……妖？ 初めて見るタイプだな。と、いうことはれみいも妖か。それなら百歳というのも納得ぞ」

「……貴方驚かないの？ 怪物を見て」

「俺は用心棒だと言つたらう？ 特によく相手をするのは実は人じゃあなくての。出島に来る前は東北の方で用心棒をしていたのだ。遠野辺りで、つと言つても分からないか。だからまあ見ておくといい、極東の侍つてやつをの」

「良い刀が落ちてるな」と笑いながら、吹っ飛んだ倉庫の残骸の中から男は刀を拾い上げる。軽く足を踏み調子を確かめながら、男は散歩にでも行くかのような気楽さで人狼に向かい一步を踏む。唸る人狼の声に身を震わせて、男は体の力を抜く。

「なんだお前は？ なぜその小娘を守る？ 弱つちい人間が」

「童子を泣かせるような奴は糞だ。つまり俺は貴殿が気に入らない。そんなわけで斬らせて貰うぞ妖」

微笑む人間の顔が癩に触る。斬ると言いながらまるで構えず、ただ歩いて来る男に人狼は牙を覗かせ唸り姿勢を落とした。隆起する動物的な筋肉の動きを男はゆったり眺めながら、一瞬の後、人狼の姿が消え、遅れて大地の抉れる音が轟いた。

銃弾のように地を駆ける人狼の姿を見ることは叶わず、目も向けず突つ立つ人間を見て人狼はほくそ笑んだ。

隙だらけ。

一向に闘いの姿勢を見せない人間の首を跳ねるなど、片手間にやるより簡単だ。男がどんな叫び声を上げるのか、気道を切り裂かないように最低限の致命傷を与えようと爪を伸ばす人狼が男の横へと一步を踏んだ瞬間、

——コキッ。

軽い音と共に人狼の視界が上へと吹き飛んだ。男から満月へ。視界に映り込んだものの急激な変容に、人狼の口から間抜けな声が漏れそうになるが、顎の痛みを引き摺られて人狼の口からは言葉が出ない。その痛みの正体は、人狼もよく知る拳の痛み。目玉を動かした人狼の先に、隙だらけの状態から一転、拳を振り抜いている男の姿に人狼の目が見開かれる。

「おまつ……!?」

「抜ケン術。寂れた流派の寂れた技さ。な？」

「はっ。」

時が跳んだように、いつの間にか抜き身の刀を肩に置いた男の姿を最後に人狼の視界が斜めにズレた。

『抜ケン術』。

斬る技術、殴る技術というよりもその間の技の集大成。刀を抜く、拳を振るう。それをいかに無駄なく気取らせず繋ぎを見せないように行うか。極めれば極める程に普段と戦闘時の違いはなくなり、ただの動作が技となり昇華されてゆく。ただ歩く姿が既に決死の構え。隙だらけが必殺の間合い。初見殺しを極めた技術。達磨落としてのようにバラバラに崩れ去った人狼の姿に、レミリアはぽかんと口を開けた。

「さてと、じゃあのれみい。捕まったら大変だ。お互いさっさと退散するでしょうぞ」

お達者でー！ と手を振り去ってゆく男の背をしばらく呆然とレミリアは見つめていたが、はっと頭を振ると、慌ててレミリアは男の

背中へと飛び付く。急に身にかかった重さに男は動かしていた足を緩めて、背中に張り付く吸血鬼へと目を向けた。

「どうしたれみい、悪いがもう行かねば。あの倉庫を見てみるといい。言い訳が大変だ。俺は捕まるわけにはいかなくての」

「待って！ 貴方、……」

強い。お腹いっぱいでも全力ならば無論レミリアも追ってきた人狼に負ける気はない。が、フランの待つ館には、より多くの妖が、より多くの裏切り者がいる。なにより憎い父親が。一人で全てを打ち崩すのは、レミリアでも不可能だと、悔しいが分かってしまう。

逃げて、逃げて、逃げ続けて、それだけでは永遠にフランの下に辿り着けない。いい加減前に進まなければならぬ。妹へと足を向けなければ、永遠に欲しいものは掴めない。本音を言えばもう誰にも頼りたくない。が、それでも前に進むため、なんとか引つ込みそうになる言葉をレミリアは絞り出す。

「——お願いっ、力を貸して欲しいの！」

「ううん……、悪いが断る」

少女の全力のお願いを、あっさり男は両断する。

「なんでよ!?? 頼れる時は誰かに頼れって言ったのは貴方じゃない！ 言ってることが違う！」

「俺は用心棒なのだ、タダ働きはしないのだ。俺も仕事で力を貸しているからの。そんなわけですまないの、れみい」

「あ、ちよつと!??」

レミリアを引き剥がして歩いてゆく男を見つめ、レミリアは齒噛みする。人間であろうと弱くはない。なにより極東の者ならば、故郷にいるレミリアの父親の息がかかっているはずもない。フランのことを思えばこそ、今はなんであれ力が必要だ。首に揺れるフランから貫った十字架のネックレスを握り締め、レミリアはもう一度男を引き止める。

「待って！ なら、そう！ 私が貴方を雇う！ それならいいでしょ！」

「なごっ？」

「これは！ 私が妹から貰った一番の宝物……、高価なものよ。これを貴方にあげるわ！ だから……力を貸して！ 妹を救うために！」

強く輝く紅い瞳に、男は困ったように頭を掻き、レミリアが握るネックレスを見つめる。「俺は伴天連じゃあないのだが……」とぼやいてネックレスを見ようと手を伸ばして来る男の手をレミリアはぺしん、とはたき落とし、見えないように胸元に仕舞う。

「まだダメよー。あげるのは妹の下に着いた時、貰うだけ貰って逃げられたらイヤなもの」

「俺だつて真つ当な用心棒だ。そんなことしないが……、うーん、まあいいか。ちなみにれみいの妹君はどこにいるのさ？」

「海を渡った先……ルーマニアに」

「るーま……どこだ？ 海を渡ったつて外国か？ そりゃあ……」

「妹を囚らえてる父を討ち倒し、妹を救う。そして私が新たな当主になる！ 妹と自由に暮らすために！ そのために貴方の力を貸して。答えは？」

口を引き結んだレミリアの顔に目を落とし、男はしばらく考え込む。少女の紅い瞳を見つめながら、懐から煙管を取り出し火を点けると紫煙を吐いた。何度かそれを繰り返し、煙管を口から離すと乾いた唇を舐める。薄い潮の味に小首を傾げ、「いいだろう」と紫煙と共に男は吐き出した。

「……なら誓つて、私は絶対に裏切りだけは許さない。その時は地の果てまで追つてお前を殺す！ 誓える人間？」

「そんなことしないさ、れみい。引き受けたからには任せてくりやれよ雇い主殿」

「雇い主殿？ 優雅さに欠ける呼び方ね。私のことはレミリア様、もしくはお嬢様とでも呼びなさい」

「れみりゃ？ あー、お嬢様にしよう。よろしく、れみいお嬢様」

「ええなら行くわよ。頼むわ、……そう言えば貴方の名前は？ 聞いてなかったわ」

レミリアの問いに男は「あー」と呻き天を仰いだ。すぐに名を言わない男にレミリアは怪訝な顔を向け、慌てて男は言葉を探した。男は

目を泳がせて周囲を眺め、天に輝く月を望む。

「満月……」

「なに？」

「十五夜満月だ。よろしくお嬢様」
じゅうごやまんげつ

「なにそれ……、ネーミングセンスを疑うわ」

「ほっとけ、他人の名ぞ。今からだ、西洋には直接は行けないぞ？」

行けて大陸の方だが」

「なんだっていいわ、妹に近づけるのなら」

前に行く小さな雇い主の背を見つめ、満月は肩を竦めて歩き出す。まん丸い月の見え方は西洋では違うのだろうか？ と少し興味を抱きながら、満月は小さな背中を追いかけた。口元を緩やかな三日月に変えて。

レミリアちゃんと門番小娘

突き刺さる視線に呻きながら、レミリアは前を行く満月の背を追った。なんでもないように刀を背負いスタスタ前を歩き続けている満月にレミリアのストレスゲージは高まっていき、足元の小石に躓きレミリアがバランスを崩しても気にしない満月の姿に、遂にゲージが振り切れる。

「待ちなさい！ このすつとこどつこいッ！」

光陰矢の如し。満月とレミリアが会ってから既に数週間の歳月が過ぎた。この数日でレミリアは嫌という程満月がお人好しでなかなかに適当な性格であることを知る。特に子供にだ。

道端で腹を空かせている子供がいれば「食べるよ」と言っただけでしもなく食料を渡す。子供が売りつけてくる食べ物を必ずひとつは買う。マツチ売りの少女が満月の前に現れれば、マツチを全て買い切る勢いだ。レミリアも満月も手持ちの銭はほとんどないというのに、おかげで満月に至っては既に懐はからっから。

銭勘定もできず、見知らぬ子供相手に散財する用心棒が、ただでさえ言う事をあまり聞かないと言うのに、異国の地で好き勝手動くその背に遂にレミリアの飛び蹴りが飛来する。

が、満月に当たったとレミリアが感じた瞬間するりと満月の像は消え、いつの間にか横にスライドしていた満月に子供を抱き上げるようにレミリアは抱えられてしまった。ため息を吐きながら満月はレミリアを静かに下ろし、レミリアの全身を覆っている黒布がズレないように布端を巻き直した。

「どうしたお嬢様、そんな活発に動いては危ないぞ。聞いた話では、お嬢様は日光に弱いのだろうか？　なのにそんなにお転婆だと困り申す」「誰のせいよ！　知らない土地で、しかも昼間に！　それにこんなに人間だらけの中ずんずん先に行かれる私の身にもなってみなさいっての！」

そう言っただけの周りを見よと言わんばかりにレミリアは大きく手を広げる。往来を歩く人々の数は、ルーマニアや日本の比ではなく、その

着ている服も西洋や極東とは違った独特なもの。日ノ本の民が大陸と呼ぶ地、今で言う『中国』、その都である北京の大路地の上にレミアアと満月は突っ立っていた。

聞きなれない言語で会話する黒布に包まった小人と、見慣れぬ刀剣を背負う男に周りの視線が集中し、「雑技の練習でござい」と満月は下手くそな大陸言葉を叫び手を叩くと、レミアアの背を押し足を動かした。

「気持ちには分かるがね、俺の気持ちも組んでおくれよ。アテが外れて北京なんかにいるのだぞ？ お嬢様のせいでもあるのだからの」

満月の文句に「うぐつ」とレミアアは息を詰まらせて渋々自分も足を動かした。出島で人狼が暴れた折、捕まるのは面倒だとすぐに朝鮮へ向けて出航しようという蘭国オランダの船に密航し、その場は事なきを得たのだが、そこから西洋に船で向かおうとした時に問題が起きた。

密航者だろうとなんだろうと、人を選び袖の下さえ渡せば意外とどうにかなるものであるが、どうにもならない場合がある。袖の下よりも巨額のお尋ね者、賞金首である場合。朝鮮で西洋行きの船を待つ一週間の間に、満月が西洋人からルーマニアの情報を得ようとして差し出された一枚の紙。「レミアア＝スカーレット」と名前と共に書かれていた人相書きを見て満月は盛大に口端を痙攣らせた。

西洋に向かうまでの長旅で、人相書き溢れる航路で向かうのは不可能であると結論付けた満月は、仕方なく陸路でルーマニアを目指す事を決定した。長旅が恐るべき長旅になったことに対してレミアアは満月が「やっぱ辞める」と断念するのではないかと危惧したが、意外にも「一度引き受けたのだから構わん」と了承し、もう北京までやって来た。

満月がどういふ思惑でレミアアと共にいるのか。

レミアアも気にはなっているが、どうにも聞くタイミングがなく、折角仲間にできた融通が利きづらいが、それでも有能な人間を手放したくはないために聞くのを見送っている。

「……それにしても、なんかこの都ピリピリしてるわよね。何故かしら？」

レミリアの文句を律儀に聞いて、隣を歩く用心棒からレミリアは視線を外すと周りの景色へと目を向ける。華やかな都の中であって、人々の顔はどこか暗い。それに反して厳しい目つきをした刀剣を携えた者など、ちぐはぐな人間たちの様相にレミリアは首を傾げ、その問いには隣を歩く用心棒が答えた。

李自成の乱。

1640年代の中国、1627年と1628年。陝西と呼ばれる土地で起こった大旱魃を切っ掛けに、農民の反乱が勃発する。ただの百姓一揆と侮ることなかれ、多くの農民が一念発起し、現体制を打倒するために立ち上がった。この反乱は長い年月を掛けて仲間を集め、1641年には洛陽を陥落させ、1644年には北京城までもを手中に収める。その際の首領が李自成。満月がよく用心棒をしていた相手であるオランダ東インド会社が平戸現在の長崎県平戸市にあった商館を出島に移したのが1641年のこと。この商館の大移動の際に満月は用心棒として積荷のいくつかを守った帰りにレミリアと出会った。

時代は正に新たなページを描いている真つ只中。李自成の軍勢がいつ北京まで伸びてくるのか。人々の不安と緊張が押し込められた北京の都は、都自体が触れづらい空気を放っており、絢爛豪華な建造物に溢れた都でありながら、昼間でも薄暗く目に映る。

農民の大軍勢が迫って来ているのだ、とあっけらかんと答える満月に、それやばくね？ と、現実逃避の影を浮かべた瞳をレミリアは向けるが、満月は黒い布の隙間から覗く紅い瞳に笑みを向けた。

「寧ろ幸運ぞ。このゴタゴタに便乗して俺たちは農民たちの流れの逆を行く。北京さえ抜ければ今は関所も緩い。西安、昔で言う長安に向かうのだ」

「ちようあん？ どこよそれ、そこに行くとなにかあるの？」

「絹の道だよお嬢様。聞いたことぐらいあるだろう？」

絹の道。ヨーロッパと中国を結ぶ流通の街道。西端はローマ、シリア、東端は洛陽、長安、日本と諸説あるが、ユーラシア大陸を東から西へ、西から東へと向かう道であることには違いない。

絹の道が確立されたのは、レミリアが生まれた頃よりも遙か昔。その存在を当然レミリアは知っているが、勿論自分で歩いたことなどない。だいたいこの時代主流なのは海路であって、わざわざ陸路を歩いて行くようなモノ好きなどほとんどいない。やたらと学のある満月を不思議に思いレミリアが満月の横顔を見上げていると、その視線に気づいた満月は肩を竦めた。

「出島で用心棒なんてしてるとな、いやでも少しは外来言葉を覚えるしかない。それに、用心棒特権で俺は大陸にも何度か来てるからの、それで大陸言葉も少しばかり喋れるというわけだ」

「それにしたって詳しいわよね。貴方用心棒の前はなにをしてたの？」

「……………仕えてたんだ」

「仕えて？ それっていったい……………」

「それよりれみみいお嬢様よ、見てみるといい。ここでしか見れないぞ」
下手なはぐらかし方をする満月にレミリアは苦い顔をするが、無理矢理満月に両手で頭を挟まれ向きを変えられて、視界に映り込んだものを見て口をゆっくり引き結んだ。

中国の七大古都のひとつ、北京の都が象徴『紫禁城』。

1400年代に改築されてから1900年代まで、長らく皇帝の居として使われた荘厳な宮殿。青空の下に根を張った、夕焼け色の城にレミリアの目が奪われる。口からは感嘆の息を吐き、大地から生えた夕日が形を得たような城の美しさに小さく笑い声を漏らす。この紫禁城は、李自成の乱の際に一度焼失してしまうため、レミリアが目にした紫禁城は、焼失する前の最後の姿。紅い宮殿へと小さな手を伸ばし、手を開いても収まりきらない強大な権力の象徴に想いを馳せる。
「気に入ったのかお嬢様？」

「……………ええ、素敵ね満月。特に色が素敵。私も屋敷を持つならあんな色がいいわ……………」

「そうかい……………、建てたら見せておくれよ」

「ええ絶対建てるわ、当主になって」

「そろそろ行こうお嬢様。あんまりじろじろ見て宮仕えに捕まりたく

はないからの」

満月に背を押され、紫禁城から目を外すことを惜しみながらレミリアは異国の宮殿の姿を目に焼き付ける。夕日のような色を持つ屋敷でフランドールと過ごす日々を夢見ながら、レミリアは満月と共に人混みへと紛れて行つた。

「困つたな」

またもや子供の売り子の笑顔に負けて買った中華まんを椅子に座りほうばりながら満月は天を仰いだ。青い空が鬱陶しい。同じように中華まんを口へと運び、暑い肉汁にはむりと噛み付いた中華まんからレミリアは口を離し、火傷した舌を引つ張りながら満月へと目を向けた。

「はにがよっ？」

「舌引つ込めてから喋っておくれお嬢様。農民たちの反乱のおかげで北京から抜ける関所の検問が厳しいみたいでの」

「それが？」

「俺もお嬢様も異国の者だ。ただでさえ北京に来るまで苦労した。まあ東インド会社に口を聞いてもらつて北京に届け物でここまではなんとか通せたが、北京から出るとなると話は違う。東インド会社の助けももう得られないし、巡礼者のフリでもするかね？」

神に祈りを捧げる自分の姿を幻視して、それは嫌だと口をへの字に曲げるレミリアに肩を竦め、また一口満月は中華まんを口に運ぶ。はふはふと忙しく飲み込んで、唇を舐め、また天を仰いだ。諦めムードを滲ませる満月にレミリアは雑に頭を掻き、弱々しく満月の着物の裾を引つ張る。

「……なんとかなるわよね？」

レミリアの問いへの答えは沈黙。満月は言葉を吐く代わりに口に

中華まんを突っ込んだ。最悪関所を力づくで突破することも不可能ではない。ここ数日満月に食べ物を得たレミリアの力は、出島に密航してきた時よりも大分戻った。が、満足とは言えない。吸血鬼にとつて一番大事なものを口にしていないからだ。今最も欲しくないものは騒ぎ。通り魔吸血鬼事件でも起きて、通る国通る国お尋ね者になつても困る。故に力づくで関所を突破する手も取りづらく、満月は中華まんを食べ終え煙管を啜えると火を点けた。立ち上る紫煙をしばらく眺めた後、用心棒を見上げたまま無言で固まっているレミリアへと目を落とす。

「……手があるにはあるのだが」

「じゃあー！」

喜ぶレミリアだが、難しい顔で腕を組む満月の姿にすぐに喜びは消え失せて、レミリアは振り上げた腕を下ろした。

「……なにかあるの?」

「あるような……、ないような……」

「なによそれ……」

言おうか言うまいか満月は悩み、時間を追うごとに痺れを切らしたレミリアが足をばたつかせるのを見て結局口を開く。

「一つだけな、さっきの売り子に聞いたのだが」

「それ大丈夫なの?」

「さあ? 兎に角、向こうの方に見える山があるだろう? あの山なら関所がなくて抜けられるそうなのだが……」

「だが?」

「なんでも妖怪が出るから抜けられないらしい」

なんじゃそら、と呆れた顔をレミリアが浮かべるが、本当にそうなのだから満月はなにも言えない。文句は売り子の子に言ってくれと紫煙を吐く満月に、しかし、そう言うことなら話は早いとレミリアは中華まんを急いで口へと詰め込み、暑さに負けて吐き出しそうになるのをなんとか堪えて飲み込んだ。ただ舌が火傷する。

「あつっ!?? ハア、妖怪ならこつちのものじゃない! 話して通して貰えばいいのよ!」

「そんな上手くいくかね？」

「いかなくても用心棒がいるもの、行くわよ満月！」

椅子から飛び降り歩き出すレミリアの背に紫煙を吐いて、煙管から火種を落として踏み消し満月も立つ。意気揚々と前を行くレミリアの姿が逆に不安であるのだが、雇われ者は行くしかない。

そうして歩き幾数時間。すっかり日は傾いて、空は赤らんで来てしまっている。そんな夕日の下を歩く黒い布に包まった小人は、ふらふらと足は千鳥足。先の長い坂道を見上げ、小さな腕を振り上げた。

「長い！　なんで見えてたのにここまで来るのにこんなに掛かるの？！」

「大陸は広大な、もう夜になってしまっぞ。こんな場所じゃあ宿もないし……」

「あら私夜行性なのよ？」

「昼間も起きてたのにいつ寝るのだ？」

昼間人に紛れた方が動きやすいため、曰く夜行性の吸血鬼はすっかり人の生活サイクルに馴染んでいる。夜になればぐうすか寝ているレミリアの姿を思い出しにやける満月に眉を吊り上げ、ふらつきながらもレミリアは腕を振り上げ満月に張り付いた。

「なら血を寄越しなさい！　そうすればすぐ復活するわ！」

「俺は低血圧なのだ！　そんなことされたら動けなくなる！」

「使えない用心棒ね！」

「俺は用心棒であって食料庫じゃあないのだよ！」

少しの間騒ぎ合えば、それも疲れるとすぐにレミリアはへによりとヨれる。元気がいいのか悪いのか分からない雇い主に呆れながらも、満月が坂の先へと顔を向ければ、視界を遮る大きな山門が地から伸びている。

夕日に照らし出された年季の入った山門は、小綺麗に見えるが人の気配が全くない。山へと続く道に途中にあった家々とは、世界が違うように巨大な木造の建造物は、岩のように行く手を遮り堂々と建っている。その山門を彩る貔の彫刻に目を這わせて、満月は嬉しそうに手を叩く。今宵の宿が決まった。

「よかった、屋根の下で寝れるな」

「寒そうだけど、ないよりはマシかしらね。そうと決まれば寝床を確保ね」

山門まで辿り着けば夢の世界へ旅立つだけ。最後の力を振り絞りレミリアは山門へと強く足を踏み出すが、山門に手が掛かるところでふと、レミリアの手が止まる。レミリアの鼻先を掠める妖気の流れ。嗅ぎなれないその匂いに引っぱり張られ天を仰いだレミリアの紅い瞳の中に幾本の紅線が舞った。

薄く息を吐き出して身構えようとしたレミリアの体が意思に反して後ろへと吹っ飛んだ。首の襟を掴む満月の姿を最後にレミリアの視界は天と地を行ったり来たりかき混ぜり、すっ転がった体を起こしたレミリアの目の先で拳が交差する。

ゆるりと靡く紅い髪が突き出された拳を絡め取るように巻きついたようにレミリアには見えた。次の瞬間空が弾けるような音と地を砕く轟音が打ち鳴って、満月の体がレミリアに向かって飛翔する。くるりと身を翻した満月の額からは一筋の紅い雫が垂れ、それを拭う満月は瞬きもせずに山門を睨む。

一瞬の相對。地から間欠泉が噴き出したかのように、突如落ちて来た紅い光へとレミリアは顔を戻す。

夕日よりも紅い妖が山門を背に立っている。

鮮紅の長髪を揺らし、龍のように鋭い目。森で染めたような緑のチャイナドレスのような格闘服に身を包んでいる。だが、服の至る所が解れており、両腕には荒んだ包帯のような白い布を巻き付けて、片腕の白布は大きく弾けていた。白布の解れた方の腕を軽く振り、右足を一歩紅い妖は前へと出す。

「……」——何者かは知らないが、ここから先へは誰であろうと何人足りとも通しはしない。去れ。さもなければ追い返すまで」

鋭い眼光がレミリアと満月を隙なく突き刺す。紡がれる言葉には敵意や殺気の類はなく、ただ淡々と紡がれるのみ。だが、その言葉に詰め込まれた力強さに嘘はなく、背にした山門と同じように揺らぎない。それを受けてレミリアは……、

「……なに？」

あまりに流暢な大陸言葉故に全く聞き取れなかった。不動の紅い妖を前に、あたふたと満月の方へとレミアは振り返る。目を反らすべきではないと、レミアに顔を向けられても同じく微動だにしない満月に、レミアは腕を垂れ下げた。仕方なく顔は動かさず、紅い妖の言葉を満月は訳す。

「誰も通さねえよボケと」

「なんでよ!?？」

「知らぬ」

「ちよつと、貴女！ 私たち通りたいたいんだけど！ いいでしょうがちよつと通してくれればいいんだから！」

そうレミアは文句を叩きつけるが、紅い妖からすればわけもわからない言葉を喚き散らしているだけ。眉を顰める紅い妖に、満月が「通して欲しいと言っている」と伝えればようやく理解し、紅い妖は静かに首を横に振った。

「私は師にこの門を守ると誓った身。例え誰であろうとも決して通さず私は退かぬ。通りたくば力づくで通ってみせろ。通れるものならば」

「……なんて？」

「私は師匠にこの門を守ると誓ったんだよ、てめえらみたいな奴ら通すわけねえだろ。通りたかったら私を倒してみせな。まあ、できねえだろうがよ。と言っておる」

「本当に？ そんな口悪いのアイツ？」

「大陸言葉はそんな得意じゃないのだ」

しかし意味はそう間違っではない。言葉が通じず、話し合いにもならないのなら、相手の言う通りやるしかない。満月に頼むか自分でやるか、満月と打ち合った一撃から、相手は弱くないとレミアは見積もる。軽く腕を振りレミアが口角を上げた瞬間、重い音が山の空気を震わす。発生源はレミアの腹部。轟くお腹の音にレミアは固まり、満月は堪らずそっぽを向く。

「……………これは、あれよ。ここまで登って来たから」

「……あつそう」

「貴方がほしいほい散財するから満足にご飯が食べられないのよ！　つまり貴方のせい！」

「俺は用心棒であつてそこまでする道理はないのだ。本来飯代などというのは雇い主が出すものだろうとお嬢様？」

「そ、それはそれこれはこれ！」

「どれだよ」

わちやわちや満月に向けて騒ぐレミリアに用心棒の毒気が抜かれ、やる気がどんどん削がれてゆく。戦士と見える男の鬨気がみるみる萎んでゆくのを見届けて、紅い妖も構えを解く。再び空を震わすレミリアの腹の音を聞き、呆れたように紅い妖はほっと一息吐くと肩の力を抜いた。

「おい、その少女は腹を空かせているのか？」

「ん？　ああ、みたいだな。困ったお嬢様だ」

「……ハア、食料なら分けてやる。ここで倒れられても面倒だ。その代わり食べたら帰れ」

「ちよつと、なんて？」

「飯をやる、その代わり食ったら帰れと言っておる」

「なによ、口は悪いけど良い奴じゃない。とりあえずご飯は貰いましょう」

帰る気ないなと満月は思うも口には出さない。紅い妖はそうと決まれば話は早いと言うように、門の裏手へ姿を消すとすぐに枝と鉄鍋を手に戻り、火を起こすと鉄鍋を放りすぐに水を入れどかりと胡座をかくと腕を組み瞼を閉じた。

今のうちに行く？　という選択肢はご飯に釣られた吸血鬼の頭からは消え失せているらしく、鍋へと寄ってゆく雇い主の後を満月も追う。

野菜となにかの獣のスープ。なんの獣かはレミリアも満月も分からないが、味は悪くはない。夜へと一刻一刻近づいてゆく中で、一口大の肉を美味しそうに口に運び、レミリアは舌鼓を打った。

「悪いわね、食べたことない味だけどなかなか美味だわ」

「すまないな妖殿。わざわざ飯を作ってもらって」

「……食べ終えたら帰れ」

「それで？ 師に誓ったからって？ 貴女はなぜこの門を守っているの？」

「ご飯まで貰っておいて厚かましいという感情をレミリアは抱かないようであり、満月はスープを啜ることで目を反らす。ただ、レミリアがなんとやっているか分からず首を傾げる紅い妖を見て、レミリアが満月の裾を引っ張るので、目を反らしたくても反らしきれない。

「妖殿は師に誓ったからってなぜ門を守っているのだ？」

「……お前たちに関係あるのか？」

「お嬢様が聞きたいのだと、まあ食事の合間の戯言だと思ってくれ」

「……必要があるとは思えんな。私のことなど」

紅い妖はそう言ってスープの入った器を傾げ、押し黙ろうとするが、喋り続けるレミリアに鬱陶しそうに目を向けて、渋々器を置く口を開く。

「……昔怪我をした時に師に助けられた。治療をしてくれ、弱かった私に技を教えてくれた。私にできることなど多くはない。だからせめて門を守ると誓ったのだ」

「なんて？」

「昔怪我をしちまってよお、師匠が治療をしてくれたのさ。雑魚かつた私を強くしてくれたお礼に門を守ることにしたってわけだ。それぐれえしかできねえからよお。と言っておる」

「……本当にそんな口調なわけ？ で？ いつから守ってるの？」

「いつから守っておるのだ？」

「さあ？ 少なくとも数十年は前だ。覚えていない」

数十年。それだけ長く山門を守っていると言い淀むことなく口にする紅い妖にレミリアの手が止まる。一人早々にスープを食べ終え煙管を噛む満月とレミリアを見比べて、紅い妖は空になった器を纏め始めた。打ち合う木の器の音を聞きながら、今度は紅い妖が問いを投げる。

「お前たちはなぜここに来た？」

「なんて？」

「てめえらなんでここに来たのだ？」

「ああ……、妹を救いに行くのよ、ルーマニアまで」
「るーま？」

「お嬢様の妹を救いに行く道中なのだ。通れる道がここしかなくてな」

僅かに紅い妖の手が鈍り、すぐにまた動くと空になった鉄鍋を持ち上げた。黒い布の奥に隠れたレミリアの紅い瞳を紅い妖は見つめ、瞳の中に淀みがないことを確認すると一瞬目を伏せ立ち上がる。その瞳の中に答えを見たから。

「……帰る気はないか」

ぼつりと零した紅い妖の言葉は理解できないが、紅い妖の雰囲気からその内に潜む意味をレミリアは掬い取る。戻る理由などありはない。なぜならば、今進んでいる道こそ帰り道。妹が待つ家へ続く道。だからレミリアが言う言葉は決まっている。吐くべき言葉はひとつだけ。

「通るわ、妹が待っているのだから。満月、頼っていいわよね？」

レミリアの流された瞳に背を押されるように満月は立ち上がる。それを見据え、山門の手前に鉄鍋を置いて紅い妖も身を起こした。二つの青い瞳が重なるのを見送って、レミリアも腰を上げると数歩後ろへと足を下げた。紅い妖から膨れ上がる妖気とは違う眩い輝きに、レミリアは細い息を吐き出して、満月は小さく三日月を口元に浮かべる。同じように紅い妖も小さく口角を上げて――。

「お前はなかなかやるな人間、一撃を避けられたのは久しぶりだった」
「同じく、最初の一撃を防がれたのは何年振りか。相当使うな妖殿」

笑顔が向き合うが、間に流れる空気は人と妖の放つ空気に圧縮されて温度を上げる。静かに、だが確実に、チリチリと火花が散るように煮詰まってゆく山の空気が弾ける合図を、今か今かとお互い待つ。木々の葉音、風の唸り、吸血鬼の息遣い。それを全身の感覚器官を用いて拾い集めるが、どれも決定打には欠けるもの。だから合図は自分で決める。

「十五夜満月」

「紅美鈴」

覚えるべき名を与えた。それさえあれば他にはいらぬ。山間に流れる風に交わるように、体を沈ませ緩く手を前後に広げた美鈴の姿に満月も背に背負った刀を手に掴み足を出した。

一步、一步。

ただ散歩に行くように、柄を握り歩き寄って来る満月の姿に美鈴は驚くも呼吸は乱さず、静かにその姿に視線を這わす。隙。目に映る姿だけで言えば、刀を手に持っている以外に戦闘の姿勢は感じられない。だが、目には写らぬ氣の流れに一分の隙もないのを肌で感じ、その動きに美鈴は呼吸を合わせた。

一步、一步。

待つということなく縮まってゆく距離に緊張の糸が張られる。目の横を伝う汗の雫に瞬きすることもなく、ただ目の前に集中する美鈴の視界に、音もなく銀線が滑り込んだ。初動を見逃さぬように気を張っていたはずだった。油断だっしてはいない。それでもなお意識の先を行かれる人間の技に目を見開きながらも、美鈴は目に見える事実より体をなぞる劍氣の方へと反応を返す。

揺らぐ柳のように。吹き荒ぶ風のように。体の節を動かすのではなく、全身を水と化したかの如く淀みなく、全身を一本の蜘蛛の糸のようになややかに動かして、迫る銀線を絡め取り頭上へズラす。

太極拳。

今でこそ民間の健康療法として公園などで大人数で行われるものがよく知られているが、その本質は多くの門派が存在する戦闘拳。緩やかな流れは柔らかかなものだけでなく、時に荒れ狂い氾濫する河川のように、激流となつて対象を巻き取り破壊する。

頭上を過ぎ去る刃の空気を感じながら、美鈴は一步を満月に向けて踏みしめた。足を落とした地面がその形に凹み震える大地のエネルギーを緩やかに鋭く突き出された腕に乗せ放つ。放つ手は弾丸。呼吸は火薬。震脚は撃鉄。その三つの掛け合わせによって生まれる研ぎ澄まされた一撃は、満月の頬を裂くだけで終わった。

飛び散る朱色を視界に収めながら、着弾点がズレたことに美鈴の瞳が開かれる。ゼロからイチに。その両端に行き着くまでの狭間を極める抜ケン術。始まりも終わりもなく、その中間を極めた技術。流れ続ける気の流れにも終わりはなく、その動きを見越して拳を打ち込むことは叶わない。思考を止めても抜拳はその間にも動き続ける。

美鈴の僅かな思考の隙をつき、動きの出だしを感じさせない拳が美鈴の腹部にびたりと触れた。抜ケン術は始まりと終わりの間の技術。ただ打ち払うだけではない。びたりと美鈴の腹部に触れたまま、次の動作に移るための狭間の動きをねじり込むように拳が振り抜かれる。

打ち抜く軌跡で薙ぐように、その軌跡に乗せられて、山門の扉に美鈴の体が叩き付けられた。扉を碎き地を転がって、四つの線を地に描き止まった体をゆり起こす。腹部に残った拳の跡を摩りながら、口から垂れた朱を拭い、開いた山門を見つめる美鈴の体から鬨気がふっと消えた。

「——見事……、門を開けたか。進めばいいさ」

「よいのか？」

「ああ……いい」

「……満月？ 終わったの？」

打ち合ったのはお互いに一撃のみ。吸血鬼の目を持ってしても一瞬の出来事。お互い足で地に立ったまま、碎けたのは山門だけ。不思議な勝負の終わりに首を傾げ、刀を鞘に納めている満月から美鈴へとレミリアが目を動かせば、微笑んだ美鈴が身を翻し坂の先へと足を出す。レミリアと満月は顔を見合わせ、肩を竦めるとその後を追った。

「……なにこれ」

美鈴の足を止めた先。手を合わせ目を閉じる美鈴の先に広がった焦げた木片。人の気配は微塵もなく、ただ寂れた空気だけがそこにぽつんと残されている。レミリアの呟きの意味は分からずとも、揺れ動くレミリアの気の流れに美鈴は応える。

「……もう、数十年は前になる。私は師に助けられ、より力を求めて修行に出た。ただ力を求め、帰った時には師の姿はなく、寺院も、他の者の姿もなかった。山賊の仕業だ。師は殺され、残っていたのは山門

だけ。私はその時いなかった。助けにくれた者の側に、だからせめて次は……、だから私は門を守った。残されたその先になにもない門を……」

なにを言っているのか分からずとも、手を合わせ祈りを捧げる美鈴の姿が雄弁に語る。たったひとりで数十年。先になにもない門をひとりぼっちで守り続ける。だがそれも終わりだと、美鈴はひとり祈るのだ。

「……貴女は誰かが門を通るのを待っていたの？　自分が居ても……きつと意味はなかったと……」

「……そうかもしれないな……それが私の敗因かな」

弱々しく笑う美鈴の顔を見て、強くレミリアは拳を握った。

「貴女は、これからどうするの……？」

「さて……、どこか遠くへ行こうかな……大分長く門にいた。少し世界が見てみたい」

「なら……、私たちと来ない？」

零された言葉に美鈴は目を丸くした。山間から覗くまあるい月を見上げて、レミリアは身を包んでいる黒布から顔を出す。透き通るような青い髪と、それとは対極に位置する深紅の瞳。青い瞳を紅い瞳が覗き込む。鋭く伸びた犬歯を覗かせた口を柔らかく曲げて。

「私は妹を父の魔の手から救い出す。そのためには力があるの。でもそれはただの力ではない。貴女の力が、山門を守る義の拳士。その拳を貸して欲しい、妹を救うために、守るために」

月明かりを吸い込む紅い瞳を見つめながら、美鈴は小さく俯いた。擦り切れた白い布を巻いた両手を見つめ、その手を強く握りしめる。次があるなら、次こそはきつと。次を逃すのか、掴むのか、決められるのは自分だけ。

「……それで私はなにを得ることができましようか？」

「なんて？」

「褒美は？」

「ああ、そうね……、そう、私が当主になった暁には！　昼寝でもできるようにそんな門の門番にしてあげる！　どうよー！」

「お嬢……」

呆れ返った満月がレミリアの言葉をそのまま美鈴に伝えてやれば、大声を上げて笑い出す。目尻に溜まった雫を指で払い、両手を前に出し握った拳をもう片方の手で包む。

「引き受けましょう、この紅美鈴。次こそ守りきるために！」

「めいりん？　それが貴女の名前ね！　私はレミリアースカーレット。レミリア様か、お嬢様と敬意を込めて呼びなさい！」

「れみりや？」

「西洋言葉は難しいよのう。お嬢様でいいさ美鈴殿。言葉もゆっくり覚えればよい。るーまにあまで遠いらしいからな」

「そうか、よろしくお願いしますお嬢様、満月」

「さあそうと決まれば行くわよ貴方たち！　まずは宿ね！」

「いや今日は野宿じゃないかこりやあ？」

それはイヤア!!？　と叫ぶレミリアと刀で肩を叩きながら歩く満月の背を見つめ、美鈴は一度振り返ると今一度深く頭を下げた。強く握りしめた拳を柔らかくもう片方の手で包み差し出して、最大限の礼と祈りを捧げて。

「行つて参ります師父！　謝謝！」

吸血鬼が夜の下を歩く。輝く星と丸い月。日本を出てから二度目の満月を嬉しそうに見上げて、己が持つ二つの紅い瞳と同じ、紅い髪を揺らす二人を引き連れてレミリアは強く足を出す。

レミリアちゃんと秘められた力

「レミリア、レミリアお嬢様。はい」

「れみりゃ」「れみりゃ」

「……貴方たちやる気あるのよね？」

長椅子に座った影が三つ。階段状に伸びるレミリア、美鈴、満月の影。横から流れてくるレミリアの冷めた眼差しから目を背け、満月と美鈴は顔を見合わせて肩を竦める。西洋に行くのだからと、レミリアから西洋言葉を教えて貰うようになり満月も美鈴も大分経つが、未だに二人ともレミリアの名を上手く発音できないでいる。なぜできない？ と顔を顰めるレミリアに、満月は煙管を啜え紫煙をふかして煙に巻く。

「どうにも、れみいまではいけるんだが後半がなあ、改名したらどうかなお嬢様」

「そうですね、れみいというだけでも可愛らしくていいと思いますが

「なんで会話はできるのに私の名前は呼べないのよ！ なぜなの!!？」

しかも貴方たちが言えないからって改名？ はああああッ!!？」

なぜと言われても上手くできないものはどうしようもない。もうお手上げと両手を上げるレミリアを尻目に、「東とは舌の使い方が違うよのお」「ですねえ」と呑気な会話をしている用心棒と従者の姿が更にレミリアの逆鱗を撫で付ける。

『氣』と呼ばれる中国特有の考え方を理解し、その扱いに長けた妖怪である美鈴の学習能力は高く、すぐに満月と同じようにある程度会話できるまでにはなったが、結局主の名を呼べずじまい。折角手に入れた用心棒と従者が主の名を呼べない現状をなんとか改善しようとレミリアは頑張るが全く成果がない。

怒ったような悲しいようなどっちとも見える吹っ切れた笑顔を黒い布の切れ間から覗かせ唸るレミリアを落ち着かせようと、美鈴はこれ見よがしに手を叩き話題を変えた。

「それよりお嬢様、私たちに言葉を教えて下さる代わりに頼みがある

と言っていたではないですか」

「まあそうだけど……、未だに貴方の口調なれないわ。満月のせいね」
「人のせいとは恐れ入ったの」

満月の訳していた美鈴の口調の違い、意味が合っていればいいというものではないとレミリアは口を尖らせるも、用心棒の相手をするのは取り止めてさっさと自分の頼みを告げる。

「頼みというのは簡単よ、貴方たちに闘い方を教えて欲しいの。貴方たちの技を」

『抜ケン術』と『太極拳』、それを教えろと言うレミリアに冗談と満月は笑うが、輝くレミリアの紅い瞳を見て口角を下げた。

冗談などではなく本気も本気。美鈴と出会ってからの数週間で、嫌という程自分に足りないものがあることをレミリアは知った。満月とレミリアが二人旅をしていた時でさえ「調整が必要である」と満月は武術の鍛錬をしていたが、美鈴が増えそれも変わった。早朝と夜に手合わせをする美鈴と満月の姿。その姿をレミリアは眺めるだけでほとんど参加しない。いや、できない。

単純な膂力だけで言えばレミリアが頭一つ抜けている。満月も美鈴も片手一本で宙に放り、地面に埋め込むことができる。だが、その差を「技」と呼ばれる不可解なもので埋められてしまう。

停止することなく常に流動的に動き続けている満月にはそもそも当たらず、川の中に手を突っ込んでいるかのように美鈴には力を流される。超えられないものを別のもので超える。その妙技を手中に収めれば、目的に一步近づける。父親の顔をぶん殴る。それができればどんなにいいか。期待を胸の内に秘め、小さな笑みを浮かべるレミリアを前に、満月と美鈴は今一度顔を見合わせて黙りこくった。

てつきり二つ返事でいいよ！ と返ってくると思っていたレミリアは、満月はまだしも美鈴まで同じ様相を呈していることに首を捻り、困ったように微笑む美鈴の代わりに満月は佇まいを正すと、椅子に浅く座り直し前屈みになって頬杖をつく。なんと言おうか数瞬考え、百歳に遠慮しても仕方なしと遠回りに促すのを止めた。

「お嬢様が闘い方を学びたい理由は分からなくもない。が、俺や美鈴

殿のようにとなると難しい」

「なんでよー」

「見たままぞ」

そう言い手を広げる満月と、姿勢正しく椅子に座る美鈴を見比べ、レミリアは眉を顰める。険しい目つきレミリアを前にしても態度を変えない満月と美鈴に痺れを切らし、「言ってる意味が分からないわ」とレミリアは白旗の代わりに身にまとわりつく黒布を振るった。その動きを目で追って、満月は煙管を再び噛む。

「体格の違いだ、見れば分かるだろう？」

六尺近い身長を持つ満月と美鈴。それより随分と低い自分の体にレミリアは目を落とす。体格だけで言えば大人と子供。十七世紀。この時代の人々の身長は決して高くはなかった。十七世紀のヨーロッパで有名な人間であるマリー＝アントワネットが、身長一五〇もなかったと言う。それより百年も前に生まれたレミリアの身長も高くはなく、なにより子供のままおよそ成長しないレミリアの身長が伸びるのはどれだけ先か分かったものではない。

「それに俺や美鈴殿が使う〃武術〃というのは対人用なのだ。ある程度似通った体格の『人間』に最も効果を発揮する。体格が違えば効果は半減、妖怪が相手となれば勝手も異なる」

「でも満月は人狼に勝ったじゃないの！」

「それは頭は狼で爪が長かろうと体は人間と同様だったからだ。急所や骨格の形が同じならある程度効果を発揮する。もし相手が蛸みたいな全く形の異なるものだと、やり方がそもそも変わる」

「そうですね、私も人喰い虎や大蛇と闘った時は苦戦しました」

美鈴の援護射撃が飛ぶが、虎とやったの？ と人知れず満月は内心引く。少し肩の下がったレミリアに、満月は一度咳払いをすると言葉が続けた。

「とは言え対人用以外の技も存在する。が、対鬼だの対天狗だのと妖怪相手に特化したような武術はあまり見たことがないから参考にはならないだろうがの」

「ダメじゃない……」

天狗や鬼がどういったものかレミリアには分からないが、使えないと満月が言っているいうことは分かる。落ち込むレミリアに肩を竦める満月の肩を美鈴は小突き、「まあ」と満月は次の言葉を放った。須らく無駄だと断じるつもりは満月にもない。

「対人の武術を対人以外に用いようと思うなら時間が掛かるから難しいが、武術はまだしも闘い方を教えないとは言っていない」「え?」

「体の動かし方、呼吸の仕方や歩法なら俺も美鈴殿も教えられる。なによりお嬢様は人間の俺や美鈴殿とも違う吸血鬼なのだろう。吸血鬼としてのお嬢様の闘い方を模索した方がいい」

そう言って満月はレミリアの持つ要素を並べてゆく。

背の小ささ、飛行能力、膂力、鋭い爪、強い妖力、速度などなど。どれひとつ取っても人にとっては厄介だ。ただ、「背の小ささ?」と一つだけある悪口っぽいものにレミリアは僅かに眉を吊り上げるも、大真面目に満月は答えた。

「背が小さければそれだけ懐に潜りやすい。なによりお嬢様の膂力があれば近付ければ勝負が決まると思っただいぞ。まあ、同じ吸血鬼だとあまり意味はないかもしれんがね」

「ですがどれも強みであることには違いありません。なにより技よりもお嬢様に必要なものは戦闘経験かと。技しかり、積み重ねた経験がなによりも糧になります」

「ああ、それにもう一つ」

そう言って満月は人差し指を一本立てる。なにか分からず訝しむレミリアの顔に満月は笑い掛けた。

「お嬢様の妹君は大層な能力があるのだよな? お嬢様にもなにかあるのではないのか?」

「それは私も聞いて思いました。姉妹なのですから、お嬢様にもなにか特別な力が?」

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』、レミリアの妹、フランドールの望外な嘘のような力を旅の最中に聞いて、レミリアにもそんな力があるのではと二人は思わずにはいられない。レミリアの口か

らいつたいなにが飛び出すのか、宝くじの結果を待つように期待を抱く満月と美鈴だったが、レミリアは暗い感情を背負い項垂れて、ゆつくりと首を横に振った。

「……なにも」

「なにも?」

「ないのよ……私には特別なものなんて……、この百年自分にもなにか特別なものはないか色々と試してみたけれどなにもなかった。妹のようにあらゆるものを握りつぶしたりはできない。そもそも特別ななにかがあれば父に負けたりしていい……。私には……」

もしなにかがあれば違ったのかと思わずにはいられない。なにもないから父にも誰にも目を向けられず、まるで空気のように扱われるだけ。レミリアの手に納まっているものはどうしようもない無力感。ただ虚無を握り締める己の両手がなによりもレミリアは嫌いだ。広げた手のひらは小さく、それに目を落とすレミリアに、一度目を閉じて美鈴は柔らかく微笑んだ。

「お嬢様はちゃんと特別なものを持っていますよ。妹様を想う気持ちはお嬢様だけのもののはず。その『純真』に私はついて行こうと決めたのですから」

「美鈴……」

柔らかな従者の微笑みに、つついっレミリアはぎゅつと手を握り締めた。口に出されるとなんとも気恥ずかしいものであるが、それは間違ではない。間違っているのは欲しくない。遠くルーマニアにいる妹を想えばこそ、握り締めた手は間違いでないと信じたい。美鈴の微笑みにレミリアも口角を僅かに上げて、満月も深く椅子に座り直すと小さく笑う。

「まあ俺も妹君のネックレスで雇われているのだ。お嬢様の妹君を想う心は特別だろうさ」

そして、レミリアの口角が下がった。

「……満月さん」

「貴方本当にそういうところが残念よね、ほんと」

もつと他に言うことあるんじゃないか、と気の利かない用心棒に呆

れ果てたレミアアと苦笑する美鈴の視線から逃れるように満月は大きく一度咳払いをして強く膝を叩く。誤魔化しきれず、吸血鬼の絶対零度の視線を背負いながら満月は体の向きを変え、いずれ灼熱の太陽が沈むだろう先を望んだ。

「そんなことよりもだ、しばらく人の営みの世からはおさらばなのだ。贅沢するなら今のうちぞ」

そう零す満月に冷たい目を突き刺しながら、レミアアも美鈴も満月の目の先へと顔を向ける。

サラサラと吹き抜ける風に容易に攫われてゆく生物を拒む絶対境界線。緑と大地の色に挟まれて刻まれるその曖昧ながらも強烈な境界線の姿にレミアアは目を細めた。太陽の熱が全てを吸い取ったかのように、乾き切った大地が地平の彼方まで続いている。灼熱の太陽の陽光を反射して輝く砂の海。

ゴビ砂漠。

中国から西洋へ。最も早く渡るには、生を吸い取る死の海を渡るしかない。東西の長さ約1600kmに登る世界で四番目に大きな砂漠。かつて十三世紀に絹の道シルクロードを辿りローマからモンゴル帝国を訪れたマルコポーロヴェネツィア共和国の商人、東方見聞録を口述した冒険家。も渡った道程。それだけ広大な砂溜まりを渡ることは不可能ではないが、楽な道のりでも勿論ない。そして、レミアア、満月、美鈴の三人だけで渡るのも妖怪であろうとリスクが大きい。故に、満月と美鈴の腕を活かし考えた手は、行商人たちの用心棒を買って出ること。その行商人群を待つて三人椅子に座し待っている。

思わせぶりなことを言う満月であるが、全く行商人が通り掛からず既に数日。ゴビ砂漠の手前で何日潰せばいいんだとレミアアは長椅子を強く叩いた。

「はあ、あ、いつまでここで待ちぼうけしてればいいのよ。暇つぶしも兼ねて武術でも教えてもらおうと思ったのにそれもあまり意味ないって言うし、もう遠回りでも先に進みましょうよ」

「お嬢様が逸早くるーまにあに帰りたいという気持ちも分かるが、これが最短の道なのだとき。何日か無駄にするぐらいならさして問題

ないっての、そう急ぐなお嬢様。急がば回れって、まあ最短の道を行くのに急がば回れはおかしいかの」

「だいたい最短の道って誰に聞いたのよ？」

「その売り子」

背後を指差す満月の指を追ってレミリアが振り向けば、ゴビ砂漠の玄関口にある茶屋で店番している子供が手を振ってくれる。子供から情報を得る満月らしさにレミリアは口を痙攣させながらも、手を振ってくれる子供へとレミリアも小さく手を振り返した。

「満月って本当に子供には甘いわよね。なんで？」

「……別に、そんなことはないだろう」

「いやあるでしょ、甘々よ。前に誰かに仕えてたって言ってたわよね？ そのせいなわけ？ 誰に仕えてたのよ」

「言って分かるものでもないだろうに。……益田四郎ますだしろうって人だよ……」

砂漠を見つめながら満月が零した名に、レミリアも美鈴も当然聞き覚えなどない。

益田四郎、又は天草四郎時貞。あまくさしろうときさだ

1637年から1638年にかけて巻き起こった日本史上最大規模の一揆、かの有名な島原の乱。伴天連、切支丹と呼ばれたキリスト教の信者たちと、徳川幕府との間に巻き起こった内戦。その結果は言わずもがな徳川幕府の勝利に終わり、この一件が鎖国の原因にもなった。天草四郎時貞は、そのキリスト教側の総大将。海面を歩く、予知をするといった多くの奇跡を見せつけたことよって祭り上げられていた当時齡十六歳だった少年が総大将と相成った。そんな少年の名を口遊みながら、満月はなにもない荒野を静かに見つめる。

なんとも寂しそうな満月の背中に、「その人は？」とレミリアは問い掛けるが、すぐに返ってくるのは「死んだよ」という乾いた言葉。

「島原という地で戦いがあったの、そこで命を落とした」

「満月は……」

「参加したよ、なかなか多勢に無勢だった。敵は装備が整ってるわ、高名な武将に、なんか透ける奴がいたり俊敏な伝令役がいたり、忍者に

侍、人材も豊富でこちらの勝ちの目がそもそもなかったのだ。まあ負けるべくして負けたというやつだな」

「その四郎って人は大事な人だったの？」

「……………いや、そう、ただ家同士の繋がりで。その昔つて、俺のことはいいだろう。用心棒の軌跡なんてそう根掘り葉掘り聞くものではないの」

手を振って降りかかる吸血鬼の好奇心を散らす満月を見て、美鈴はレミリアの肩に手を置いて口を閉じさせる。不満気な表情を浮かべるレミリアに美鈴は顔を寄せ、小声でレミリアの耳へと言葉を投げた。

「お嬢様、なんにせよ負け戦に参加して生き残ったのですから彼は弱くはありませんよ。これまで通り頼って差し上げればよろしいかと」
「……………言われなくても分かっているわ。私が雇ったんだもの。死ぬほど頼るわよ」

そっぽを向いて唇を尖らせるレミリアに美鈴は苦笑する。満月がどんな人生をこれまで歩んで来たかは関係ない。お節介焼きの子供好き。それだけ今分かっているらばレミリアには十分だ。もうルーマニアまで雇ったのだ。満月は裏切らないと誓った。これまでの自分を曲げてもう一度頼ってみようと決めたのはレミリア自身。ならばレミリアも裏切らない。それだけは絶対にしないとレミリアも今一度自分に誓う。服のうちに隠されたフランからの贈り物を握り締め

て。
そうして一時目を瞑っていたレミリアであったが、振動を体と感じ慌てて目を開けた。美鈴の影から立ち上がった満月の姿を見て、先程の会話が満月の気に障ったのかとレミリアは少し焦ったが、満月の顔の向いた先を見てレミリアも思わず立ち上がる。

小さな山を背負ったような四足歩行の動物が列を成して歩いてくる。見たこともない動物に満月もレミリアも目を丸くし、「馬？」と零した二つの言葉に、「駱駝リュウオトウオラクダという意味と云うのです」と美鈴が得意気に答えた。

「るおとおねえ、あんな生き物もいるのね。で？　満月どうするの？」

「まあ見ているといい……。やあやあその商人様よ！ 旅のお供に腕の立つ用心棒はいかがかな？」

「なんだてめえ、邪魔だからどけ」

「ダメじゃないの……」

意気揚々と出て行つた満月を小太りの男が手で追い払う。お呼びじゃないという反応に、しかし満月は負けじと小太りの男の肩にするりと腕を回した。

「そう言わずに大将。俺と彼女、そんじやそこらの腕自慢よりも腕が立つと保証致しましょうとも。なんなら試して頂いても構いません」
「用心棒なら間に合つてんだよ。鬱陶しいから離せ、離せて……なんで離れねえんだ？」

緩く置かれているようにしか見えない満月の手を払おうと商人の男は動くが、吸い付いているかのように満月は剥がれない。しかたなく商人の男は満月が手で促す先へと目を向けて目を瞬いた。

緑色のチャイナドレスのような戦闘服の切れ間から覗くしなやかな長い脚線美。砂漠に沈む夕日よりも鮮やかな赤い長髪を靡かせた美女の姿に、商人の男は固まった。美鈴の足の近くにいる黒い布に塗れた小人になど目もくれない。「試すねえ？」と顎に手を当て考え込む商人の男の視線に美鈴は困つたように笑い、男の視線が全く自分に向かないことにレミリアは鼻を鳴らし腕を組む。

「大将の用心棒と腕比べをされてみませぬか？ もし俺たちが勝つたら、用心棒として雇うことを考えていただきたい」

「もし負けたら？」

「その時は煮るなり焼くなりお好きなように」

その言葉を待っていたと商人の男は怪しく笑うと手を叩く。その音を合図に駱駝の列から出てくる屈強な男たち。十人二十人と出てくる男たちを目にしながら、商人の男の肩から腕を放し満月は美鈴の隣へと歩き並んだ。

「もう満月さん、私を景品にするなんて、非道い仲間ですね」

「負けなければよい。簡単なことだろう？」

「……それで？ 何人がいいですか？」

「半分くらいでいいんじゃないかと。全部はちよつと可哀想よな」
「なにくつちやべってんだ、さあ腕を見せてもらうぜ！」

にやけた男たちと向かい合う一組の男女。美鈴と満月が目配せし領き合ってから僅か数分後、砂漠から吹いてくる風には呻き声が混じるようになり、大地の色に肌色が混じった。腕や足の向きが向いてはいけない方向にひん曲がった男たちを見下ろして商人の男は口をあんぐりと開けたまま固まった。

「申し訳ありません、まさかここまで脆いとは。強そうな方たちだったのでつい力が入ってしまいました」

「これは半分ほど医者元へやった方がよろしいかと商人殿。ただでさえ百姓が反乱中の治安が悪い今日に用心棒の数がこれでは心許ないのではないですか？」

「ああ……そうね……頼むわ」

がつくりと頷いた商人を見て笑い振り返る用心棒と従者の姿。頼もしくはあるとレミリアは両手を上げて肩を竦める。砂の海への切符は掴んだ。

「寒い寒い寒い寒い」

「お嬢様、ちよつと静かにしてくれるか？ 余計に寒い」

夜。いつもなら夜が来たと黒い布を振り払い月に両手を差し伸ばし高笑いを浮かべる程元気に振る舞うレミリアであるが、今は黒い布の上に幾枚も毛布を重ね、座る駱駝に身を寄せて震えている。

砂漠の昼間は灼熱地獄。それは骨折れた用心棒たちが医者元へ行く間に過ぎ去ったおかげで揚々と砂の海に足を落とせたのだが、すぐに訪れたもう一つの地獄にレミリアの元気は封じ込められる。

なにもないが故に昼間は暑く、なにもないが故に熱がすぐに空へと抜けて砂漠の夜は氷結地獄。一月や二月の冬となると、摂取マイナス

四十度になることもしばしば。そうでなくとも十分に寒い。暑い毛皮と脂肪に包まれた駱駝が湯たんぽ代わり。それに加えて目の前で燃え盛る焚き火の熱を逃がさぬようにレミリアはぎゅつと縮こまる。

「満月と美鈴は寒くないの!?? こんな中じやあ寝られないわよ!」

「寒い寒い初日だぞ? 少なくともこれが短くとも一ヶ月以上続くらしいのだ。慣れるしかない」

「一ヶ月!?? 死ぬわよこんなの毎日なんて!」

「本当ならオアシスなどを縫って行くそうですよ? ただ今日は、まあ、用心棒さんたちを医者に見せるのに時間が余分にかかったのと、国のごたごたのせいで納期が遅れていて行くしかないからこうなったのだそうで、きつと明日からはもう少しマシですよ」

「貴方たちがやり過ぎたせいじゃないの!」

そんなこと言われても満月は駱駝の身に深く寄り掛かり、美鈴はすいませんと笑い誤魔化した。そんな二人に牙を向こうとレミリアは身を起すが、駱駝から離れると寒いので急いで取りやめ強く駱駝に寄りかかる。

「寒い寒い寒い」

「心頭滅却すれば火もまた涼しという言葉が俺の国にはあるのだが、限度はあると思うな。ただお嬢様、寒い禁句にしようじゃないか」

「寒いものは寒いんだからしょうがないでしょ! だいたい美鈴は?」

一番毛布少ないのに寒くないの?」

駱駝を背に座禅を組むように座り一枚毛布を纏う美鈴は、一言も寒いと嘆かない。そんな姿に寒さを耐えるコツでもあれば教えてもらおうとレミリアは一泡の期待を込めて問い掛ければ、レミリアの凍りついた顔とは違う柔らかな笑みを浮かべて美鈴は首を小さく傾げた。

「気を循環させて体温を上げているのですよ。なので私は全く寒くないですね」

「なによそれズルイじゃない! 美鈴もこの寒さを分かち合いなさい!」

「いやそれは……」

美鈴の困り顔に牙を剥き、ならば力づくでレミリアは美鈴に突っ込

んだ。冷え切った体を美鈴に押し付け、一瞬ほくそ笑んだレミリアだったが、すぐに身を包む美鈴の暖かさに目を瞬き、美鈴の毛布の中へとより強く身を寄せる。

「ちよ、ちよつと満月ッ！ 美鈴がヤバいわッ！」

「そうかい、お嬢様の言語の方がやばそうだが」

「いや冗談じゃなくて、駱駝よりあつたかい。満月もこつち来なさいよ、寒いんでしょ？」

「そりゃあ……」

無論満月も寒くはある。が、見た目麗しい中華美人に寒いからとくつつくのはいかなものか。レミリア程の純真さを持ち合わせていない満月には少々厳しいものがあるのだが、微笑を浮かべる美鈴に手招きされ、しばらく悩んだ挙句渋々美鈴の元に身を寄せて美鈴の肩にピタリと肩をつける。

「……凄いな、美鈴殿がいれば砂丘の夜も安心じゃないか。これだけで銭が稼げそうじゃ」

「満月……、貴方ほんとにそういうところよ」

「悪かったな貧乏性で、どうせ心が貧しいよ」

「ふふつ、でもこれで寒さは分かち合えずとも暖かさは分かち合えませんでしたね」

恥ずかしげもなく笑い言う美鈴に、逆にレミリアと満月の方が気恥ずかしくなりそっぽを向きながらも美鈴からは離れない。レミリアと満月に挟まれて、熱とは違う別の暖かさを感じながら美鈴はパチリッ、と弾ける焚き火を見つめた。

「……何十年もひとりでしたから、こうして誰かと時を共有するのも懐かしい。お嬢様について来て良かったです。ひとりよりふたり、ふたりより三人ですネ」

「……守るものが増えて大変だな」

「それが嬉しいのですよ満月さん。少なくとも、ないよりはあった方が——」

ほつと吐いた吐息は白み、焚き火の日に煽られて高く空へと上つてゆく。それを目で追い空を見上げた美鈴の口から笑みが消え、「う

わあ」と感嘆のため息を零す。それに釣られて顔を上げる二つの顔。六つの瞳に写り込むのは、澄んだ空気を突き破る幾千の瞬き。黒いキャンバスの上に散らばった宝石たちを眺めて三つの白い吐息が天に昇る。

「——いや、日ノ本では見たことないなあ……」

「私も初めてです……山でもここまでの夜空は」

「ルーマニアでも見ないわよ……素敵……、月はどこから見ても丸いのに、あの星々はどこに隠れていたのかしら？」

隠れてはおらずただ目に映らなかつただけ。そんな事実は無粋であると、ただ夜の名画を静かに見つめる。夜風に震える砂の歌声だけが流れる中に動物の遠吠えが薄く混じり、砂を踏む蟲の足音まで聞こえるようであった。「狼ですかね？」とぽつりと呟いた美鈴の言葉に、なんでもない相槌を打とうとしてレミリアは目を見開くと包まっていた毛布をばさりと地に残し立ち上がる。見つめる先は砂の海の水平線。『寒い』とは零さず、惜しみなく殺気を振り撒く主に、まず駱駝が顔を上げ、同じく立ち上がった満月と美鈴は主の見つめる先へと意識を割いた。

「……これは、妖怪？」

「お嬢様、まさか」

「……そのままかよ」

レミリアの言葉に合わせて人に叫び声上がる。少し離れたところに座していた行商人たちの塊が宙に舞う。駱駝の悲鳴と人の悲鳴。

「嘘だろう？」

その悲鳴を貪る獣の唸り声が一つ二つ三つ。幾つもの遠吠えが夜の世界を蹂躪し、飛び散った血液をこれ幸いと砂の海は嬉々として飲み干した。月と星の明かりに照らされた獣の毛並みは血に塗れ、十にも上る狼の眼光が三つの影を射抜いた。低い唸り声は死の宣告。本能に生きる駱駝たちは死を悟ってか逃げることなく蹲り、逃げるよりはいいかと人狼の群れから守るように三つの影が前に出る。群れのうちから一匹の人狼が一步足を差し出して、青い髪を揺らす小さな少女を睨みつけた。

「レミアアスカーレット！ 見つけたぞ！ こんな場所にいやがったか！ おかげで何日も走るハメになったぞ！」

「……それはご苦勞様。よく分かったわねアイツの犬風情が！」

「生憎鼻が効くんぞでな！ それにしても強氣だな。その横の二人のおかげか？ 新しい奴隷でも見つけたか！」

卑しく笑う人狼に満月と美鈴の顔が顰められる。逃がさぬというように周りを取り囲む四体の人狼を横目に見ながら、用心棒と従者は主の近くへと身を寄せた。レミアアは目の前の一体から目は離さず、ようやく見つけた獲物の姿を楽しんでいる人狼に眉を寄せる。

「で？ お前たちはなぜここにいるの？ 私に用なのかしら？」

「アンタが極東で人狼を殺ったからなあ。俺たちが代わりに呼ばれたんだ。あの野郎人と弱った吸血鬼一匹殺せねえとは、所詮雑魚だな」
「……なんで出島でのことを知っているのだ」

「遠隔透視魔法でも使ったんでしょ」

魔法とんでもないようにレミアアは言うが満月にも美鈴にもなんのこともかさつぱりだ。「腐れ覗き魔」と毒を吐くレミアアの姿に肩を竦めながら、満月はふと感じた疑問を口に出した。

「それで貴殿らは、れみいお嬢様を討ちに來たのか？ お嬢様の父君に頼まれて？」

「ああ、面倒なことだな。お前らも、ここにいることを恨めよ、弱い小娘と一緒にいることをな！」

「弱い？ ああそう、まあ、ルーマニアじゃあアイツが絶対だしそう思うわよね」

大きくため息を吐き出して、レミアアは手を伸ばすと満月の着物の袖を引っ張った。今にも飛び掛かって來そうな人狼を前にいったいなんだと満月がレミアアに身を寄せれば、スツと瞳を横にズラしたレミアアに見つめられ、「血を頂戴」と告げられる。

「なに？ 血？ 今か？」

「貴方たち闘い方は教えてくれるって言ったでしょ？ そのために今の私の全力を見せるわ。それには人の血がいる。だから」
「だからって……」

「腕を出して満月。それでいいから、お願い」

紅い瞳に見つめられ、迷っている時間もなければ、お願いされれば仕方なしと着物の袖をたくし上げてレミリアの前に満月は腕を出す。腕を出せばいいってなんだという満月の疑問にはすぐに答えがやって来た。腕に走る鋭い痛み、がぶりと遠慮なく噛み付いて来たレミアの牙が満月の腕に突き刺さる。ぷつりと切れた血管の音を噛み締め、命の雫をレミリアは吸い取る。痛みよりも驚きに満月は目を見開いて、腕を強く振るいレミリアを引き剥がす。

「なにするんだッ!? 痛ててッ!」

「言っておいたでしょ! 私は吸血鬼! 血を啜る妖怪なの!」

「噛み付かれるなんて聞いていないぞ! ああ、これ跡になったりしないだろうな?」

「さあ? なによりこれで万全よ! 久々に!」

「は! 血を吸ったぐらいで勝てるのか落ちこぼれが!」

「私一人じゃあ厳しいけど、今は……」

背に感じる二つに熱。レミリアの背後を守る義の門番と刀を握る用心棒。一人ではないという事実が、なによりレミリアの力になる。口に残った満月の血をキャンディーを舐め取るように舌の上で転がして、それが身に溶けるのを感じながら強く普段隠している黒い翼をはためかす。

「満月、美鈴。私が口だけじゃないって、貴方たちの主は弱くはないと見せてあげる。だからよく見てて、残りは任すわ」

「背中はお任せをお嬢様」

「期待しよう」

微笑む美鈴と満月に一度目を向けて、背を丸め両手を地につける人狼に向かいレミリアは砂を強く踏みしめる。ギユツと押し込まれた砂の音を後に残しレミリアは一発の弾丸と化す。身構えた人狼は身構えたまま、瞬き一つせずに突っ込んでくる吸血鬼を睨んでいたが、人の生き血を吸い込んだ吸血鬼のスピードに目が追いつかない。砂の上を踊る二つの紅い閃光はレミリアの瞳。紅い残光を追い人狼の視界の中で弾けた時、人狼の体は真つ二つに千切れ飛ぶ。

「……美鈴殿、見えたか？」

「軌跡は、ですが。全ては……、満月さんは？」

「同じく。アレで弱いとは誰が言っているのだ？ アレでは最早視覚で対応するのではなく勘で対応するしかないぞ」

生命の雫を得た夜の吸血鬼。舞う姿は飛矢より速く、風より速く地を駆ける。振られる腕は鉄槌であり、伸びた爪は刀剣の刃。数多くの弱点が吸血鬼にあったとしても、その全身が凶器であることに変わりはない。空を走る紅閃に満月と美鈴は乾いた笑い声を上げながら、群れとなり突っ込んで来る四体の人狼へと己の武器を引き絞る。

静と動ならぬ動と動。一度動き出せば止まらない二つの紅い流れが交じり合い陰陽を描く。突っ込んで来る人狼の爪先の鋭さに指を沿わせるように美鈴が僅かにその軌道を変える。僅かなズレは進む毎に角度を開いていき、小さな隙へ。その隙へ寸分の違いなく用心棒の拳が滑り込む。

「お嬢様よう」

臂力の差故に吹き飛ばすことは叶わず、だが、たたらを踏んだ人狼はそのまま壁となり背後の人狼の動きを止める。小さな隙から大きな隙へ。停滞した獲物を見逃すことなどあるはずなく、夜風を切り裂き獲物の下へと吸血鬼が飛来した。

——ドツ!!??

つと、世界がズレたかのような音は吸血鬼が砂の海を割った音。四散した二体の人狼と砂を宙に巻き上げて、穴が空いたように凹んだ大地に止め処なく砂が流れ込む。その中央に居座る紅い輝きから逃れようと残りの人狼は砂へと手足を突き刺すが、流れ続ける大地に手足を取られてひと握りひと蹴りの砂を掻き筆るばかり。

ボトボトと降ってくる肉塊と赤い雨の中揺れ動く血で染めたような赤い髪を振る二つの影。穴の淵で地獄に落ちぬように足掻く畜生に、冥土の土産とばかりに二つに笑みが贈られる。

「デメエらなんなんだ!?!? 異国の妖怪と人間がなぜアイツに力を貸

している!?? レミリアスカーレットの首には懸賞金が掛けられている! 一度負けた小娘に与するよりもこちらに手を貸せ! 褒美は思うがままでぞ!」

人狼の咆哮を受けて満月と美鈴は目配せすらすることなくただただ呆れる。最初の威勢は何処へやら。これが本当の負け犬の遠吠えと一人満月は考えながら、姿勢だけは考え込むフリをする。

「まあ確かに、俺は銭を貰い力を貸すのが仕事故、値打ちの分からぬ首飾りネックレスより確実に銭が貰えるならばその方がいい」

「ならば!」

「しかしなあ、裏切ったら地の果てまで追いかけて首チョンパなのだそうだ。それは御免被るし、なにより貴殿らは顔が怖い。我らの主の方が愛嬌があるし、俺はどちらかと言われれば子供の味方だ」

突き刺さる鋭い吸血鬼の瞳に笑みを返す満月に笑いながら、美鈴は一度口を引き結ぶと吸血鬼の瞳に視線を返す。

「私は守るためにここにいます。私の守るべきものは目の前に、差し出してくれた手を握り潰す手は生憎持ち合わせてはいない。口を開く相手を間違えましたね、不愉快です」

「ああ、義と礼を重んじる山門の妖に嫌われてしまったな可哀想に。落ちて地獄、上つても地獄。どうする? 蜘蛛の糸は垂れてはおらんぞ?」

言い淀み人狼からは言葉が出ずに漏れるのは諦めへと向かう唸り声。それが命乞いに到達するよりも一步速く、砂の底から地獄が翼を広げ自ずから迫った。乾いた音と噴き出す水滴の音。ごろりと下へと転がってゆく満月と美鈴の視界に翼を広げた夜の王が下からせり上がり姿を見せた。

静かに揺れ月光吸い込むような青い髪、星の瞬きよりも激しく輝く二つの紅瞳。夜を背負ったような黒い翼を伸ばした姿こそ夜を支配する吸血鬼の本来の姿。昼間黒布に全身をすっぽり隠しているレミリアの姿からは想像もできない怪物の姿に、満月と美鈴の口からは乾いた笑いが小さく溢れる。

ゆつくりと翼を燻らせて砂の海に足の先を付けたレミリアは、見た

か！ とばかりに腰に手を当て、大きく慎ましい胸を張る。

「どうよ！ 見たわね私の勇姿を！ これが私の本来の力よ！ 守られてばかりの臆病者ではないわ！」

「お見事ですお嬢様、吸血鬼という種としての力、お嬢様の力確かに見させて頂きました。謝謝、ついていくと決めた私の目に狂いはなかったようです」

「ま、まあね！ 本当は人狼五体相手はちよつと厳しいんだけど二人が居てくれたおかげね、貴方たちを選んだ私の選択にも間違いはなかったわ！」

「三人寄ればなんとやらですね」

ルーマニアに居た頃とは違う背中を任せられるだけの妖怪と人間。ちよつぴり不安だったレミリアの心を吹き飛ばし、レミリアは従者たちに笑顔を向ける。だが、柔らかく微笑んでくれる美鈴とは違い、満月は散らばった人狼たちに目を向けなによらもの思いに耽っている様子。「そういうところよー」とレミリアは満月に指を突き付けるが、満月は頭を掻いて唸るだけだ。

「どうしたのよ？」

「いや、なんでこの人狼殿たちは来たのかなと」

「それは言ってたじゃない。ルーマニアにいるあのくそつたれが送ってきたって」

それは自分だつて聞いたと満月は肩を竦めながら、怪訝な顔を浮かべたレミリアと美鈴に向き直る。満月の頭に浮かび上がる予測。予測は予測でもそう間違いはないと確信しながら。島原の聖人の姿を思い出しながら満月は頭の中の予測を言葉にする。

「それがちよつとおかしいと思うてな」

「なにがおかしいの？」

「どうにも今の状況と出島と今、人狼殿たちが口にしたことが結びつかぬ」

負け犬、落ちこぼれ、レミリアをこき下ろす言葉を口に吐きながらも遠い地よりレミリアを狙い、しかも賞金首にまでされているレミリア。それがどうにも大きな違和感となって満月には気にかかる。

「れみいお嬢様を放っておいても問題なしの弱者と見るのなら、手など出さず放っておけばよい。なのに送られてくる刺客に人相書き。どうしてもれみいお嬢様を消しておきたいように俺には思えてならん」

「確かに、そう言われるとおかしいですね。下手に突つつくよりも手を出さぬ方がいいはず、刺客を送り、魔法とやらでこちらの位置を探っているのだとしたら力を入れ過ぎている」

「ちよつと、つまりなにが言いたいの？」

なんか怖くなってきたと不安がるレミリアに、満月はレミリアの予想とは違う答えを差し出した。

「つまり、れみいお嬢様の父君はれみいお嬢様を恐れているということだ。是が非にもお嬢様にはるーまにあに戻って来て欲しくないのであろうよ」

「……アイツが？」

醜悪に見下し笑う父の姿を思い出しながら、満月の言葉をなんとか飲み込もうとレミリアはするが喉につつかえ飲み込めない。父が自分を恐れている。その姿がレミリアには想像できないから。

「なぜ私を恐れるの？ 片手間に私を追い出したようなアイツが」

「お嬢様の父君を知らないから俺にはなんとも言えないが、れみいお嬢様がなにか父君を恐れさせるものを持っているのだろう。それがなにかは分からないが……」

「あー！ もしかするとやはりお嬢様はなにか特別な力を持っているのではないですか？ 妹様が破壊の力を持っているように、れみいお嬢様もなにかを」

「私が……？」

手のひらに目を落としレミリアは弱々しく握り締める。毎日夢見て思い描いていたなにかが自分の中に存在する。そう満月と美鈴は言うが、レミリアには全く信じられない。百年なにかを成そうとしてなにもならなかったのに、今あると言われたところになにかがあるとは思えない。

でも、ようやくできた信じられそうな従者が二人。レミリアがよう

やく持てた仲間の言葉が間違いであるとは言いたくない。もしそんな力が本当にあるのなら、自分の中に特別ななにかがあるのなら、逃げてくれるなよとレミリアは強く拳を握り締める。

「信じられないけど……二人が言うのなら……見つかるかな？」

「ええお嬢様！ 見つかるまでこの美鈴、微力を尽くします！」

「吸血鬼がどれだけの化物か知れたからな。るーまにあでのことを思えばお嬢様にも強くなって頂かなくては。嬉しいことに時間はある」

「どれだけ妹の下に駆けつけたくても、そこへと続く道が短くなるわけではない。長い旅路は長いまま目の前に広がり続けている。ルーマニアに辿り着いた時、これまでと同じか、強い自分になっているか、どちらを選ぶのかなどそんなの当然後者だとレミリアは強い笑みを浮かべる。

「なら見つかるまで頼むわよ満月！ 美鈴！ これからも頼るから！」

「お任せをお嬢様！」

「まあ仕事だからの。散った駱駝を集めようぞ。幸運にも行商人たちがいなくなったおかげで好きに動ける。それに彼らの持つ関所の通行手形も手に入れば旅も楽になるというものぞ。あの人狼殿たちも役に立つよの」

「満月貴方ね……」

「そういうとこよー！」とさっさと手慣れたように死体漁りをしだす満月にレミリアは指を突き付けはにかんだ。夜に砂漠の月の下で、突き出していた指を丸めて今一度レミリアは手を握り込む。自分の中の何かを掴むように。決して手放してしまわぬように。

そうして一つ大きなくしゃみをする、「寒い！」と禁句を大声で叫びレミリアは美鈴の下へと飛んで行った。

レミリアちゃんと死亡之虫

照り付ける灼熱の太陽に熱せられ、砂の海は焼けた鉄板のようにその表面の空気を歪めている。遠く果てしない砂の大地を見つめながら、大岩を背に、その岩陰の中満月と美鈴は大変呆れたように砂の上を転がるレミリアを見つめた。

「熱ッ痛ウツツツツッ!?」

なにを思ったのか影の中からすたすたとレミリアは陽の下に歩み出た。一息の間の後、覚悟を決めたかのように黒布を取り払ったレミリアは、一時は腕を組み不敵な顔で立っていたが、あつという間に青い髪から煙が上った。その後はご覧の有様である。棉に火を放ったかのようにメラメラと翼や頭から火を上げて砂の上をのたうち回り、息も絶え絶えに岩陰へと這いずって来た主に用心棒は口に啞えていた煙管を離し、紫煙と共に出迎えた。

「お嬢様よう、この暑さで遂に頭が……」

「お可哀想に……」

僅かに涙目の満月と美鈴。美鈴はまだしも、満月まで思っていたより主思いじゃないかと微笑もうとしたレミリアに、「目に砂が……」と二色の声が叩き付けられ一気にレミリアの口端が下がった。二人の涙は主を哀れんでのことではなく、レミリアがのたうち回ったせいで砂の海の欠片が目に入っただけである。

「違あう!!? パッパラパーなんかになっちゃいないわ! って言うかなんで見てるだけで助けてくれないのよ! 貴方用心棒でしょ!

美鈴まで!」

「いくら俺でも太陽は斬れんな」

「私はてつきりお嬢様の新しい芸かなにかかと……」

「んなわけないでしょツ!!?」

太陽の陽で自滅など芸にするわけないと喚くレミリアからは未だ薄っすらと白煙が上っており、牙を剥かれても滑稽過ぎて全く怖くない。水を掛けて消火しようと水筒に手を伸ばす主の手の先から用心棒は水筒を取り上げ、「飲み水なのだから勿体ない」と制する。突き刺

さる吸血鬼の視線から欠伸交じりにそつぽを向く満月にレミリアは歯軋りを送り、美鈴は蠟燭の火を摘み消すように主から立ち上る白煙の下を摘み消した。

「それでいったいどうしたのですかお嬢様、急に陽の下などに飛び出して」

芸でもなんでもないならなぜわざわざ急にそんなことをしだしたのか。当然湧いてくる美鈴の疑問を受けて、恥ずかしそうにレミリアは鼻を鳴らす。

「その、私の秘められた力がなにか試そうと思つて……」

「それで選んだのが日光浴なのか？　なんともしようもない」

「アイツが恐れてるようなものなんでしょ？　吸血鬼誰もが恐れると言つたら太陽以外ないでしょうが！」

ないでしょうが！　と言われてもそうなんだとしか満月は思えない。満月も美鈴もレミリアから日光に弱いとは聞いていたものの、即座に消滅するようなものではなく、炎上するのみ。生きたまま焼かれることほど痛いこともないが、わざわざ体感してみたい感覚であるはずもなし。進んでそれを試そうと思うレミリアがおかしい。

だが、試してみてもいいかもしれないとレミリアが思うだけ吸血鬼は太陽を恐れている。日焼け止めクリームを塗ればもう安心と言うようなものでは勿論ない。肉体というより魂に刻み込まれたような弱点。どんな手段を用いようと陽の下に吸血鬼が素肌を晒せばたちまち出火する。

吸血鬼にとって太陽を克服するというのは、吸血鬼にとっての最大の夢のひとつではあるのだ。

満月と美鈴は吸血鬼がの夢を聞いて納得はするものの、試すこともなくそれはないだろうと結論付ける。

「なあお嬢様、妹君然り、思うにお嬢様が持っているかもしれない力とこののは肉体的なものではないと思うのだが」

「なんでそう思うのよ？」

レミリアの問いに満月は肩を竦め、代わりに美鈴が口を開いた。

「百年、お嬢様は陽の光に一度も当たったことはないのですか？」

「一度もってことはないけど……堂々とはないわね」

「だからですよ。一日の半分は太陽の世界。それを克服出来るような力ならすぐに分かるはずです。それに肉体寄りの力ならば目に見えて分かりやすいはず。満月さんが肉体的な力ではないと言うのはそのためでしょう?」

「まあそうだ。れみいお嬢様の妹君と父君の力はなんなのだ? そこに答えがあるのではないかな?」

血の繋がりといいものは馬鹿にできない。どれだけ嫌う相手であつても、親と子の間には切つては切れぬ繋がりがあり、子は親の要素を継いでいる。それは見た目であつたり、持っている潜在能力であつたり、それが蛙の子は蛙と言う由縁である。だが、鳶が鷹を産むと言うように、突然変異のように優秀なものが生まれ出る場合もあるが、鳶が蛙の子を生むようなことはない。優秀だろうが平凡だろうが、細かろうと繋がりはある。

暗中模索はしたくない。なにかしら手掛かりが欲しいという用心棒の問いの先は主の妹と父の持つ力。レミリアは苦い顔をしながらも、たどたどしくその力の形を言葉に変えた。

「フランは、そうね……破壊の『目』を掴めるの」「目?」

「破壊の核とでも言うのかしらね? 壊したい者や物の核を『目』として手のひらに引っ張って来れるという感じ。それを拒む方法があるのかも分からない」

なんとも理解し難い能力の説明に満月の頭から湯気が出る。腕を組んだまま意味不明であると顔を浮かべる満月の横で、少し目を険しくさせて美鈴が佇まいを正した。

「……『気』にも色々な種類が存在します。気配、それに味や質、形の違いがあるとも言えますか。お嬢様の妹様の力は殺気を直接叩き込むような技でしょうか。それとも相手の気を握り潰すようなものなのか……、どちらにせよ途轍もない力です。私たち拳法家は数十年の歳月を掛けてその端を掴む。それを一足飛びで掴めると言うのは……」

「笑えるな」

「ええ全く」

目に見えぬものを掴み操る。満月と美鈴は使う技の種類は違くとも同じ武術家。その行き着く先は同じ。長い年月を掛けて肉体を超えて精神を研ぎ澄まし人の身では不可能な領域へと踏み込むため。それを嘲笑うかのような力を聞いて、嫉妬や羨望よりもただ笑えてしようがない。刀を握らず、拳を握らず、座禅を組み精神の底へ潜ることもなく、生まれながらにそれを掴む。空っぽな笑い声を上げる満月と美鈴の姿にレミリアは少しの間固まった。

「やっぱり凄いわよね……」

レミリアとは違い強大な力を見せつけるように産声を上げた妹。生まれてから常に存在しないかのように扱われていたレミリアと違い誰にも気にされていた破壊の使徒。「凄い」と迷いなく返す満月と美鈴にレミリアの肩はみるみる落ちるが、「だが」とすぐさま続いた満月の言葉にレミリアの肩が小さく跳ねた。

「過程を飛び越え結果を掴む、理想のひとつではある。が、大事なものは過程だ。どういう道を辿りそこに至ったのか。それが抜け落ちては意味がないとは言わんが薄れる」

「拳ひとつ打ち込むのも同じです。なぜ拳を握り放つのか？ なにを握る？ 足を踏み出し踏み込むのはなぜ？ なぜ放つ？ それを放つための構えはなぜその形？ それを自分なりに咀嚼し飲み込み初めて技は形となる。同じ結果を拾えたとして、過程が大事というのはそこなのです。全てを理解し結果を拾うか、ただ結果を拾うのか」

それが基礎が大事だと言う由縁。武術に限らずあらゆる芸事、物事に対し、根元なくして成長する物事は存在しない。根元が広く深ければ、それだけに積み重なるものは大きく高くなる。上澄みだけを掬っていけば、積み上がるものはなく、いつまで経っても先には至らず。結果より過程を重んじる。言ってしまうえば考え方の違いであるが、ルーマニアにいた者たちとは考え方の異なる二人にレミリアは目を丸くした。

「……なんて言うか……貴方たち変ね、変よ……目に見えて分かる強

大な力に縋ろうとか怖いとか思わないの？」

「便利ではある。怖いとも思う。が、それで終わりにしたくないの。力だけを見ることほど滑稽なことはない、絶対にだ」

「力のみを追い求める無益さを私は身を以て知っています。本当に大事で必要なものはそれではないと……」

力を追い求めた結果知らぬところで師は死に寺は焼け落ちた。少年を祀り上げ総大将に、強大な幕府に負け戦を挑んだ島原の乱。どちらも力に縋った結果。力で全てどうにかするのであれば、美鈴も満月も今ゴビ砂漠の大岩の影などで座っていない。目を引き絞り顔は空へ。なにかを睨み射抜こうと座る美鈴と満月の姿は未だ過程の真っ只中。なにか手に入りたい結果を追い求める姿。地に根を巡らしどう伸びるか、そんな二人にレミリアの小さな拳は握られて、二人の間にレミリアも勢いよく腰を下ろした。宙を泳ぎ遅れて来たレミリアの黒い羽に腕を撫でつけられ、狭間に座った青い髪を二色の青い瞳が見下ろす。

「貴方たちがなにを見ているのか知らないけど……私も……」

フランを追う理由は力のためにあらず。愛には愛を。向けられた笑顔を取り戻すため。そのために必要なものは第一に力ではある。脅威を打ち破る力。障壁を撃ち砕く力。だがしかし、その力の源は？
なにが力を動かしなにか力の矛先を決める？ 恨み、怒り、嫉妬、羨望。

一度目は歯牙にも掛けられなかった。片手間に手で払われ命からがら逃げるだけ。二度目はない。この旅路の果てに二度目はない。ならば二度目に必要なものは？ 手を握り口を一文字に引き結んだレミリアに、「父君の力は？」と遠慮のない言葉が落とされた。「そういうところよ」とレミリアは返さず俯けていた顔を上げる。

「……私の父親、アイツは未来を覗くのよ」

『未来を見る程度の能力』。

まだ描かれていないはずの先を誰より早く掴む力。形なき過程を掴み、結果を思い描く力。両端から溢れるため息をレミリアは聞き流す。

「なんだ、れみいお嬢様の家族はびっくり吸血鬼の集まりなのか？」

「まるで仙人みたいですよね」

「なああの首飾り、仕事の報酬に見合うよな？」

「言うことがそれって!? どういう頭してるのよ!?」

やりたくない、と投げるよりマシではあるが、気にすることは銭ばかり。苦笑する美鈴と言い、どうにも満月も美鈴もレミアの埒外の外側の住民であるらしい。「怖くないの？」と恐る恐る問うレミアに、満月は盛大に鼻を鳴らし答える。

「未来を見て勝てれば苦労しない。島原でもそうであつたし……」

「島原？ 貴方が参加した戦いだつたかしら？ なんで今それが出るのよ」

「……うちの総大将も未来を見れた。だが負けたのだ。……あのクソ野郎、本当に……勝手なやつだくそっ」

未来を見れば勝てるなら苦労しない。それで誰が死ぬことになるうとも勝てるなら。『武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり』、1659年に生まれた山本常朝肥前国佐賀鍋島藩士が口述したものを纏めた『葉隠』武士としての心得書。の有名な一節。大望のために命を捨てることなど、始める前から決めていた。それが武士として……。
なのに……。

それなのに……。

勝利が目の前にあつたかもしれないのに……。

未来さえ見えねば目の前で天草四郎が死ぬこともなかったであろうに……。

見上げてくる紅い瞳に気付き満月は強く頭を搔く。どうにもレミアの前では古い記憶を思い出して仕方ないと自己嫌悪しながらも、「あつ」っと満月は一言を挟み手を叩いた。

「お嬢様の父君がお嬢様を恐れているのはそこか？ れみいがるーまにあに戻れば己が負けると見たからか……?」

「は、はあ!? 私……? いや私こう言っちゃアレだけど全くアイツに勝てるビジョンが未だに見えないんだけど?」

「それは知らんしお嬢様の父君がどれだけ強いか、どれだけ未来を見

られるのかも俺は知らぬ。だが、そうとしか思えぬ」

「そうですね。未来の敗北を知ったのなら、今必死にもなりましょう。ですが、そうだとすると刺客が来たのは先日の人狼たちと出島？ という場の二回のみ。少し頻度が少ないのでは？」

「見えている未来の精度の問題ではないかな」

確かに見れるのではなく、「もしや」や、「まさか」と言う気になる程度しか見えないのなら、微妙な力の入れ具合にも納得できる。なによりレミリアは一度敗走していることもある。それを思えば、全力を出すのも惜しいと思えるだろう。たかが小娘一人。続くは異国の人間と妖怪が一人づつ。戦力を思えばなんとも心許ないと満月も美鈴もため息交じりに力なく首を傾げるしかない。

「ただこれでなんとなく予想はできるな。れみいお嬢様になにか秘められた力があるのなら、目に見えぬなにかを掴む力と見た」

「確かにそのような力なら百年気が付かなくても納得できますね」

未来と破壊の目を掴む。無稽荒唐な能力に通ずるは、無稽荒唐な力である。そう言う二人の顔を見比べて、レミリアは嬉しくもあるが、難しい顔を浮かべて腕を組む。

「なにかって……なに？」

「それは知らぬ」

「なんでしようね？」

「ダメじゃない！ その何かを知りたいのよ！ なに？ なんなの？」

私にはなにが掴めるの？ なんなのよおおお！

「うるさい……、ああそうだ。『ボケにツッコめる程度の能力』、これだ。もしくは『人を笑わせる程度の能力』、これだの」

「うるさああああい!!? そんな力要らない!」

腕を振り上げるレミリアに見事な力だと拍手を送る満月に美鈴は小さく笑い声を零す。従者に向かい揺れ動いた主の視線から美鈴はそっぽを向いて、「さて」と一拍置いて立ち上がると服に付いた砂を払う。それでもなお突き刺さる吸血鬼の目に「行きましよう」と美鈴が返せば、今度はレミリアの目が背けられた。

「おやお嬢様よ、どうしたのだ？ 早く行かなければ妹君が待ってい

るのだろうか?」

「そうですね、ささ、参りましようれみいお嬢様!」

「ぐう、貴方たち……」

美鈴にすっぽりと全身黒い布に巻かれながら、唸るレミリアを満月はよいしよと抱えるように持ち上げる。ふたこぶ駱駝の間にゆつくり置かれる姿は滑稽であり、あまり人に見られたい姿ではない。子供の可愛らしさを笑うような満月の顔と和み微笑む美鈴の顔の鬱陶しさに、喚きたくても駱駝の背の上が最も楽であるのは事実。駱駝のコブに抱きつくように呻く黒い布に満月は声を漏らして笑う。

「お、お嬢様、似合ってるよほんと」

「ええ可愛らしくていいと思います」

「こんなの私の優雅さには程遠いわ! こう踏ん反り返ってる方が私らしいの!」

駱駝のコブを肘掛のようにして足を組むレミリアに、「いやあ」と満月も美鈴も手を横に振った。どれだけ頑張っても残念ながら子供が見栄を張っているようにしか見えない。なにより黒布のせいで格好悪さ二割増しだ。

「お嬢様は威厳よりも妖しさを極めた方がいいんじゃないかな当主としては。どれだけ頑張っても背が伸びるわけもなし」

「そうですね、どんな仕草でも極まれば一つの形として納まるものです。威厳などは後からついて来るものですから、ねえ満月さん」

「うむ」と言う満月の言葉を合図に四つの手が伸ばされてレミリアの節々を掴んだ。偉そうに組んでいた足を解かし、コブに置かれていた腕を両手を枝垂れさせるようにして腕で囲うように肘を曲げ胸の前に置いた形。その形に動かして満月と美鈴は大きく強く頷いた。

「これだな。こういうった形の方がお嬢様には似合ってると思うぞ。立ってる時とかにやったらどうかかな?」

「ええ、力強さより女性としての柔らかさと鋭さ、お嬢様の純真さが現れていていいと思います」

「絶対やらないし絶対使わないから! 絶対ッッ対使わないからねッ!!」

残念と項垂れる二人に腕を振り上げるも、急に動いた駱駝に驚きレミリアは駱駝のコブに再び抱きつく。笑う二人にレミリアは齒を力チ鳴らしながら、駱駝にぶら下げられている水筒を引つ掴み貴重な水を自棄飲みした。

敦煌。とんこう

かつて絹シルクロードの道の分岐点として栄えたオアシス都市。紀元前より存在し、多くの異国の者がその地を踏んだ。しかしこの十七世紀。流通はほとんど海路が主流であり、十三世紀から二十世紀初めまで、すっかり旅の者や陸を行く行商人たち以外には忘れ去られた廃れた都市となってしまうていた。

そんな敦煌の中心地から南へ五キロ。ここに敦煌よりも随分小さなオアシスがある。

月牙泉。げつがせん

砂の海に浮かぶ蒼色の三日月。三日月型の泉を傍らに置き、木造の塔が砂と僅かな緑に囲まれポツンと建っている。

ゴビ砂漠の道中は、基本オアシスを縫って歩く。常に砂の海を歩き続けるには食料が足りなければなにより水が足りなくなる。マルコIIポロ口が十三世紀に歩んだ時と変わらず、廃れようとも行商人たちが立ち寄るオアシスは変わりなく旅の商人たちを向かい入れ、ここには不思議と熱気が詰まっていた。異国の品々と異国の人々。局地的な多国籍の集まり処は、ただ飛び交う言葉は統一されたもので、小さなバベルの塔の根元のようなものである。

その中、簡素な木製のテーブルと椅子。男たちの喧騒に囲まれた中、周囲とは打って変わって無言の七人の男を前に、レミリアは青い

髪を弄りながら少し砂っぽい四枚の黒い札をテーブルの上へと無造作に放った。瞬間静寂が辺りを包み、響くのは吊られた干し肉の縄が揺れる音。キィキィと揺れる縄の音を打ち破る歓声が一呼吸遅れて湧き上がる。

「スゲー！ この幼女何者だ？ もう何連勝目だ!?!? イカサマ……？」

「ばっかそれは何度も確認したろ！ 豪運だ！ 長江のような広大な豪運にこの幼女は愛されてやがる！」

「アンタこそ賭博の神に愛された幼女だぜ!!? だからもう勘弁してください……ッ!!?」

「幼女幼女言うな！ 人間風情が馬鹿にして！」

「まあまあお嬢様、こういう時は勝者の余裕を」

美鈴に机を叩き立ち上がったと肩を抑えられ、不満気にレミリアは鼻を鳴らしそっぽを向く。レミリアが力任せに机を叩いてはどくなってしまうか分からない。レミリアの前の机に積み上げられた銀貨が散らばりでもすれば、周囲の男たちの袖の中に消えてしまう。

仕方なくゆつくりとレミリアは椅子から跳び降りて、積みまれた銀貨を美鈴が皮袋の中に入れてゆく。かちやかちやと打ち鳴る銀貨の音にレミリアは鼻歌を合わせながら身を翻す。その背に飛んで来る「待ってくれ！ アンタの名前は？」という言葉に、レミリアは笑顔で振り返り偉そうに腕を組んだ。

「くつくつく、私はレミリア＝スカーレット。刻みなさいこの名をね」
静かになったその場から美鈴を伴いレミリアは去る。黒い布を被り直し小さくなってゆく小さな背に、一斉に男たちの首は傾げられた。

「れみりゃ？」

刻めと言われたからには刻もうと、月牙泉の木製の塔の柱に『賭博の神に愛された幼女、れみりゃ』と大変不意な名を刻まれたことをレミリアは露とも知らず満足気に足を鳴らす。貧乏から小金持ちへ。一時間と掛からず軍資金を手に入れた。折角のオアシス、ボロい黒布から質の良いシルクに買い換えようとレミリアの足取りはとても軽

い。

塔の外、行商人たちが己が運んできた商品を広げる簡易市場を物色するレミリアに美鈴は小さく笑い掛けた。燭台、耳飾りなどと並べられた小物たちの中から象のような装飾が描かれた小箱を握るレミリアに顔を寄せ、手に持つ箱を物珍しそうに眺めるレミリアの手からそれを受け取る。

「……象は幸運の象徴でもあるそうですよお嬢様、先程の勝負お見事でした。お嬢様は運が大変良いのですね」

「まあね！ 昔からこういうのはなぜか強いだよ。こう見えてジャンケンなんかは一度も負けたことないのよ！ ひよつとすると私の力は『運が良い程度の能力』なのかも？」

胸を張るレミリアを少しの間美鈴は見つめ、小さく頷くとレミリアと目を合わせるため僅かに屈んだ。

「……そうですか、お嬢様ちよつと私とジャンケンしましょう」

箱をレミリアに返し柔らかく手を握り微笑む美鈴に首を傾げながら、レミリアは箱を元の場に戻し向かい合う。そして薄っすらと口角を上げて、レミリアも緩く拳を掲げた。挑まれたなら返す言葉は決まっている。

「今のを聞いて勝負しようと言うの美鈴？ 私ジャンケン無敗よ無敗！」

「勝負はやってみるまで分かりませんよ？」

笑顔を崩さぬ美鈴を訝しみながらも、お互い握った拳を振り上げる。呼吸を合わせて二度振られ、突き出されるレミリアの二本の指。広げられた美鈴の手を見つめ得意気な顔をレミリアが浮かべようとした瞬間、五本の指が揺れ消える。握り締められた美鈴の拳にレミリアはほかんと口を開け、美鈴は勝利の笑みを浮かべた。

「ちよ、ちよちよ、待つ……え？ なに？」

「お嬢様がチョコキを出すのが見えたのでパーを出そうとした手を無理矢理握りこんだんですよ。先程のは残像です」

「残像!?? そこまでする!??」

「お嬢様の力が『運が良い程度の能力』なのでは？ という検証です。」

もしそうであればなにがあらうとも私は負けていたでしょうね。ですが違ったようです」

「うええ」と肩を落とすレミリアであるが、ふと湧いた疑問にレミリアは勢いよく腕を振り上げる。

「それ別に私が負ける必要なくない!?」

「いやあ私も負けず嫌いにして、満月さんに門を破られて、お嬢様にも負けるのはちよつと。これで初めてお嬢様にジャンケンで勝ったのは私ですね」

笑う美鈴から逃げるように視線を切り、レミリアは強く足を出す。『運が良い程度の能力』もし本当にそうであったなら心強くはある。が、それでもないとなると自分の力はなんなのか、考えれば考えるほど分からない。乾いた豆腐のように萎んだレミリアの背から美鈴はちよつとだけ歩く速度を上げて隣に並ぶと布を売る商人の前で足を止める。

「勝負は時の運、ですが、運だけで全てが決まるはずもなし。お嬢様、どんな力であらうとも、力に胡座をかいた途端に力は力ではなくなるのです」

「……それを教えるためにわざわざジャンケンしたの?」

「少し偉そうですね? ですが、勝利を掴むのは必ず自分の手なのです。形があらうとなかうと、掴めるものは自分の手だけ。ジャンケン無敗のお嬢様にジャンケンで勝った私がその証拠と思って頂ければ」

鍛え上げた体術で強引に勝利を手繰り寄せる。レミリアのチョキに対して美鈴が出そうと考えていたのはパーだったのは本当だ。だがそこから勝利の手に変えたのは運でもなんでもなく美鈴の力。「この布などいかがですか?」と、手触りの良い布をレミリアの前に掲げる美鈴の顔を見つめて、少ししてレミリアは自分の手へと目を落とす。

「運でもないならなんなのかしら……、目に見えぬものをどうやって見つけ信じればいいのか?」

「それは……」

言い淀む美鈴から目を外し、レミリアは「それでいい」と新たな黒布を購入して先を急いだ。見えぬものであればこそ、誰にも答えなど分らない。ないものがあるなどと言う阿呆にもなりきれず、ただレミリアの手は虚空を握るだけ。自分になにかあるのだと信じたくはある。が、信じた先になにかあるのか。それが分からず抱くものはただただ不安だ。

月牙泉の入り口で駱駝と共に待機している満月の背が見えてきて、ホッとレミリアは息を吐いた。燻る不安をいつも握っていては手がダメになつてしまう。水や食料を逸早く買い待機している気の利かない用心棒で気を晴らそうと考えていたレミリアの口端は、満月に近づくとどんどん歪んだ。

満月の目の前にいる数人の子供。相変わらず子供から情報を得ているらしい満月は、子供たちにチツプを渡し手を振って、楽しそうに紫煙を吹いている。折角レミリアが軍資金を稼いでも、あるだけ子供に散財している用心棒の背にレミリアは跳び蹴りを見舞った。

が、するりと避けられ抱えられる。

「おいおいお嬢様よう、そんなに俺に抱えられるのが好きなのか？

蓼食う虫も好き好きか？　こう見えて遊女にくらいしか好かれたことはないのだがな」

「違うわ！　なにまたほいほい散財してんのよ！　早く下ろしなさい！」

「分かった分かった。それに無駄でもなかったさ、面白い話も聞けたしの」

地面ではなく駱駝の背へとレミリアを下ろして満月は駱駝の手綱を引いた。本来ならオアシスで少なくとも一夜は過ごすのだが、レミリア一行にそんな時間はありはせず、美鈴のおかげで夜の寒さも乗り切れるが故に先へと歩みを進めるのみ。

揺れ動いた駱駝のコブに抱きつきながら喧騒飛び交うオアシスを肩越しに今一度振り返り見てから、レミリアは何もない砂漠の先へと目を戻す。駱駝のコブにしなだれかかり揺らめく空気の熱をぼうっと見つめるレミリアの耳に届くのは、踏み締められる砂音と風の音。陽に

照らされた砂山の影が描き出す二色のマール模様は、風に吹かれるたびに形を変える。

不毛にして一秒ごとに形を変える広大な影絵を視界に収めるレミアの覇気のなさに、満月は火種を落とした煙管を懐に戻しながら同じように砂の大地の先を見つめた。

「なんだお嬢様よ、元気がないなあ。オアシスは楽しめなかったか？」
「……そんなことないわ。軍資金は稼いだし。ただ私も思うところがあるの」

「そうかい……、なら暇潰しにでも仕入れた話をひとつしてやろう。美鈴殿は聞いたことがあるかな？」
死亡之虫モンゴリアンデスワームというのを知っているか？」

死亡之虫。
モンゴリアンデスワーム。

ゴビ砂漠周辺に生息している謎の巨大怪蟲。赤い体をしているとか、又は発光しているとか、黄色い致死性の毒を吹きかけてくると言う。これまでに何人も人間が犠牲になったと言うゴビ砂漠の怪物。楽しげに話す満月に口を痙攣らせながら、レミアは駱駝のコブを軽く叩く。

「え？ なによそのやばそうなの？ なんて貴方はそんな楽し気なのよ!?？」

「いや、誰も見たことないのだとき。でもゴビ砂漠に住む誰もが死亡之虫モンゴリアンデスワームの存在を信じているのだそう。面白いだろう？」

「面白いって……、なんで誰も見たことないのにいるって分かるのよッ！」

「さあ？」と肩を竦めながら変わらず歩き続ける満月の背をレミアは睨みつけるも効果はなく、隣に並んだ美鈴と楽し気に話を続けるだけ。レミアは駱駝のコブに額をつけてただ砂漠の景色に目を這わす。

見たことなになぜあるなどと信じられるのか？

それはただの幻想であり、ないものはないのだ。声高にあると喚い

たところで、証拠がなければいけないのと同じ。レミリアにあるんじゃないかと言われて期待して、本当になにもなかった時どんな顔をすればいいのかレミリアには分からない。例え特別な力などなくとも、それでも妹のために立ち向かうことはもうレミリアは決めている。だが、自分の中になにかが欲しい。そんな想いも変わらない。

揺れ動く視界の中、砂の上に引かれた一本線を眺めながら、レミリアはただただ不安に押しつぶされぬように耐えるだけ……。

「満月さん、その死亡之虫モンゴリアンデスワームと言う蟲の見つけ方などはないのですか？」

「さて、聞いた話では砂の上に線が残るなどと話していたが本当かどうか」

用心棒と従者の会話を聞き流しながら、レミリアはただ砂の海に引かれた一本線を……砂の海に引かれた一本線を……。

「いつ……ぽんせん……？」

顔を上げたレミリアが目を擦ろうとも線は消えず。寧ろ進む毎に線は太さを増しているように見える。風が吹けば薄くなっていってしまう一本線の前後に生物の姿は見えず、レミリアはぱくぱくと口を開けた。前を歩く二人は全く気が付いておらずただ会話に花を咲かせるのみ。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと……」

「全長が六尺はあるらしい」

「えええ、そんなに大きいんですか？　そこまで大きな芋虫は私も見たことないですね。強いんでしょうか？」

「ちよつと……」

「ああ、そう言えば日ノ本には女郎蜘蛛という妖がおつてな」

「蜘蛛の妖ですか！　それはまた」

「ちよつとッ！」

レミリアの呼び掛けに赤い頭が二つ振り返る。「あれ……」と弱々しく突き出されるレミリアの指先を追って青い瞳が見つめるのは砂の上の一本線。黙りこくる二人の口からなに出るのか待ちきれず、

「死亡之虫」と呟いたレミリアに返されるのは手を打つ音。満月の伸ばした指の先、小さな岩が佇んでいる。

「風に押されて転がらずとも引き摺られるような大きさの岩が線を引きなのであろうよ。証拠に一本線は岩から伸びている」

「自然の妙技ですね！ 面白いです！」

「なんだ……」

そう言われればその通り。紛らわしい岩にレミリアは遣る瀬無く魔力の塊を放り投げ打ち砕き、地を揺るがす振動と舞い散る岩の破片に満月と美鈴は肩を落とす。触らぬ神に祟りなし。不機嫌な吸血鬼を突つつく気は流石に満月もなく、「すいません」と小声で謝り肘で小突いてくる美鈴には訳もわからず肩を竦めるのみである。

結局ないものはないのではないか。コブにだつこちゃん人形のように張り付くレミリアの肩が小突かれ、レミリアは面倒臭そうに身を振った。

「もう美鈴？ 今は放っておいて」

誰にだつて項垂れたい時はある。諦めの言葉は吐かずとも、ただそれが溶解するまで抱える時間が必要だ。なのに肩を小突いてくる手は止まらず、少し強めにレミリアは小突かれた肩を払う。

「満月？ 放っておいてって」

それでも小突いてくる手は止まらない。気が利く従者とお節介な用心棒。でも今はそれが足りない。「もう！」と強く顔を上げて振り向いたレミリアの紅い瞳に赤い体が写り込む。

はち切れんばかりになにかを詰め込んだかのようにテラテラ光り膨れた赤い体。丸い黒真珠のような目玉が二つ。赤い風船に無理矢理取り付けたように埋まっている。八目鰻のような丸い口から覗く白い小さな無数の牙と赤い触手。ゆらりと揺らめく多くの触手が、リズムよくレミリアの肩を叩き味見するようにレミリアの頬をぬらりと舐める。血の気の引いたレミリアの肩に置かれた触手の生暖かさに炙られるように、心の底から湧き上がる感情を喉の奥から絞り出す。

「ぬおうあツつだば!?? モウヌウツ!!!」

気持ちの悪い叫びと共にレミリアは満月と美鈴の背に張り付いた。陽の下など関係なく黒い翼をはためかせ、突っ込んで来た小さな火達磨に巻き込まれ三人まとめて地を転がる。顔面雑巾掛けのように砂に埋もれた顔を満月は勢いよく上げて、犬神家のように砂の海に突き刺さっている美鈴を慌てて引き抜いた。

「れみいなにしやがる!?? 起きろ美鈴殿! 美鈴殿が居なきや夜死んじまう! 美鈴殿おおツ!!? 起きろ起きろ!」

「ううん、満月さんあんまり揺らさないでええ……きもちわるいでずうう……」

「わああツ!?? 吐くな吐くなツ!?? れみい水だ! 水を持ってい!

「も、ももおおおツ!?? もんぬうううツツ!??」

「何語だツ!?? てかくつつくなツ!?? 燃える燃えるツ!??」

「あつちいいツ!??」と火の点いた着物を砂の上に転がり鎮火する満月と、口からキラキラと胃の中身を吐き出す美鈴。全く頼りならない二人から目を外し駱駝の元へとレミリアは目を戻す。

「あれ……?」

駱駝の列には駱駝のみ。赤い怪蟲の姿はなく、のっそり駱駝が歩いているだけ。小首を傾げるレミリアの両肩にずっしりと重い何か張り付いて、振り返った先に焦げた用心棒と白い顔の従者の手が伸びていた。

「お嬢様よおおおツ」

「お嬢様……お嬢様……お嬢様……」

「待った待ったツ!?? 今死亡之虫がッ!」
モンゴリアンデスワーム

「なにもいないだろうが! おかげで俺と美鈴殿の少ない服が穴だらけだ!」

「お嬢様ああ……」

「ちよ、美鈴怖い! 本当にいたんだって!」

どれだけレミリアが声高に叫ぼうともいないものはいない。だが

確かにレミリアは見た。突き刺さる二人の視線から目を反らしながらも、レミリアは小さく口端を持ち上げる。

「なに笑っているのだ！」

「お嬢様ああああ……」

「分かった分かった！ ほら美鈴が新しい黒布買ったから！ 服も今度オアシス寄ったら新しいの買いましょ！ ね！ ね！」

「誤魔化されるか！」「おじようさまあツ!!？」

くつついてくる用心棒と従者を振り払い、煤けた黒布を取り払って急ぎレミリアは新しい黒布をすつぽり纏う。その肌触りを楽しみながら、同じように黒布を纏いふらふら歩く二人の背にレミリアは笑み零し、振り返った背後の先に小さく頭を覗かせて佇む赤い怪蟲は見なかつたことにしてレミリアは青い顔を前へと戻した。ただし口は弧を描いたまま。

レミリアちゃんとヒマラヤ山脈

轟々と吹る風を耳に感じながら、踏み出した足がざくりつ、と音を立てて大地を削った。延々と一月以上も見続けて来た砂の海。だが、今レミリアが地面へ目を落とせば、映るのは真っ白い氷の粒である。ギザギザとした歯のように突き出た岩肌が、透明で寒々しい強固な粒に覆われている。塔のように聳える山々を少しの間見上げ、背後へ振り返った開けた先の遙か向こうに広がった砂の絨毯に目を這わせた。

遠く立ち上る熱気と、今まさに身を包んでいる冷気が混じり合ったかのように空気を歪め、地球の丸みに沿って広がる砂の大地は正しく海のように波うってレミリアには見えた。

吐いた吐息は唇の先から漏れた端から白み、冷たい空気が肌を撫で付ける。

まるで太い境界線のように大地を隔てる無数の山々。地上の中で最も空に高い大地。世界最大級の大河であるインダス川、ガンジス川、ブラマプトラ川、黄河、長江の水源となっている恵の大嶽。

7200m級の山が百以上も点在し、チベットでは曰くチョモランマ、中国では曰く聖母峰、通称エベレストと呼ばれる世界最大の山岳を含むこの山脈地帯こそヒマラヤ山脈。その山肌をレミリアと満月、美鈴の三人は歩いていた。

砂漠の夜もそれはもう寒かったが、山の寒さはまた違う。「寒い」という禁句を口にしたくても、口を開けば山から吹き下ろしてくる風が口の中を凍て付かせ、口を開くのも億劫だ。

地上から100m上がるだけで気温は0.6度低下する。山頂に至るわけではなからうと、ヒマラヤ山脈を越えようと思えば2000m、3000mと高度は上がる。10度20度と気温が下がり、嶺から吹き下ろしてくる山風とそれに交じる白い結晶。ツンツンと針が刺さるかのような乾いた鋭い空気の中は、人が容易に踏み入っていない領域ではない。

パクス・モンゴリカと呼ばれた大モンゴル帝国時代。並み居るモンゴルの皇帝達^{ハーン}がユーラシア大陸のほぼ全てを治めようと、全てに至ら

なかったのは、ヒマラヤ山脈があったから。

二十一世紀になってからも多くの人間を死に誘う人喰い山。800mを超える場では死体を下すこともできず各山二百以上の死体が今尚放置されている世界最高峰の墓場。

十七世紀、酸素マスクもなければ命綱の類もない。唯一あるのは山の麓で手に入れた「かんじき」雪上を歩くための民具。のようなのがあるだけ。

山に登るぐらいなんだとレミアアも初め思ったが、一步山の中腹に踏み入れば考えも百八十度変わる。「え？ 死ぬ気？」と自殺志願者を見るようだった麓の地元民たちの目が、今更になって思い出される。やばいと分かっていいるのならもつと本気で引き止めてくれとレミアアも思わないでもないが、時すでに遅し。ただ呼吸を繰り返して山に登るだけの機械とレミアアの体は化していた。

「空気が薄いな美鈴殿、これほどの山脈、日ノ本にはまずない。霊峰富士が子供に見えるぞ」

「修行の場としてはいいですが、住みたい場所ではないですね」

「はっはっは！ 違うない！」

「なんで……貴方たち……そんな元気なの？」

陽の下であろうとも満月や美鈴よりも身体能力はレミアアの方が高い。にも関わらず、厚手の毛布に包まり歩くレミアアよりも、満月と美鈴は随分と元気だ。「修行時代の方がキツかった」と同じ理由を吐く二人の武人の頭のおかしさにレミアアは呆れることしかできない。ヒマラヤ山脈を歩くよりもキツイ修行の内容など聞きたくなく、レミアアの吐く息はその重さを表すかのように真っ白く染まる。

「だいたい……この山……登らなきゃダメなの？」

「早くるーまにあに帰りたいと言っているのはお嬢様だろうに。この道が最短ではあるのだそうな」

「ヒマラヤ山脈を迂回するともっと時間が掛かるそうですからね。仕方ないです」

「……仕方ないって……なんで私が」

足を踏み出す毎に湧き上がる後悔と恨み。ルーマニアに至るため

には仕方ないとは言え、それでも辛い現状に対する不満は溜まる。「あのクソ野郎……」とこんな現状にレミリアが身を浸している原因である父に対して不満を零しながら、レミリアは恨みを力に変えて一歩一歩とより強く足を出した。

「ハア——それにしても……」

口から漏れ出る白んだ息を見送って、レミリアは前を行く二つの背を見つめる。

「貴方たちは……」

なぜ己と共に今居てくれているのか？

無論それはレミリアが雇い共に来てくれと頼んだからであるのだが、レミリアでさえキツイ山道の先、不満を口にすることはあっても、迷うことなくルーマニアを目指してくれる二人は頼もしいが、不安でもある。満月はフランの首飾りネックレスを報酬として、美鈴は今度こそ守りきるため、レミリアも分かっている二人の理由はあるが、所詮それは上澄みに過ぎない。

レミリアは少し歩く速度を上げて、二人の間へと歩を進める。落とされる二つの雪のような笑顔の柔らかさが、なんとも寒々しくレミリアの目には映った。

「どうしたお嬢様、疲れたのか？」

「休憩にでも致しましょうか？」

「いや、別に……二人は？」

「おや心配してくれるとは珍しい。俺は大丈夫さ」

「私も大丈夫です。鍛えてますからね！」

「そう……」

向けられる笑顔の暖かさは、すぐに寒風に巻かれて霧散してしまう。レミリアには確固とした理由がある。妹のため。全てはフランドールのため。妹が与えてくれた多くのものを返すため。

でも二人は？

出島で用心棒をしていた変な男。山門を長らく守っていた妖。二

人がなにかしらを背負っていることはレミリアにだって分かっている。だが大きな不満も口にせず二人が共にいてくれるわけは？ ヒマラヤ山脈の寒風に削り出されるかのように、薄い空気の中、重い心が浮き上がる。

「貴方たちはなぜ一緒に居てくれるの？」

だから普段は押し込めている不安が、ふとレミリアの口から零れた。まん丸く瞬く青い瞳が二つづつ。なに言ってるんだろと思いなながらも、吐き出された疑問は飲み込めない。暗く輝く紅い瞳に満月と美鈴は頭を掻き、困ったように顔を背けた。

「仕事だ、仕事」

「お嬢様は昼寝でもできるような門の門番にして下さると言っただけありませんか」

「そうだけど……私が知りたいのはそれじゃない」

玉葱のように幾重にも重なった心の表層を知りたい訳では断じてない。より深く、心の底でなにを想っているのか。二人を選んだのはレミリア自身。それは変わらない。妹を救うために力がある。それも変わらない。しかし、なぜ？と思わずにいられない。

「だって……だって二人はフランのことを知らないでしょう？ 私が闘うのは妹のため……それぐらいしか私にはできないから。でも二人は？ 相手は私より強大な吸血鬼、それも多くの僕を従えた。私は一度負けて逃げた小娘。そんな私になぜ二人はついて来てくれるの？ 勝ちの目だってあるか分からないのに……」

「なんだそれは？ 帰って欲しいのか？」

「そうじゃない！ そうじゃないけど……」

不安で仕方ないのだ。

未だ自分の力も分からず、一度ルーマニアで裏切られた事実がレミリアの心を掻き巻く。『裏切り』。そのたった三文字がレミリアの全てを崩した。その冷酷さを知っているからこそ、レミリアは信じてくれないものを裏切るようなことをしたくない。でも二人の心が分からないから、もしかするとまた裏切られるのではないかという影のようにべつたりと張り付く不安が拭えない。

心を覗ければどんなにいいか。だが覚妖怪のような第三の瞳などレミリアは持っていない。「そうでないならいいじゃないか？」と零す満月の笑みがどんな心に沿ったものなのかが分からない。

「でも……、なぜ？　なぜなの？　故郷を離れてこんなところまで……。嬉しいけど……でも」

「れみいお嬢様……」

美鈴の悲し気な顔もレミリアの言葉を止めるには足らず、勢いよく上げたレミリアの瞳が用心棒と従者を射抜く。

「満月は用心棒の軌跡など追うものではないと言うけれど……私は……、満月ッ！　美鈴ッ！　なぜなの！」

「……お嬢様よ、寒さで疲れてるから不安になるのだ。少し休憩しようぞ」

「疲れてなんかない！」と踏み締めたレミリアの足は雪の肌の上をずるりと滑り、そのまま斜面をズルズル滑ってゆく。声も漏らさず雪に顔を埋めて動かないレミリアに、満月と美鈴は顔を見合わせると急いで駆け寄った。「大丈夫ですか？」と掛けられる美鈴の言葉にも反応せず動かないレミリアの体を抱き上げようと満月は手を伸ばすが、鬱陶し気に払われてしまう。

なんとも惨めだ。

喚き雪に足を取られて斜面を滑る。なにをやっているんだと体の力を抜いたレミリアであったが、一呼吸の間を置いて勢いよく顔を上げる。

「おおう、復活したかお嬢様。前に進むべき道がある時は迷ってる場合ではないぞ？」

「そうですねお嬢様、大丈夫、私も満月さんも共にいますから。ね？」

「……ない」

「なに？」

「フランの首飾りがネックレスがない！　なんで？　どこにッ!?？」

毛布の上から胸元をレミリアは叩くが十字架の感触はまるでなく、体温に熱せられた乾いた空気が首元から抜けるだけ。辺りを見回せば、白い大地の上でキラリと銀の輝きが散った。ゆらりと浮き上がり

左右に小さく揺れる歪な十字架を見つけ、レミアは一瞬笑顔を浮かべるもすぐに笑みを消した。

なぜ宙に揺れている？

「もっふー！」

首飾りを握る白い綿のような毛に覆われた手。青い手のひらと、青い顔以外に見える肌はなく、全身を白い毛皮に覆われている。聞き慣れぬ言葉を零しながら銀の十字架を天に掲げ、白い人影は嬉しそうに跳ねると斜面の上へと駆けてゆく。

「は？ はあ？？？ ちよちよちよつと？？？ なによアイツ？？？」

「お、俺の報酬が奪われちまったツ！！？ なんだああの野郎ツ！ 切腹だ切腹！ 腹切りぞツ！！？」

「まだ貴方のものじゃないでしょ！ 追うわよ！ 返しなさいフランの首飾りツ！！？」

「もっふもふ！！？」

「あれなんて言ってるんでしょうか……？？」

雪山を野山のように駆ける白い影。吸血鬼たちを置き去りに駆けるその者こそヒマラヤ山脈の秘密の主。三つの影が白い影を追い雪山を駆ける。

「見失ったああああ！！？ なんなのよアイツ！」

「お、俺の報酬が……」

「それよりどこどこですか？」

ぼつりと零された美鈴の言葉に満月はよりがっくりと肩を落とした。刀をざくりと雪に突き立て項垂れる姿は老人のようで見ていられない。広大なヒマラヤ山脈で遭難？ と最も考えたくない事態に満月と美鈴は乾いた笑いを上げ、その中身のない笑い声にレミアもがつくしと膝を折る。

「フランの ネックレス 首飾りが……」

いつも肌身離さず持っていたのに、ふとしたことで奪われた。悪いことは積み重なっていくばかり。ひとり抱えた不安に振り回されて大事なものも失った。

「もう……なんで……、なんで!」

「お嬢様、大丈夫きつと見つかりますよ」

「そんなの分からないじゃない! あるかもしれない私の力もまだ見つからないのに! ネックレス 首飾りまでなくしたら……ッ!」

レミアアは振り返り満月を見つめた。刀に寄りかかるように佇む用心棒の顔がゆつくりとレミアアの方へと向く。

「ネックレス 首飾りがなくなつたわ満月」

「みたいだな、俺の報酬が……」

「これで貴方が来る理由がなくなつたわね」

「おいおい」

小さく笑う満月に笑い声は返されない。諦めたように肩を落とす吸血鬼の雇い主に満月も口角を落とし、静かに身を起こし首を傾げた。「冗談?」と口から出かかった言葉を飲み込んで、引き絞られた紅い瞳と満月は瞳を合わせる。揺れ動く紅い瞳を眺めて満月は盛大に舌を打った。

「諦めるのか? これで終わり? ここまで来てさよならか?」

「だって、仕方ないじゃない……。ここは知らない場所で……。貴方に与えられるものなんて私にはないもの……」

用心棒の給金が幾らであるかなどレミアアは知らない。月牙泉で稼いだ銀貨も旅の中で大分減った。ここまでの旅路に見合うものかどうか。満月を繋ぎ止めていた楔はなくなつたと手を弱く広げるレミアアに、満月は苛立たしげに歩み寄る。

「待ておい、それは本心か? たかが物がなくなつただけでおさらばかよ」

「そうよ……。だって、アレがあつたから貴方についてきたんでしょ人間」

「は? ……はっはっは。そうかそうかなるほどの」

レミリアの言葉を飲み込んで、満月は薄く笑い呆れたように顔を背ける。

「お嬢様よう、なんで俺がついて来てるのか知りたいのだったな？」

「……それが？」

「あんな 首飾りひとつが理由であるはずがあるまい」

小さく見開かれたレミリアに満月は大きくため息を吐いた。白んだ吐息が風に流されてゆくのを見送って、満月は力なく肩を落とす。レミリアは多少抜けてはいるが気が付いていると思っただけと言うように。

値打ちが分からぬ 首飾りネックレスのために、わざわざ日ノ本から遠くヒマラヤ山脈まで来る用心棒などいるはずがない。もしそんな者がいるのならイカれであると満月は断言する。

吸血鬼の妖しさに惹かれて？

遙かな冒険に憧れて？

吸血鬼退治に夢を見て？

残念ながらもどれでもない。小さな吸血鬼が頑張る姿に心打たれたからでもなく、レミリアに惚れたからでも断じて違う。

「……俺はな、俺は先が見たいのだ。敗残兵である貴殿は立ち向かうと言っただろう？ だから俺はここにいます」

描かれるかもしれない未来を見たいがために。無謀な闘いを挑むという少女の行き先が見たいから。破滅か勝利か。どちらであつても最後まで。

「別にお嬢様でなくとも良かった。が、巡り合わせと言うか、運命だとしても言うのだろうか。あの日あの夜満月の日に出会ったのがれみいであつただけのこと。それが俺がここにいますわけだよれみい」

「なによそれ……、つまりどういうこと？」

「れみいが俺を選んだのではなく、俺がれみいを選んだというわけじゃ。なあ美鈴殿？」

わけが分からないと首を傾げるレミリアの前に、今度は美鈴が屈み手を取った。満月の問い掛けに答えるように、その言葉をレミリアに向けて送る。

「……前にも言った通り私は貴女の純真さについて行こうと決めたのです。れみいお嬢様の力に引つ張られたのではなく、その心についていこうと。ただ妹を救いたいと言う貴女に。私にはなかったものだから。仕事が欲しいからついて来ているわけではありません」

昼寝でも出来るような門の門番に。そんなふやけた事を口にするレミリアに。力を求め不必要な旅をした自分の力を貸したいと思っただが故に。レミリアが美鈴を選んだのではなく、美鈴がレミリアを選んだ。

美鈴の笑顔に俯いたレミリアの肩の上、満月のゴツゴツとした手が置かれ、二つの笑顔がレミリアの視界に収まった。レミリアが選んだつもりでも、実際に選んだのは用心棒と従者自身。差し出された手を見送らず、掴んだのは満月と美鈴。ルーマニアで力を貸して欲しいと叫び、その実誰も聞いてくれなかった時とは違う。

選んだのではなく選ばれた。それが当主の第一歩。打算などではなく己のため、お前が必要だと背中を押される。それがどんな理由であつても、誰かを率いていることには変わりなし。そのために必要なのは前を向くこと。辿々しくも先に行くこと。

顔を上げたレミリアの前に満月の手が伸ばされて、人差し指がピンと伸びた。用心棒の指の先を追い、向いたレミリアの目に映る雪の上で落とされた大きな足跡。用心棒と従者の顔へ目を戻したレミリアは、小さく顔を縦に降る。

「……行くわよ二人とも、妹の首飾ネックレスを取り戻すわ！」

「そうしよう。俺の報酬だ。貰えるものは貰っておかんと」

「……貴方そういうところは本当にブレないわよね」

「あはは、まあ満月さんらしいということだ」

立ち上がったレミリアの背後に二つの影が並ぶ。向かう先は決まったのだ。二つの影を引き連れて、小さな主人が一步を踏み。

1887年、イギリスのウォーデル大佐という人物が、ヒマラヤ山脈で雪の中に落とされた大きな足跡を発見した。人の形とは違うその足跡に、ヒマラヤ山脈には誰も見たことのない謎の生物が存在するという噂が世界中を駆け巡った。1954年にイギリスの新聞社が大々的に報じて以降多くの捜索隊がヒマラヤ山脈に派遣されるも未だ発見に至らず。名を『イエティ』、ヒンドゥー教ではシヴァの使いと呼ばれ、「噂をするとやって来る」と恐れられているとかいないとか。そんなイエティの足跡を追い数十分。レミアア一行は岩の影に身を潜め三人仲良く顔を出して白い人影を睨んでいた。

斜面の下で嬉しそうに十字架を首に掛けてくるくる回る怪物にどんな感想を抱けばいいのか。満月も美鈴もレミアアも冷めた目で白い影の動きを見つめる。

「なにやってんのよアレ」

「さあ？ 首飾りつけて喜んでるように見えるが」

「女の子なんでしょうかね？」

そう言われれば胸の膨らみがあるようなないようなどうだっという情報に肩を竦めるしかない。「もっふもっふ♪」と両手を掲げ雪の上を跳ねているイエティに、レミアアはギリギリと歯を軋ませてバツと岩陰から飛び出した。相対する白い影と毛布にすっぽり包まれた黒い小さな影。なんとも言えない光景に満月と美鈴は苦笑しながら澁々岩陰から這いずり出る。

「ちよつと貴女！ それは私の妹の首飾りよ！ 返しなさい！」

「もっふ？ もふもふ？ もっふっふ！」

「はあ？ ちよ、なに？」

「怒ってるのかどうかも分からんな。言葉を合わせてみてはどうだ？」

満月の助言に肩を落としながら、首飾りのためなら仕方なしとレミアアは腕を組み突っ立つイエティに、恥ずかしそうに口を開いた。

「モ、モッフモッフ」

「もっふ？ ももっふ！ ももっふ！」

「モ、モモツフ、モモツフ」

「もっふっふ！ もーっふ！ もーっふ！！？」

「なんなんですかこれ？」

会話が成立しているのかも分からない謎の状況に満月は腹を抱えて爆笑し、美鈴も我慢できずに小さく噴き出し顔を背ける。両手を広げ合いもふもふと繰り返す白黒の姿は、サルバドールⅡダリの絵画のようにシユールに溢れ見えていられない。なにやっつてんだと我に返ったレミリアは我慢できずにイエティに向かい手を伸ばし、小さな手はけむくじやらの手に強引にはたき落とされた。

「もふっ？ もっふっふっふ！！？」

「おい、なんか怒っていないか？」

「なんでよっ？？ 勝手過ぎるでしょー！」

「も——っふ！！！」

高く掲げられて落とされたイエティの足は、ズボツと白い大地を蹴り抜いて下半身が雪に埋まる。地を揺らす大きな振動とは裏腹に目の前に広がった間拔けな姿に呆れさえ起こらない。

「あー……っ、これは首飾りネックレス取っちゃっていいのよね？」

「いいと思うぞ、間拔けに感謝だ」

「それはいいんですけど、地鳴りが止まないんですけどなんででしょうね？」

三人が顔を見合わせて耳を澄ませば、薄い地鳴りが止むことなく響き続けている。それに加えて地を揺るがす振動が徐々に強さを増し、地鳴りの音も強さを増した。青褪める満月と美鈴の顔を不思議なものを見るようにレミリアは見比べていたが、視界の端で舞った白色に目を移してぴたりと動きを止める。

白い津波が山の斜面を滑っていた。

雪を巻き上げ前方に居座るものを飲み込む姿は大蛇の如し。大岩に衝突した白波は、岩を木っ端微塵に砕き轢き潰し、その体積を一秒ごとに増やしながらか斜面を落ちるように削っている。

雪崩。

身を包む凍てついた空気よりも体温が急降下するのを感じ、浮かん

だ冷や汗は凍り付いたかのように重力に逆らい落ちてくれない。レミアは急ぎイエティへと振り返り、首飾りネックレスへと手を伸ばそうとして固まった。雪に手を突き埋まった体を引き抜こうともがくイエティの姿に手が止まる。

「おいどうしたお嬢様！ 早く戻らないとやばいぞ！」

「分かってる！ ああもう、ほら手を出して！」

「もっふもっふー！」

「もふもふうっさい！ 手を出してって!!？」

強引にイエティの手を掴みレミアは引つ張るが、「重ッ!!？」と出したくもない声が口から漏れ出る。白い毛皮の下にはなにが詰まっているのか。レミアの膂力を持っても引っこ抜けないイエティの体重に足を踏ん張るが摩擦を殺す雪の上を足が滑る。

「おれれみい！ いくら俺でも雪崩は斬れぬぞ！」

「分かってるってば！ でも首飾りネックレスだけは！ それに……、ほっとけ

はしないでしょ！」

首飾りネックレスを奪った盗人でも、どうしてもひとりぼっちで見捨てるようなことをしたくはない。その姿はまるで自分のようだから……。

落ちて来る驚異の中にたったひとり残された時の悲しさを誰よりレミアは知っている。イエティの白い瞳を覗き込み、レミアは強く頷くと今一度全身に力を込める。

「ほら……抜けなさいッ！」

「もっふー！」

「抜ッ……けたあッ!!？」

ズボツと引き抜けたイエティと共にレミアは雪の上に転がった。柔らかな雪の感触に背をつけながら、大きな振動と白い雪の舞い散る空気に身を起こしたレミアの前に、力なく立つ満月の背中が映る。迫る雪崩は壁と同じ。止め処なく冷や汗を垂らし続ける満月の口端は引き攣ったもので、手がないことを示していた。

間に合わない。

逃げる時間は既になく、雪に轢殺されるのを待つしかない。言葉にはなってくれないレミアの呼吸は荒く、ただ静かに手を握った。

諦めるか諦めないか。
選ぶ時間などなく、選ぶ必要もない。

——諦めないッ！

ここまでやって来て、再び妹の顔も見れず、ついて来てくれた満月と美鈴と知らぬ雪山で命を散らすことなどレミリアは絶対に認めない。

両手を握り立つレミリアだったが、目の前で赤い長髪が揺れるのを見て僅かに握った手を緩める。

「美鈴ッ！」

肩越しに見える美鈴の微笑み。

一歩前へと足を出し、緩やかに手を雪崩に差し向ける。

やるべきことはただのひとつ。

「……お嬢様、前に言いましたね。私が山門を守っていたのは例え私が居ても結果は変わらず、山賊に寺を焼かれることになっていたかと思いたかったからだ」と

「ええ……」

「その通りです。……ですが、それとは逆にもう一つ。きっと私が居れば大丈夫であったと、そう思いたかったから」

力を求めず、救ってくれた師のそばに自分が居たのなら、きっと守り切れたと信じたい、

力のためでなく愛のために。

妹を目指し歩むレミリアならばきつと守り切れなかった自分と違い守り切れるはずだと見届けたいから。

そのために美鈴は立ちほだかる。

守るべきものは今ここに。

大事なものは見えずとも背中に確かに佇んでいる。

「私は門番、紅美鈴。誰であろうと、自然の牙も、私は通しは致しません。守るべきものは私が決める。それはもう知っている。お嬢様こそが私の夢です。信じていただけますか？ れみいお嬢様」

「ええ……信じるツ、信じるわ美鈴！ 私だけの門番！ 私だけの従者！」

「それが聞ければ満足です！ 参るツ!!??」

迫る白い大河を目に留める必要はなし。瞼を落とし呼吸を鎮める。美鈴が合わせるのは大地の吐息。震え走る白い流れにゆつくりと手を差し伸ばし、指先に掛かる振動に合わせて強く前に出した足を踏み込んだ。

——ペキツ!!??

流れに巻き込まれへし折れた指の痛みにも歯を食い縛り、美鈴は膠着しようという体の力を無理矢理抜いた。

（求めるのは力にあらず、突っ込んでくる力の流れに力に対しても飲み込まれるのみ、ならば!!??）

雪崩の切っ先を掬い上げるように反らしながら、正面から力は加えず横から腹を貫くように手のひらを沿わせる。

「美鈴ツ!!!」

背に掛かる主の呼び声に口角を上げて、美鈴は手を振り上げた。雪崩の流れを受け流す。決して背後に流れぬように、大きく弧を描き空へ反れた白い大河をレミリアは呆けた顔で見つめた。陽の光に輝く白銀の橋。斜面から飛び出してキラキラと広大な景色に溶けてゆく自然の牙の美しさに深い息を吐き出して、振り返った門番にレミリアは息を吸うのも惜しみ飛び付いた。

「あはは、お嬢様、これで信じていただけますか？」

「ええ最高だわ！ 信じるは美鈴これからも！」

「はいお嬢様！」

笑い合う二人を眺めながら、満月は強く一度咳払いをして美鈴の手を取り折れた指の形を整えてやる。「痛ツ!!??」と涙目になる美鈴に笑いながら、その指に破った着物の切れ端を巻き付けた。

「お見事美鈴殿。山門の妖、その力見せて貰ったよ」

「ええ満月さん。次は満月さんも通しません」

「怖い怖い。突っ立ってた俺より美鈴殿の方が用心棒らしいの」

「本当よ全く。満月、貴方もしつかり働きなさいよね！ 美鈴を見習って！」

「あいよ」

「もっふもっふー！」

満月と隣にひよっこりと、頭を出したイエティにそう言えば居たなとすっかり存在を忘れていたレミリアであつたが、差し出された十字架を見て目を丸くした。「もっふー！」と手を出し続けるイエティに、満月はポンと手を叩く。

「お礼にくれるらしいぞお嬢様」

「くれるって……元々私のよ」

「俺の報酬でもある」

「はいはい、全く。確かに返してもらったわ。あー、なんて名前か知らないけど。私はレミリア＝スカーレットよ、よろしく」

「もっふー！ レミリア！」

「喋れるの……、って言うか久々にちゃんと名前呼ばれたわ！」

すぐにもももふと訳の分からぬ言語に戻ってしまふイエティであるが、時折「レミリア！」と小さな吸血鬼の名前を叫ぶ。「れみりや」と真似して口遊ぶ満月と美鈴にレミリアは冷たい視線を突き刺して、呆れたように両手を挙げた。

「もっふー！ レミリア！ もももふー！」

「あーつと……、なに？」

「ついて来いと言っているのではないのかな？ 手招きしておるし」
「なるほど、案内人を手に入れたわけね。じゃあ行きましょ」

白い影の後を追い、雪の山を踏み締める。イエティの歩む道を進んだ先、小さな丘の上からの眺めにレミリアは小さな吐息を漏らした。遠くに輝くのは火の瞬き。まだ幾分か掛かろうとも、もう手を伸ばせば届くのではないかと思うような距離に輝く人工の灯り。

ジャーン朝。

十七世紀、中央アジアの暗黒時代の中、最盛期を築いたカスピ海の右に座した石造りの王朝。今で言うウズベキスタン。ルーマニアまでもう伸ばした手の指先が掛かろうとしていた。

レミリアちゃんと青の都

ジャーゴン王朝。

現代で言うウズベキスタンに、十七世紀頃存在していた王朝である。暗黒時代の中央アジアの中にあつて、最盛期を築いた青の都。十七世紀以前から、豊かな国を多く生み出し、王朝が滅亡しようともすぐに栄え直して来たウズベキスタン。その富の根本こそレミリア一行が延々と歩いて来た絹シルクロードの道である。

ウズベキスタンは絹シルクロードの道の中継地にして中心地。陸を渡り西へ東へ、その旅人のほとんどがウズベキスタンを経由する。ヒマラヤ山脈やゴビ砂漠に入る玄関口として、又は長旅の疲れを癒すため、多くの行商人癒しの地としてウズベキスタンの大地を踏み、また、多くの巡礼者が訪れる。

かつて東へと足を伸ばしたアレキサンダー大王古代ギリシャのアルゲアス朝マケドニア王国の王が、「聞いていた以上に美しい」と感嘆の声を上げたと言う「東方の真珠」。それがウズベキスタンにある青の都『サマルカンド』。

青の都と呼ばれる所以は、なにより石造りの建築物を彩る青いタイルと青い屋根。中国の陶磁器とペルシャの顔料、東と西の技術が見事に調和した姿。青空を凝縮したような玉ねぎ頭のモスクイスラム教の礼拝堂の屋根は大きな宝石のようであった。そんな青い珠玉と呼べる二つの建物に挟まれた広場が存在する。

レギスタン広場。

今でさえ三つの神学校に囲まれた世界遺産に含まれている広場であるが、レミリアたちが踏み入った1640年代はまだ二つ。広場を挟み向かい合っている神学校たちは正に門のような様相を呈していた。視界の右端に映る青い屋根。左端にも青い屋根。

その二つを見比べて頬を膨らませる青い髪に、両脇に座る青い瞳が困ったように向けられる。

「なあお嬢様、いい加減機嫌を治すがよいよ。折角ヒマラヤ山脈から下りられて久々の都なのだ。今日一日はここで文字通り羽を休めて

だな」

「……羽を休めてつてどうやってよ、今の私を見て楽しめると思う？」
手を広げるレミリアの全身を見回して、満月も美鈴も肩を竦めるしかない。ぱつと見はいつもと変わらない。が、腰にぶら下がっていた革袋がないことに目を瞑ればである。

「こつて巡礼地でもあるのよね？　なんでそんな場所で早々に^{スリ}掏摸スリに会わなきゃならないのよ！」

イエティの先導のもとくたくたになってヒマラヤ山脈を下りれば山に溢れていた雪の代わりに広がっていた人の海。ピリついていた中国とは違い、繁栄の栄華を思う存分謳歌しているジャーン王朝の都は熱気に溢れ、その熱気が両極端である富豪と貧乏人を煽り富と罪が横行していた。

豊かであれば価値を奮うのは「金」である。腰にジャラジャラと銀貨を打ち鳴らす見た目幼女から金を奪わないなどという選択肢がないはずもなく、人海に飲み込まれた中でくたくたの三人は容易く掠め取られてしまった。故にレミリアの機嫌は頗る悪く、降って湧いた貧乏生活に頬を膨らませるだけだ。

「神を敬うやつらがその地で易々と罪に手を出すなんてどういう神経してるのよ！　あの青屋根も！　あの青屋根も！　全部お墓なんでしょ？　要はサマルカンドコつて大きな墓地でしょ！　そんな場所で^{スリ}掏摸スリだなんて墓荒らしと一緒よ！　これだから人間は！」

偉大なる王たちの眠る墓廟を指差し牙を剥く吸血鬼の怒気は治ることを知らず、巡礼者でもないのに巡礼者のようなことを騒ぐレミリアの姿を^{エクソシスト}祓魔師エクソシストが見れば目を丸くするに違いない。もしくは神に祈りでも捧げるか。

なににせよ、これまで人の少ないイバラ道を進んで歩いて来たが故に怪物としてのレミリアの気性もなりを潜めていたが、すっかり血気盛んな人海に揉まれ、『これだから人間は！』モードに入ってしまったレミリアに満月が打てる手はなく、やんわりと美鈴が手を合わせる。

「まあまあお嬢様、折角の都、土地の食べ物でも食べて落ち着きましよう。ね？」

「それがいい、腹が減っては戦はできぬ」

「貴方が血をくれればお腹は満たされるわ」

「俺は低血圧でね、それに痛いのは嫌じゃ」

相変わらず血をくれない用心棒にレミリアは鼻を鳴らしながら腰を上げる。

サマルガンド、青の都。霊廟やモスクの青い屋根以外の建物は、どれも砂の色と同じ。砂の大地から削り出されたような建物たちの自然さが大地の匂いに都を満たし、風が人の営みの香りと混ぜ合わせる。旅人を歓迎してくれる屋台たちが燻らせる食べ物匂いと、多くの言葉が混じる喧騒。その騒がしさから逃れるように足を進め、ふとレミリアは足を止める。

「今……」

「どうしたお嬢様、御目に適う食べ物でも見つけたか？」

「違う、今……」

つかつかと数歩足を出したかと思えば、次第に踏み出す足に力を込めて風のようにレミリアは走り出す。その背を静かに満月と美鈴は見つめていたが、一呼吸遅れて慌てて主の背を追った。

「おいどうしたお嬢様！」

「なにかあったのですか！」

「声が！ 声が聞こえたッ！」

声など至る所から聞こえている。「声？」と満月と美鈴は首を傾げながらも足は止めない。人混みを縫って走るレミリアの速度は凄まじいものがあり、満月たちは他のことを気にしていられない。ただひとり、レミリアだけが鼓膜を震わす声を辿り先へ行く。

（フランの、フランの声がッ！）

鈴を転がしたような少女の声がレミリアの耳を擦って放さない。忘れもしない妹の声。なぜやどうしてと言う疑問は遥か後方に過ぎ去って、ただレミリアの足を強く動かした。人を避けて細い路地へ、陽の光を遮り薄暗い影の中蹲っている金髪を目に留めて、レミリアは大きく息を吐き出した。

「フランッ！！？」

レミリアの呼び掛けにゆっくり上がる小さな頭。金色の髪を揺らして起き上がった砂だらけの顔を見て、ゆっくりとレミリアの足が止まる。

「……フラン、じゃ、ない……」

透き通るような金色の髪は似ているがそれだけ。幼い顔と小さな背丈、大きさは似通っていても、顔の作りがまるで違う。足を止めたレミリアと小さな少女が目を合わせて数秒。金髪の少女は身を小さく震わせて、レミリアの胸へと勢いよく飛び込んだ。

「おごっつ!?」

「お姉様！ お助けください！」

「痛ったた……助けてってなによ……」

「追われてるんです！ 助けて！」

少女のタツクルを胸に受け咽せるレミリアに縋る少女に目を落とすレミリアの前から影が差す。顔を上げた先に立つ一人の男。その顔は下品な笑みを浮かべており、顎に手を当て少女の身へと目を這わす。

「探したぜおい、全く逃げるんじゃないよ」

「……なによ貴方」

「ん？ なんだお友達か？」

「別に違うけど」

レミリアの答えに困ったように男は頭を掻き、手を置いていた顎から手を放す。

「ならそいつをこっちに渡してくれ、なに悪いようにはしないさ」

「嫌！ お姉様助けて！」

「……少なくとも貴方が良い奴には見えないんだけど」

「お前には関係ねえんだよ餓鬼！」

少女と男はなんなのか？ なんの答えも出ず、答えなど必要ないと言うように男は足を出し拳を振りかぶる。黒い布に包まった小さな少女ひとり、どうとでもなると言うように笑う男の顔を紅い瞳が射抜いた。

遅っそい。

昼間であろうと関係なく、拳を振り抜こうという男の動きが止まっているかのようレミリアの目に映る。レミリアは吸血鬼で男は人。それを差し引いても、人狼に追われながら逃げ、戦い方を教えてくれると相手してくれる武人二人。それと比べてしまうとレミリアの目でも相手の動きの稚拙さが手に取るように分かる。

(確か……そうね)

差し向けられる拳を眺めながら、レミリアは満月と美鈴の言葉を思い出す。身が小さければ容易く懐に潜り込める。矛の根本が最大の隙。意識が最も剥離するのは差し向ける矛の根本であるとは二人の言葉。拳を握っているからこそ、それを差し向ける先に意識が移り、最も隙になるのがその腕の下、空いた懐。

矛に向かう勇気さえ絞り出せれば踏み入ることのできる盾のない空間。レミリアは足を踏み出して顔の横へと振り下ろされる拳を見送り、返しの拳を男の脇へと突き出した。

軋む骨の音と肺から空気の漏れる音。風船が弾けたように地を転がり血を吐く男に目を見開き、レミリアは突き出した拳を呆然と見つめる。

「当たった……、それもあんなに簡単に……」

昼間で人の血もろくに飲んでおらず、腹も減った状況で、吸血鬼の力を振り絞らなくても紙風船のように大の男が吹っ飛んだ。ただ力に任せて拳を振るうのとは違う感覚。過程を知るべしと笑う用心棒と従者の顔を思い出しながら微笑むレミリアの背後で、どきりっ、と鳴る衝突音にレミリアは小さく肩を跳ねさせた。

少女のことをすっかり忘れていた！

と振り返ったレミリアの胸に再び金色の頭が飛び込み、口から空気を零すレミリアの瞳には見慣れた男と女が立っていた。その周りに倒れているいくつもの影を見渡して、レミリアは数度目を瞬く。

「お嬢様、先程の打ち込みは見事でしたがもう少し周りを見まさんと」
「残心というやつだ。矛を振るった後も気を抜いてはいかんよお嬢様」

「う、うん。覚えとくわ」

「それよりお嬢様、そちらの方はどなたなのでしょうか？」

美鈴の視線の先を追い胸元で揺れる金色の髪へとレミリアは目を移す。どちらと言われてもレミリアだって名前は知らない。なんと言うべきかしばらく考え、レミリアが少女の肩へと手を伸ばした瞬間少女は顔をばつと上げた。鼻が付くほどに顔を寄せて来る少女に、堪らずレミリアは後退る。

「お姉様！ 助けて頂きありがとうございます！ もうほんつとうに助かりました！」

「え、ああ、ああ？」

少女の影の背から影が伸びる。伸びた影は少女の背から伸びた翼のせい。パタパタとはためく小さな翼の動きにレミリアは瞳を上下させ、笑う少女の顔へと目を戻す。

「貴女妖怪だったの？」

「はい！ もうあの人間たち怖いものって、もう少しで捕まってしまうところでした！ お姉様の妖気を見て、吸血鬼であるこの方ならと思いつい助けを叫んでしまいました、本当に助かりました！」

「人間たちが怖いって……、貴女妖怪じゃないの？」

「それはそうなんです……、私は弱っちい妖怪でして」

自嘲の笑みを浮かべながら指をツンツンと突き合わせる少女の背からは哀愁が漂い、妖怪らしさが全然ない。「そりやあそりや」と子供に甘い満月が煙管を取り出す様を横目に眺め、「ひええ人間」と縮こまる少女の姿はただただ残念だった。

「なんていうか、この旅で会った中で一番残念なやつね……、だいたいなんで人間から逃げてるのよ？」

「今の世はどこもかしこも人が力をつけてますから、妖怪の世は縮小していくばかり、妖怪なら好き勝手していいとたまに妖怪狩りがなされてるのです」

「妖怪狩り？」

「はい……、捕まっていたら金持ちの道楽になにをさせられていたか……」

拷問か性のはけ口か。そう力なく零す少女にレミリアは小さく拳

を握る。弱者を力で無理矢理抑えつける。それがどうにもレミリアは気に入らない。見ず知らずの妖怪であっても、いや、そんな名も知らぬ妖怪であればこそ、どうしても己の姿とレミリアは重ねてしまおう。握られた拳を見て美鈴は微笑み、満月はそっぽを向いて紫煙を吐いた。

「日ノ本も異国も変わらん。徳川の世になって日ノ本も多くの妖怪が姿を隠した。東北の方に隠れ里など作ってな」

「そうなんですか？」

「ああ、俺は出島に来る前は東北の方で妖怪相手に用心棒をしてな、大陸ではどうなんだ美鈴殿」

「私の国では人も妖も基本仙人を指していますからね、崑崙山などに集まっているとは聞きますね」

「大陸も日本もどこも変わらないのね人間てやつは」

火に薪が焚べられるように、日に日に強くなってゆく人の世界。満月のような人間が稀なのであって、ほとんどの人間は妖怪に手も足も出ない。が、技で武器で差を埋めて、世界のほとんどを掌握している。愚者であればこそ際限なく、妖怪まで手籠めにしようと思ふ人間は欲にレミリアは舌を打つ。

「本当に嫌になるわ、無駄に数が多いし、欲に際限がないし、基本弱つちいし、そのくせ傲慢で意地汚いし」

「困ったものよな」

「貴方もでしょうが」

大多数に纏められるも、間違いではないかと満月はなにも言わない。静かに紫煙を零す満月と、目を尖らせるレミリアを交互に眺めて「あはは」と美鈴は苦笑するのみ。藪を突っついてなにかが出てきても困ってしまう。少し淀んだ空気の中金髪の少女は三者三様の顔を見回し、はたと手を叩く。

「それよりお姉様方はここに何しに来られたのですか？ お姉様は西の方のようですけれど、異国の妖怪と人間なんかを引き連れて」

「なんか……」

人間だからと無条件で子供に嫌われる現状に愕然とする満月は

放っておき、レミリアはなんでもないと言うように緩く手を振る。

「ルーマニアまで旅をしてるのよ。妹を救うために」

「ルーマニアまで！　そうでしたか、分かりました！　助けられた恩は返さねばなりません！　この私が案内役を務めましょう！」

「え、いや、それは有難くはあるけど……」

胸を張ってレミリアの手を取り路地の外へと引っ張ってゆく。金髪の少女の笑顔に絆されるようにレミリアも薄っすらと口の端を持ち上げて、ゆっくりと足を進ませる。

「では参りましょうお姉様！　私はウカウと申します！　お姉様は」

「レミリアよ、レミリア＝スカーレット」

「レミリアお姉様！　素敵な名ですね！」

「レミリアお姉様！　こちらです！　ここに来たならこれを食べないと！」

サモサを手大きく手を振るウカウに苦笑しながらレミリアは歩み寄りそれを受け取る。

サモサはインド料理に分類されるものであるが、元々は中央アジアのものであると言われている。それもまた絹シルクロードの道によって運ばれたもの。じゃがいもや玉葱、レンズ豆と羊肉などを茹で潰し、香辛料で味付けしたものを生地で三角形に包み油で揚げたものである。中華まんまんと構造は似通っているが、味は全くの別物だ。

カリツとした食感に後に口に広がる野菜と肉を包む香辛料の香り。食欲を唆る香りを頬張るように齧り付き、溢れる肉汁に舌を火傷させながらもレミリアはなんとか飲み込む。

力を借りるべきは地元民とでも言うべきか、極東の島国で生きてき

た満月や、中国の山門に数十年居た美鈴よりもウカウは社交的で案内役として申し分ない。「ほら待ちなさい」と気分良さげにウカウの後を追うレミリアの背を見つめ、満月と美鈴はようやくホツと息を吐いた。

薄つすらと垣間見える妹の面影がレミリアの心を和らげる。ルーマニアでは何度も見せていただろう姉としてのレミリアの姿。頬を緩ませるレミリアは油断をしているのとは違いただ柔らかな空気を滲ませている。気を張っていた旅道の中、レミリアの素らしい立ち振る舞いを初めて垣間見、満月は緩く腕を組んだ。

「あれが本来のお嬢様かね、人も妖も変わらないと言うか」

「愛する者の前では誰もが同じというものでしょう。満月さんもそうではないんですか？」

「さて、どうか。俺や美鈴殿のように本心を匂わせても一線を引く者もいるだろう？」

「……そうですね」

につこりと笑う美鈴につこりと満月も笑い返し、笑みを消して二人レミリアの背中へ目を戻す。少しは長い旅路で満月も美鈴もレミリアのことは分かっているつもりだ。

『全ては妹のため』

百歳と言えば人なら赤ん坊が木乃伊のような老人になる短くも長い歲月である。人が一生を描く年月を生きてレミリアが決めた決断は、吸血鬼からすればどれほどの重さを持つものか。人である満月には理解できない。ただその想いが本物であろうことは満月も美鈴も分かっている。文句を言いながらも陽の差す昼間、ひとつきかたつきみつき一月二月三月と極東から中央アジアを歩き抜いた。その精神に疑いもない。

だが、レミリアはまだしも、満月と美鈴はお互いの心中を凶りかねていた。ある種の似た者同士、レミリアも美鈴も満月も敗北者だ。なにか大きなものを失った。それを取り戻そうとレミリアは力を振り絞っている。それが失敗するような姿が見たくない。満月も美鈴も、どれだけ力を振り絞っても、もう取り戻せるものはこの世から消えた。欠けた心の鋭さが誰かを傷つけるようなことがないように。だ

から満月も美鈴も一線を引く。

「美鈴殿、本当はもつと強いだろう？ 組手の時にたまに太極拳以外の軌跡を感じる。なぜ使わん？」

「それはお互い様でしょう？ 貴方ほど上っ面で生きている人は人間でも妖でも初めて見ました」

「こう見えて面の皮が厚くての」

「みたいですね。ですが“気”の揺らめきは隠せない」

なにがあってもなんでもないとというように、騒ぐ時は勢いのまま、満月は演じているだけで“気”の動きがまるで停止しているかのようには動かない。子供に甘いとレミリアは言うが、美鈴からすれば別に誰と話してる時とも変わらない。

「まるで死人。この霊廟の都にお似合いですよ。それが貴方がお嬢様について行ってる理由ですか？」

「……さてね」

「十五夜満月という名も偽名でしょう？ 本名はなんと言うのですか？」

「それこそ言う必要がないと見える」

取りつく島なし。言い淀んでいるように見えても気の動きはまるで変わらず。静まり返った満月の心情に波紋は立たず、美鈴ではそれを掬えない。お互いの内を探り合いながら前を向き瞬きもしない満月と美鈴へとレミリアは振り返り、歩みのゆったりとしている二人に大きく手を振る。

「遅いわよ二人とも！ なにのっそり歩いてるのよ！」

「申し訳ございませんお嬢様、珍しい景色でしたのでつい目移りを」

「美鈴殿との散歩が楽しくてつい」

消していた笑みを再度満月と美鈴は浮かべると、なんでもないように言葉を紡ぐ。そんな変わらぬ二人に呆れるようにレミリアは小さくため息を吐いた。

「全くもう、ウカウが折角案内を買って出てくれたんだから遅れちゃダメよ！」

「まあまあお姉様、私が案内をするからには幾日かの遅れなどどうと

でもなりますよ！」

胸を張るウカウは頼もしくはある。ヒマラヤ山脈然り、案内人がいるのといないのでは雲泥の差だ。「悪いわね」と微笑むレミリアの背後で満月は頭を掻き、徐ろに煙管を取り出すと口に啣えた。

「それでウカウ殿。案内とはるーまにあまで？　るーまにあの吸血鬼が待つ場までついて来てくれるのか？」

「はい！　受けたご恩は返さねばなりません！」

「そりや頼もしいな。是非頼もう」

満月も見習いなさいと指差すレミリアの視線を紫煙で吹き散らし、満月は顔を背けて頭を掻く。ウカウはそんな二人を見比べるとにへらと柔らかな笑い声を零した。

「お姉様はその人間と仲がよろしいのですね！」

「え、ま、まあ極東からずっと一緒だし」

「でもお姉様は妖怪ではないですか？　なぜ人間と一緒にいるのですか？　奴隷ですか？」

急に失礼なことを言いやがると唇を尖らせる満月を見上げて、「別に奴隷なんかじゃないけれど……」と呟きながら首を傾げる。

なぜ？　と言われてもレミリアが選んだからだ。人であろうと頼りにはなると妹の首飾り《ネックレス》を懸けて。強大な父を倒し当主となるため。これまでの道のりを思い返しながら告げるレミリアに、ウカウは大きく口端を落とす。

「人と一緒にいるためにお姉様の妹様の贈り物まで賭けたんですか！？　お姉様のような妖怪がそこまで！？　美鈴様のような従者がいるのにですか！？」

「いや、まあ、そう言われると」

「お姉様まさか人間に遠慮とかしてませんよね？　今も全身布など巻いて、妖怪らしいことしてなかったりとか」

凶星を突かれてレミリアは息を飲む。吸血鬼なのに昼に出歩き、ろくに人の血も飲んでいない。昼に出歩くのは敵の目を誤魔化すため、血が飲めないのは満月のせいだが、どちらも必要なことではある。が、苦痛であることには変わりない。旅のおかげですっかりレミ

リアの生活サイクルは人と同じだ。

反論のできないレミアアに、「それはいけません！」とウカウは両手を上げる。

「お姉様のような素晴らしい妖怪が人に遠慮など！」

「そ、そう？　だって、満月」

「俺に言うな俺に……」

妖怪らしきなど説かれても満月には言うようなことはない。突き刺さるウカウの視線から逃れるようにそっぽを向き続ける満月にウカウはギリギリと歯を軋ませ、強くレミアアの手を取った。

「お姉様！　ここらあたりで妖怪の集まりがあるのですよ！　折角の都、たまには羽目を外しませんと！」

「そうかしら？　でもあんまりそういう場に出るのは」

「美鈴様もいらつしやるのですから大丈夫ですよ！　妖怪の宴ですから人間は来られないですけど」

そう言って差し向けられるウカウの顔から今度は満月も逃げずに顔を合わせる。人に対する敵対心を隠さないウカウの視線は、別に珍しいものではない。陰と陽。本来ならば相容れない存在。満月はレミアアと美鈴に目を移して、「行ってきたら？」と紫煙と共に零す。

「いいの満月？」

「たまにはいいのではないか？　美鈴殿もいるのだし安心だろう？」

俺もたまにはひとりでぐうたらするかね」

「貴方がいいならいいけど……美鈴は？」

「私はお嬢様についていきますよ。たまには羽を伸ばすのもいいとは思いますが……」

「それならば！」と言うが早いかウカウはレミアアの手を取って、「行きましょう！」と歩き始める。満月の方へ振り返るレミアアに用心棒は軽く手を振ってさっさと身を翻す。人混みに消えてゆく満月の姿をしばらくの間眺め、すっかり満月の姿が消える頃レミアアはようやくと前を向いた。

酒池肉林とでも言うべきか、活気溢れる街の熱を一つの建物の中に集めたかのようにテーブルに並ぶ酒と食事。薄暗い屋内は蠟燭の火に照らされて輝くグラスに並々と注がれた赤い液体は葡萄酒ではなく、吸血鬼が最も好むもの。久々の人の血に喉を鳴らしてグラスを傾けるレミリアの姿は、あまり人間に見せられるものではないが、これこそ本来の吸血鬼の姿。人がいなければ遠慮もいらぬ。満足そうにグラスを口から放し唇に残った朱を舐めとるレミリアにウカウは嬉しそうに手を叩いた。

「お姉様に気に入って貰えたようで良かったです！ やはり妖怪はこうでない！」

「うー、そうかもしれないわね。久々にこんなに血を飲んだわ」
たまーにしか満月は血をくれず、くれてもほんのちよっぴり。それを思えば、喉越しを感じられるような量を口に含めるというのは単純に嬉しい。パタパタとはためく吸血鬼の羽を見つめて、美鈴も微笑を浮かべほんの少し酒を舐める。

「それにしてもこの国にはこんなに妖怪がいたのですね。表では気が付きませんでした」

「人に溢れた世ですから集まる場所が決まっているんですよ。とは言え人も多いので、こうして食材を集めようと思えば楽でもあるんですけどね」

テーブルに並ぶナニカ肉。それがいったいなんであるのか妖怪ならば聞かなくても分かる。人の肉。シチューにステーキ。色とりどりの料理を前にレミリアはフォークを持ち手を動かすが、一向に突き刺そうとはしない。「どうしました？」と首を傾げるウカウの問いを受けレミリアの頭に浮かぶのは、旅の中で会った人々。

どうしようもない人々も多いが、生きることに関心一杯なゴビ砂漠やヒマラヤ山脈の住人たちを思い返せば、どうにもレミリアの手が鈍る。中でもどうにも頭から剥がれない満月の横顔。三ヶ月近く共に

いた人間の姿がチラついて、どうにも食は進まない。そんなレミリアにウカウは強く肩を落とす。

「お姉様、人間に毒されております！ なにも遠慮する必要ないのですよ？ 人間の肉は妖怪にとって一番のぐい馳走ですのに」

陽の存在でありながら、欲を調味料に濾過され薄まった陽のエネルギー。それを最も効率よく摂取することができるのが人の肉。それを口にしない妖怪は滅多にいない。なにより強大な妖怪であればこそ。三大怪物として名を馳せる吸血鬼らしくないレミリアに、ウカウは悲しそうに肩を揺らす。

「お姉様は吸血鬼。新たな夜の主になるのでしょうか？ それなのに人に遠慮などしてなになります？ 人に遠慮する夜の帝王など聞いたこともありません」

「それは、私もないけど……」

「お姉様ならきつと新たな主人？ になれますよ！ ならば妖怪らしく！」

唸りながらレミリアはフォークをくるりと手の中で回し、意を決してフォークを肉に突き刺した。美味しそうに見えないと言えば嘘になる。唾を飲むレミリアの横でウカウは強く頷く。

「それで良いのです！ お姉様は吸血鬼なのですから！」

「そうよね」

「そうです！ あの満月とかいう人間にも遠慮する必要はないですよ！」

「そうよね……」

肉を持ち上げあーんとレミリアは口を大きく開ける。口の中に滑り込む人の肉の香りに鼻を鳴らしながらレミリアは手を止めると、力なくその手を下ろす。

「……お姉様？」

「ダメね……」

どうにも手が進まない。

別に食べようと思えばレミリアは食べれる。しかし、少なくとも進んで食べたいとは思えない。ルーマニアから離れる前なら気にせず

口へと運ぶだろうが、今は人を知り過ぎた。ただ餌として貪っていた百年と違い、三ヶ月人の世で生きて、人の悪い面も良い面も多く見過ぎた。

「本当に嫌になるわ、人間て無駄に数が多いし、欲に際限がないし、基本弱つちいし、そのくせ傲慢で意地汚いし」

「でしたら」

「でも頼りになる奴がいるのよ」

たったひとりの人間がいなければ旅は始まる前に終わっていた。海を越え、砂漠を超えて山を越えた。ひとりの人間が始まりだった。潮の香りの交じった空気を裂くようにレミリアの隣に腰を落とした男。妖ではなく無数にいる人間のひとり。

「遠慮じゃなくて……そう、敬意を払ってるのよ。きつと私は……」

「人間にですか？」

「人間に。嫌いだけど大嫌いにはなれない。嫌な時もあるけど良い時もあって……、そう、そうよ」

レミリアは人間だから側に置いているのではなく、十五夜満月だから側にいる。

「人も妖も関係なく、私は、当主になるならそういう当主でありたい。礼には礼を、誇りには誇りを。弱者をただ弱者と断じるのではなく、最低限の礼を払って……」

「お嬢様」

微笑む美鈴に微笑み返し、レミリアはフォークから手を放す。もし人を食べるのだとしても、顔も知らぬ相手ではなく、しっかりと顔を見て食うと決めて食う。最低限の礼を払って然るべし。相手を相手と認めるそんな当主に。

「変かしらウカウ？」

「……いえ、お姉様がそうと決めたのなら良いと思います。きつとお姉様は偉大な当主になられるのでしょうね」

「そうかしら？ でもそれならきつとウカウのおかげね。お礼にあげられるものなんてないけれど」

「そんなことないですよ！ お姉様がいてくれますよ！」

笑顔のウカウに微笑み返すレミリアの姿に美鈴は肩の力を抜いた。日に日に眩しくなるレミリアについて来て良かったと言うように。強く輝くレミリアの瞳から光が溢れるように美鈴の顔を光が照らし、その光に美鈴は目を細める。

「ッ!?!?」

湧き上がる白煙と揺らめく炎。美鈴の視界にちらつくそれを立ち上らせるは吸血鬼。天窓から差し込む陽の光が吸血鬼の身を焼いた。口を開いたレミリアの口から心の叫びが漏れるより早く美鈴はレミリアを引き寄せて後ろへと跳んだ。影の中に身を顰める吸血鬼と山門の妖を見つめるのは金髪の少女。変わらぬ笑顔を貼り付けて、へによりと首を擡げた。

「ウカウさんッ!?!?」

「他のものなど、お姉様がいてくだされば、そのクビを頂ければ十分です!」

「ウカウ!」

「来るのが遅いんですよ、何日も何日もこんな場所で待ちぼうけ、ドラクル様も面倒な仕事を押し付けてくれる」

「ドラク……貴女はッ!!?!?」

微笑むウカウの影が歪に伸びる。ゴキリと鳴る骨の音に合わせて膨らむ体。金色の髪は桃色に染まり、頭から山羊のような振れた角が額を突き破り天に伸びた。頭を振ったウカウの体は女性的に発達し、妖しげな空気を周囲に散らす。

「まさか小さな吸血鬼に能力を打ち破られるとはね、どういう原理か知らないけれど、あのお方が警戒するだけあるわ。私を前にすれば誰も私を警戒しないし、甘く墮としてあげるのに、人の肉すら口にしないなんて、落ちこぼれらしいわレミリア!! スカーレット」

「ッ! 美鈴ッ!!?!?」

「はいお嬢さッ!?!?」

踏み込もうとした美鈴の足は地を蹴らず、力が抜けて動けない。美鈴の足元に描かれた六芒星が力を奪う。笑う悪魔の背後から伸びるいくつもの影。会場に蠢く妖怪たちの間から出て来る人間たちの顔

と、手に持つ紫色の燭台の火を見て、レミリアは強く顔を歪ませた。一度見た人間たちの顔。顔に痣を作った男は、路地でウカウを助けた時にノシた人間たち。始まりから既に手のひらの上。

「あつはっはー。馬鹿とハサミは使いようね。人間の術とやらも役に立つ。対妖怪用だものねー！ どうしましようか？ 陽に焼き落とすのがいいかしら？ いや、その前に女として人間に嬲られてみる？ どれがいいかしらね？」

「貴様ツ!!?」

「今更そんな顔されてもねー。良い顔ではあるけれど、で？ こういう時は命乞いでもするものじゃない？ ほらほら」

醜悪な悪魔の笑みに牙を剥き、レミリアは大きく息を吸い込んだ。命乞いなどするはずなし。礼には礼を。無礼に礼を払うことなどすることなく。深く吸い込んだ息に怒気を混ぜて、レミリアは強く口から吹き出すことなく、ぽつりと言葉を転がす。

「感謝するわ悪魔」

「はあ？ なにそれ？ 貴女人間に手を出されたい願望でもあつたの？ うわあ」

「違うわ、なにせよ貴女のおかげで私は当主として、一步高みに行けた気がするから。それにこれが窮地？ 言っただでしょ！ 私には頼りになる奴がいるって！ ねえ満月！」

頼れる時は頼ればよい。そう吐いた人間の顔を思い浮かべてレミリアはその名を強く叫んだ。小さな建物の中を跳ね回るレミリアの声は薄っすらと消え、静寂が辺りを包む。返される言葉などありはせず、得意げな顔に冷や汗を浮かべてレミリアは再度男の名を呼ぶ。

「満月？ 満月！ ちよ、ちよっと……」

「あー、満足かしら吸血鬼？ 人間の男に助けを呼ぶ姿が最後なんて滑稽ね！ あつ、ちよつと笑えてきた」

「ちよ、こういう時に来るのがアイツじゃないのツ!!? 本当にごうたらしに行ったってわけツ!!? 満月ツ!!?」

ゆっくり伸びてくる男の手から逃れるように美鈴は身を振るが、体に力が入らない。舌舐めずりする男にレミリアは身を縮こませ、

ギユツと両の瞳を閉じる。頬に触れたごつい手の感触に歯を食い縛り、ただ現実から目を背ける。ここが終点だなどと、そんなこと望まない。スリスリといつまで経っても頬を摩ってくる骨ばった指。「お嬢様」という困った美鈴の声にレミリアがゆっくり瞼を開ければ、指を伸ばした用心棒の笑顔が待っていた。

「……………ん？」

「目が覚めたかお嬢様？　いつまで狸寝入りしているのかと思ったぞ？」

「ま、満月？　貴方……………？　なんでいるの？」

「お嬢様が呼んだからだろう。ふらふら散歩していたらお嬢様の声が聞こえてな。急に仕事とは困ったものだ」

抜き身の刀で肩を叩く満月の足元に散らばった人間たちの体。音もなくバラバラと散らばる死体にレミリアは口元を痙攣らせ、満月はつまらなそうに悪魔に向かって振り返る。間の抜けた表情の悪魔に変わらず笑い掛ける満月に、ウカウは大きいため息を吐いた。

「はあ？　マジで来るってなにそれ？　だいたい人間のくせに人間をそうもバラバラにするなんて、なにお前？　狂ってるの？」

「俺は用心棒だ。人なんて数えるのも億劫になるほど斬ってるし今更よな。で？　アレを斬ればいいわけだなお嬢様よ」

「アレって私？　ちよつと、この部屋が見えないの？　この妖怪の群れを人間一人でもうにかできると思ってるの？」

「んー？　さて、俺は太陽も雪崩も斬れないが、生きてる奴は別さ」

「どうやっ……………ッは!?？」

呼吸を止めて悪魔は自分の首に手を添えた。そして強く目を擦る。周りを見れば同じように首や頭を抑えている妖怪たち。レミリアと美鈴は目の前の光景に何度目も目を瞬いた。

幾数本の刃が舞った。

部屋に居座る妖怪たちを貫いた無数の刃の姿は幻のように消え去って、血も舞わなければ、肉も地に落ちない。ただひとり変わらぬ刀で肩を叩きながら、満月は一歩足を出す。

『抜ケン術』、始まりがなければ終わりもない御技。

描かれる軌跡はどこまでも伸び、終わりが無い故に幻となつて終わりを描く。どこが始まりでどこが終わりか。本物と偽物の違いは目で見ていては分からない。飛び交う刃の銀閃を、避けようと思えば偽物で、偽物だと信じれば本物である。ずるりと崩れる肉体さえも真実かどうか分からず、まるで時が跳んだかのように訪れる結果に大きく悪魔は飛び退いた。

「な、なんだお前ツ!?? なんでもそんな呼吸するようにツ!?? 殺すことに躊躇ないのかツ!?? お前本当に人間かツ!??」

「極東の侍の仕事は殺すことだぞ? そんなこと言われてもな」

「待て待った! 私が悪かつたつて! 欲に目が眩んだんだ! ルーマニアまでの道なら本当に案内するから!」

「悪いが信じられんな、……いや、そもそも俺は誰も信じない」

命乞いも頼みも必要ないと喚く悪魔に無数の刃が突き立てられる。本物と偽物の区別などつけられず、差し出された両手を縫って悪魔の体に蜂の巣のような穴が空いた。刀を振るつたようにも見えず急に穴が空き崩れる悪魔にレミリアと美鈴は声にならない大きな吐息を吐き出した。

「霊廟だらけのこの国なら念仏を唱える必要もないな。お嬢様、美鈴殿、無事のようにでなによりだ」

「あの、満月? 私……」

「そうだお嬢様、これ拾っておいたぞ? それとるーまにあまでの道も聞いた。なかなかいい散歩になったよの」

呆けた顔のレミリアに革袋を放る満月にレミリアは目を丸くして、奪われたはずの革袋を握り締めた。そんなレミリアから目を外し、煙管を咥えて死体漁りを始めている満月に美鈴は眉を寄せた。

「満月さん、本当に散歩してたんですか? 言つてはアレですけど、わざわざこんなところ通ります?」

「……だいたい無償で手を貸すなんて言う者を信用できるか? 敵は強大、こつちは三人。ムシのいい話は疑つてかかるべきぞ。日ノ本にいた時もくノ一が色仕掛けで似たような手を使つてきたしの。経験の差というやつだな」

「はあ、満月さんの今までが気になりますけど、今はよしとします」

「そうしてくれ、それでは行くかお嬢様」

「ええ……行きましよう満月」

なにがあっても変わらぬ満月にレミリアは小さく笑い声を返した。人だろうと妖だろうと関係なく、レミリアはレミリアで満月は満月、美鈴は美鈴だ。それさえ分かっていたらいい。王たちの眠る青い都で、少なからず当主としての道が見えたレミリアは強く銀貨の入った革袋を強く握り締める。

そんなレミリアを尻目に満月と美鈴は目配せし、静かに頷き合った。心の内は分からずとも、進むべき道は同じである。今はそれだけ分かれば十分だと言うように。道標は小さな吸血鬼。失くしたものを埋めるため、満月と美鈴の歩く先は決まっている。

「満月、美鈴、きつと私、貴方たちに見合う私になるから。私なりの夜の王に」

レミリアちゃんと魔法使い

「困ったな」

満月の短い一言がレミリアの心を削る。「うわあ」と呻き頭を抱えるレミリアから少し離れたところにある石造りの壁。人相の悪い人相書きに混ざって貼られたレミリアの人相書き。旅の中、久しく見なかつた手配書のことを忘れてしまおうと目の前に置いた葡萄酒を瓶ごとレミリアは口へと傾けた。

レミリア一行はルーマニアまで既に手の掛かるところまで足を進めている。にも関わらず、ゴビ砂漠やヒマラヤ山脈を通る時以上に歩みが遅い。気力を振り絞り踏み踏破しなければならぬ自然より、欲に目が眩んだ人の目を掻い潜る方がなにかと厳しい。なによりレミリアの紅い瞳と青い髪は、一度見られれば忘れる事は難しい目立つ容姿。ウズベキスタンからひと月もあればルーマニアまで辿り着けると見積もっていたレミリアたちの予想は見事に空振り、既に二ヶ月が経とうとしていた。

「ルーマニアまであとちよつとなのに……ッ！ 進んでは戻って、進んでは戻って！ 歯痒いったらないわッ！」

「そうは言ってもなんだかんだおすまん帝国だ。もうるーまにあまであとちよつとではないか」

「だから余計によ！ 余計に歯痒いのー！」

オスマン帝国。

今で言うトルコに、十三世紀、オスマン一世により起こされた帝国である。イスラム王朝であったオスマン帝国は、恐るべき勢いで地中海全域を手中に収め、二十世紀の初め頃まで存続する。

レミリアたちが旅をしている十七世紀には、オスマン帝国はジャーン王朝の手前まで勢力を拡大している西洋圏最大の国家でもあり、レミアアの生まれたルーマニアも、この時代オスマン帝国の支配下であった。ので、正確に言えば既にルーマニアの地を踏んでいると言えなくもないのだが、それは人の世界の話。

人の勢力圏と妖怪の勢力圏は当然異なる。旧ワラキア公国の領土

全域。それがスカーレット家の領土であった。

レミアアの父親、ドラクルⅡスカーレットがいかにしてそれほど広大な領土を獲得するに至ったのか、答えは簡単、人と手を組んだ。いや、利用したと言った方がいいかもしれない。

十七世紀より数百年前、ワラキア公国にはある有名なひとりの王がいた。かの有名なヴラド三世、通称『串刺し公』。ブラム・ストーカーの小説『ドラキュラ』に登場する吸血鬼のモデルになったと言われるブラドⅡツェペシュであるが、実際にモデルとなったイメージはレミアアの父親、吸血鬼ドラクルⅡスカーレット。

小国家であったワラキア公国は、勢力を拡大し続けるオスマン帝国と対立し、大きな戦力差をもつともせず、幾度となく撃退した。積極的な焦土作戦、人を百舌の速贄の如く野に晒す。このおよそ人間的でない非情な手法が吸血鬼の知恵からやって来たと思えば納得できる。強大な国に対抗するため、吸血鬼と手を組んだヴラド三世の心情を推し量る事は出来ないが、穏やかであったはずもない。

ブラド三世が亡くなってより数百年、変わらずドラクルⅡスカーレットによって支配されているワラキア公国は、現ルーマニアの下部に座し、旧モルダヴィア公国、トランシルヴァニア公国に拠点を持つ吸血鬼の一族と日夜牽制しあっていた。

そんな三竦みを崩そうとドラクルⅡスカーレットが目をつけた者こそ、実の娘にしてレミアⅡスカーレットの実妹、フランドールⅡスカーレットである。

吸血鬼たちの闘争にいつ妹が駆り出される羽目になるか、目と鼻の先で勃発一步手前であるルーマニアの吸血鬼大戦を想像ばこそ、レミアアの不安と焦りは相当なものであり、なにより早く妹を救い出したのだ。少なくとも約半年の間、極東からゴビ砂漠、ヒマラヤ山脈を横断し渡って来た。今ルーマニアがどうなっているかレミアアにはまるで分からない。

国と妹のことを考えれば考えるほど嫌な空気に身を包まれ、乾いた喉を潤すためにレミアアはまた葡萄酒を煽る。小さな布塗れの人と思われる者が昼間から自棄酒している姿はおかしいもので、突き刺さ

る視線に満月と美鈴は愛想笑いで受け流すが、満月と美鈴もまた異国の者であるが故に目立つ。

振り払えない視線に辟易しつつ、満月と美鈴も酒を舐めた。十七世紀、多くの王国が乱立していた世のワインは、コルクに詰められたもので現代とそこまで遜色なかったとされる。そんな西洋の酒に舌鼓を打ちつつ、茹だつたように煮詰まっている雇い主へと満月は再び顔を向けた。

「焦っても仕方ないものはどうしようもないぞお嬢様。だいたい困り事はもう一つあるのだからな」

そう零す満月にまたレミリアは大きく頭を抱える。ルーマニアまでの旅路で転がっている困り事は大きく二つ。ルーマニアに着くまでに賞金稼ぎや刺客に所在がバレて殺されないかというのが一つ。もう一つは単純に戦力の問題だ。

レミリアが旅の中で信頼できると助力を頼んだ満月と美鈴が弱くないことはレミリアが誰より知っている。だが、ドラクルⅡスカーレットの戦力が低くはないことを誰より知っているのもレミリアだ。一国家の君主であるドラクルとどうやって戦うか。戦う事は既に決定事項とは言え、三人で堂々と真正面から突っ込んだとして、訪れる結果は死体が三つ転がるだけだ。

いかにして大きな戦力差を覆すか。これが二つ目の問題である。

「ここに来て城攻めを考えねばならないとはの」

「私も何度か戦には参加しましたが城を落とすのは初めてですね」

「ほいほいそういうこと言ってくれるのは頼もしいけど、何か案はあるわけ？」

「あるにはある。俺の経験から言わせれば、敵の敵は味方と言ったところだな」

酒を口に含んで舌で転がしながら、見つめてくるレミリアの前に満月は二本の指を立てた。旧モルダヴィア公国、トランシルヴァニア公国、二つの国の夜の王。それを焚き付け力を借りる。そう言い笑みを浮かべる満月に、レミリアは強く首を横に振るつた。

「いや、ダメでしょ。アイツらはないって」

「二つの国の吸血鬼のことを知っているのですか？」

「まあ、一応社交界でね」

敵対していても穴熊のように領地に引き込もっているわけではない。王であり貴族。権力をひけらかすように夜に絢爛なる宴を開き客を呼ぶ。まるで気に留めないと言うように、スカーレット家も招かれたことは数知れず、他の強大な吸血鬼のこともレミリアだって少しは知っていた。

「トランシルヴァニアにいる吸血鬼は表でハプスブルク家に名を連ねてる貴族趣味の嫌な奴らよ、旧モルダヴィア公国にいる奴らは古くからの吸血鬼、頭が固くてどうしようもない。なによりスカーレット家の私が力を貸してなんて言っただけで出向いたら笑いながら殺されるわよ。うちの父親と同じで野心にしか興味ないんだから」

人の生き血を啜るが故、人を人と思わず家畜のようにしか扱わない。力で夜を支配する人を超えた貴族たち。優しさや愛情など抱くことなく、ただ力を誇示し、力を求め、同族、親子供であろうと貪る夜の主。

それをつまらないと、悲しいとレミリアは思うが、だからこそ落ちこぼれだなどと言われるということも分かっている。同じ吸血鬼でありながら、どうにも噛み合わない吸血鬼たちが、レミリアの求める願いを聞き入れないと試さずとも分かる。

グラスの縁をなぞりながら、どうにも変わらないだろう吸血鬼の性質にレミリアはため息を転がした。

「はあ、自分で言っただけでアレだけど、私って本当に吸血鬼らしくないわ……。なぜなのかしら」

「俺や美鈴殿に言われてもな、だいたい吸血鬼がどんな妖怪なのかも分からぬ。日光に弱く、生き血を啜り、速く力が強い。要素は多いが、どうにも本質が掴めぬな」

「どんな妖怪ってそれは……」

言いながらレミリアも首を傾げた。吸血鬼がどんな妖怪などと真面目に考えたことなどない。生まれた時から吸血鬼なのだ。冷徹で非情で野心家で、夜の世界の頂点に座す。それは知っているが妖怪と

しての本質とは違う。

鬼ならば力の妖怪、天狗ならば風の妖、河童ならば水流の妖怪と形容する事ができるが、吸血鬼を敢えて形容するならなにがあるか。夜の妖怪と言っても、妖怪は基本闇の、夜の住人だ。月の妖怪と言っても人狼というもつと月に関わっている妖怪がいる。ぐるぐる頭の中を流れるイメージが言葉にならずレミリアは眉を潜めて、ふと美鈴の方へ目を向けた。

「そう言えば美鈴ってなんの妖怪なの？ 気っていうのを使えるっていうのは知ってるけれど」

一見見目麗しい美女にしか見えない美鈴がなんの妖怪であるのか今ひとつ分からない。レミリアに向かい美鈴は困ったように笑いながら九つ指を折った。

「ええと、なんとはいましようか、竜生九子中国の伝説上の生物、竜が生んだ九匹の子。各々の性格に合わせた場所で各々の活躍を見せるが、親である竜になることはできなかつたとされると最近では呼ばれてるそうなんです」

「りゅ？ なんかよく分からないわね」

「私もそれを知ろうとしている最中ですので」

「なんだ。それでは俺はなにかよく分からない妖怪二人とずっと旅をしていたのか？」

レミリアと美鈴は揃ってそっぽを向き、満月は人間でよかったと頭の後ろで手を組み椅子に深く寄り掛かる。考えたところで分からないものは分からない。「そんなことはどうだっていいの！」とレミリアは強引に話を打ち切つて、机を一度強く叩いた。

「私や美鈴がどんな妖怪より、どうやってあのくそつたれの下まで行ってぶっ倒すのかよ！ 言った通り吸血鬼から助力を得るのは無理だと思つて、スカーレット家の領地の妖怪たちも力を貸してくれるとは思えないし……」

一度レミリアを裏切った相手。信用できなければ、レミリアもあまり信じたくない。肩を落とすレミリアに、「私がついております」と美鈴が微笑み、少しレミリアの肩の位置が持ち直す。

「ならるーまにあにおらず、吸血鬼でもなく力を貸してくれる者はないのか？ 一人や二人思い付く人物がいるだろう？」

「そんなのがいたら最初に会いに行つてゐるわよ……………あつ」

「お嬢様？」

机に項垂れたと思えば、急に顔を上げたレミリアに美鈴は呼び掛けるが全く届いていないのか、ぐにやりと表情を歪めて再び机の上に頭を落とす。と、思いきやまた顔を上げ、再び表情を歪ませては机の上に崩れ落ちる。

「お嬢様、どうかなさいましたか？ アテでも？」

「顔を見る限りなにか思い付いているようには見えないが」

「ええそうね……………でも、いや……………どうなのかしら」

向けられる用心棒と従者の顔に、なんと言おうかレミリアは考えるも、どうにもいい言葉が見当たらない。長らく言い淀みながら、結局思いついたままの言葉をレミリアは並べる。

「一人……………、うちに何度か顔を出して、他の吸血鬼のところにも顔を出してた誰の味方でもないような奴がいるの。力は確かよ、丁度この近くに……………ただ、私苦手なのよね、アレ」

アレと言われてもどれか満月と美鈴には全く分からない。だからこそ口から飛び出すのは「誰？」という問い。その問いへの答えを随分長いことレミリアは引つ張つたが、それしか手が無いであろうことに白旗を振り、あまり言いたくないその名を告げる。

「変わり者の魔法使いよ」

オスマン帝国、イスタンブール。

十九世紀半ばまで王宮として帝国政治の中心となっていた、今尚トルコ最大の都である。これまで西洋を支配していた帝国とオスマン帝国の一番の違いは、なにを隠そう宗教であった。キリスト教が主体

の西洋国家と違い、オスマン帝国はイスラム教。オスマン帝国の侵攻は、異教徒の侵略でもあった。

だからこそ尽力するのは、支配した国の意識改革。モスクの建造。学校や病院の普及。敵を知り己を知れば百戦危うからずというように、勢力を拡大してゆく中、あらゆる技術や情報をオスマン帝国は掻き集め、新たな世界を押し広げた。

それを表すかのように、トルコ料理は世界三大料理に名を連ね、王の住まうトプカプ宮殿は、『味の研究所』とまで呼ばれている。

集められたのは王に献上する料理だけにあらず、武器、書物、魔術に至るまで。技術と情報の圧縮炉のようなオスマン帝国には、勿論それを追い求める者も集中する。

故にトプカプ宮殿には多種多様な民族が入りし、レミアアたちもそんな中に紛れていた。

「魔法使いとやらの名前を出すだけで入れるとは恐れ入ったな。お嬢様、魔法使いなどと言っていたがどんな御仁なのだ？」

「とにかくなんて言うか、変人？ 私もよく分からないわ。つて言うかここどんだけ広いのよ」

周りを取り囲む石造りの建物たち。紫禁城のように巨大でもなく、ウズベキスタンのモスクのように映える青に包まれているわけでもない。だが、小ぶりながら刻み込まれた装飾と技術の結晶は見れば見る程目が惹かれる。

トプカプ宮殿は宮殿と言いながら、大きな城が一つあるわけではない。比較的小さな建物と部屋が連なり、また数多くの庭園と離れを持つ建造物群。故に敷地は広大で、皇室専用の調理場、更に学校、図書館までも敷地に有している。

幸福の門と呼ばれる図書館へ通づる門を超え、第三の庭園の中に足を進ませる中で、周りに視線を散らしていた美鈴はこれまでの国とは違う行き交う人々の様相に目を瞬いた。

「なんと言いますか、ここは女性が多いのですね。それも豪華と言いますか」

「女性が元気な国は良い国だと言うぞ？」

「そんな健全な感じには見えませんが」

勿論そんな健全なものではない。

十七世紀のオスマン帝国は、君主の母后が政治を自由に動かす『女人の天下』と呼ばれる時代であった。それもこれも『ハレム』と呼ばれる女性の居室のせいだ。言わずと知れたハーレムの語源とも言える一夫多妻の形。日本人に分かりやすく言えば大奥。一度生んだ息子が王になれば、その母は最盛期千人もの女性が居たと言うハーレムの頂点に立てる。陰謀と策略、激しい権力争いは多くの君主を亡き者にし、王座に座る者は幼子となり、上皇が名だけの天皇を傀儡にしていたのと同じく、ハーレムの女主人がオスマン帝国を動かしていた。

そんな事とは露知らず、満月は差し迫った江戸時代の未来を一足先に見送りながら小姓に連れられ図書館の一室の前で足を止めた。閉じた木製扉の重厚さは世界を隔てているようであり、中の様子を伺えない。緊張をほぐすように大きく深呼吸をするレミリアの肩に美鈴は優しく手を置いて、その熱に押されるようにレミリアは取手に手を掛け引いた。

建て付けのいい扉は音もなく開き、部屋の中の温い空気がレミリアたちの肌を撫ぜる。揺らめく燭台に刺さった蠟燭の火が照らすのは積み上がった本の山。紙とインクの匂いに支配された部屋の中にレミリアが一步を踏み出した途端、世界が崩れたように本の塔たちは崩れ去り、その奥に隠されていた人物の姿を世界に落とす。

「よく来たじゃないかい小さな吸血鬼。随分とみすぼらしくなって会いに来たねえ」

「……お元気そうねノーレッツ卿、お変わりないようで」

長い紫色の髪を揺らした眼鏡を掛けた老婆が柔らかな微笑を浮かべてレミリアの引き攣った笑顔を見下ろす。吸血鬼の少女から目を離した魔法使いは、床に散らばった本を見回しながら長いパイプを啜えて口から煙を溢れさせながら軽く手を振れば、独りでに無数の本が浮き上がり勝手に本棚に収まってゆく。「陰陽師みたいだ」という満月の呟きに魔法使いは小さく笑う。

「いつの時代も権力者というのは知識を欲するものさ。権力を追い求

める人間たちがこの古いぼれに縋る姿はなかなか見えて面白くてね。そういうお嬢ちゃんもだろう？ 権力を追い求めているわけではなさそうだけどね」

「そうですね、いつも通りお見通しのようで」

「伊達に千年も生きていないさ。部屋に籠っついても知るべき事は知っている」

紫煙を零す老婆の言葉に、満月も美鈴も間の抜けた吐息を吐いて口を開けた。千年。老婆の肌に刻まれたシワは伊達ではなく、脳のシワと同じく、遥かな叡智が刻まれている。なんと言おうかと言葉を選び目を泳がせるレミリアをしばらく見つめ、レミリアが鋭い犬歯を口から覗かせるのに合わせ魔法使いは「帰るなら扉は閉めてきな」と言っ

て緩く手を振った。

「ちよつと!?? 私まだなんにも言っつてないんですけど!??」

「妹を救うために力を貸せと言ったところだろう？ お嬢ちゃんが妹のためにあの野心家に反乱したのも半年前かい。私のところにもこんなのが来たよ」

手を振る魔法使いの動きに合わせて、レミリアの手配書が宙を泳ぐ。レミリアの目の前まで泳いで来た手配書にレミリアは爪を伸ばすが、裂かれる前にひらりと手配書は宙を舞い老婆の手に収まった。「父を倒して当主になるかい？ 当主になつてどうする？ 当主になつても吸血鬼たちの権力争いに巻き込まれるだけさ。だいたいお嬢ちゃん勝てるのかい？ あの未来を覗く覗き魔に、私には勝てると思えないし、敗者に力は貸したくないね」

「だからお帰り」とそっぽを向いて、魔法使いは新たな本を手に取り開きもう目を向けてはくれない。

殺されないだけマシと言うべきか。興味なさげな魔法使いの姿に寧ろ少し安心さえする。元々望みは薄かったこともあり、レミリアは弱々しく足を下げるが、不意に背になにかが当たった。小さく振り返ったレミリアの背後に不動で立つ用心棒と従者の二人。帰る気はないと言うような二人の姿に口を引き結び、レミリアは二人の顔を見上げる。

なにも言わず見下ろしてくる二色の青い瞳。旅の道中幾度となくあつた無言の眼差し。なにかを期待しているような、やるべき事は分かっているだろうと言うような静かな視線。なにも言わずに満月も美鈴もなにかをレミリアに期待している。それはレミリアにも分かっている。だが、なにかを期待しているのかが分からない。

質問したところで、望む答えを満月も美鈴も言っただけはくれないだろう事はレミリアにだって分かる。必要な事は言うが、決して己の全てを二人は口にしない。故に静かに口を閉ざし、子供のように澄んだ青い瞳をただ向けてくる。

レミリアは口を一度開き、なにも言わず静かに閉じた。

頼りにはなる二人。だが、全ては知らない。

二人がなにかを望んでいるのかも。

唯一手に持っている二人のことも知らないのに、新たな助力を得られるはずもないかとレミリアは弱々しく手を握った。

それどころかレミリアは自分のことだつてよく分からない。

吸血鬼はどんな妖怪か？

自分の力はなんなのか？

レミリア一人ではゴビ砂漠など横断できず、

ヒマラヤ山脈でもウズベキスタンでも死んでいただろう。

妹を救うと息巻いていても、

(私にはなにもないじゃない……)

ここまで来れたのは一重に幸運。結局ルーマニアから追い出されてから変わったことなど一つもない。

半年、旅でなにかが変わったと信じたくても、用心棒を雇い従者がひとりできた以外、目に見えるものなどなにもない。魔法使いひとり仲間にできない自分にできることなどなにもないと、恥ずかしく、惨めで、悲しくて、逃げるように部屋を去ろうとレミリアが更に足を一歩踏み出しても、満月と美鈴はまたも動かずレミリアを静かに見つめるのみだ。

「満月、美鈴……」

「なんだお嬢様」「なんでしようお嬢様」

重なる紅い瞳と青い瞳。

動かず、

静かに、

変わらず、

期待している瞳。

—— パァンツ!!!!

「痛ったあ……」

小さく見開かれた青い瞳にレミリアは小さく笑みを向けた。自分で叩き赤くなつた頬を擦り、レミリアは魔法使いへ振り返る。

レミリアだつて分かっている。こここそが分水嶺。ルーマニアに踏み入れれば味方はいない。力があつても相手はレミリア以上の力も財力もある相手。レミリアが思い付く唯一の手は偉大な魔法使いの力を借りるただ一つ。それも掴めず、なにも掴めなければ、本当になにも失くなつてしまう。

(馬鹿か私はッ！)

なにもないなどそんなことは初めから分かっていたこと。

ルーマニアから追い出され嫌という程身に染みて分かっている。

そんな身の程を知つてしまった矢先に、ようやく掴めた用心棒と従者の二人。二人のことをよく知らなくても、ついて来てくれるということを知っている。頼つていいことをレミリアは知っている。

(二人に見合う私になるって決めたでしょ！)

少なくとも、満月と美鈴を率いられるだけの当主になる。誰でもなくこの二人の前でだけは格好をつけたい。三人の時は馬鹿みたいに騒いでいても、二人が後ろにいてくれる時は、二人の先に足を出したい。そのためなら力が足りずとも力を振るおう。威厳がなくても覇を吐こう。そうでなければならぬ。レミリアが望む自分であるために、今からでも掴めるものを掴むために。踏むべき地は目と鼻の先。ここから先はなにも取りこぼしてしまわぬように。

急に部屋に木霊した大きな音にレミリアに向かって魔法使いの瞳が再び向いた。それにレミリアは睨むのではなく、被っていた黒布を脱ぎ柔らかな笑顔を差し出した。そんな吸血鬼に魔法使いのパイプが下へと落ちるのを可笑しそうにレミリアは見つめる。

「見過ごすのですか？　大きな見返りを」

「……なに？」

「私は勝つたために戻つた。敗者に力を貸したくない。それはそうでしょう。ですが勝者にも力は貸さないのでねと、言っているのですよ」

柔らかく、淡々と、静かに言葉を並べるレミリアに、魔法使いも薄っすら笑う。「だって勝てないだろう?」と投げ掛けられる魔法使いの言葉を、レミリアは鼻で笑い飛ばす。

「私を恐れる吸血鬼ひとり、勝てないわけがないでしょう? 負ける方が難しい」

「ほう、未来を覗くアレに勝つと? 未来を知るアレにどうやって勝つ? 少なくとも真正面からやり合えば私でも勝てない。それにお嬢ちゃんはどうやって勝つんだい?」

「私にはアイツに勝てるだけの力がある」
「それは?」

笑みを深める魔法使いに向けてレミリアも笑みを深めた。ただ背後で強く手を握り締め、手のひらを濡らす汗を握り潰すように。気を抜いてしまえば笑う膝が折れそうになるのを堪えて、笑みのまま頭をなんとか回す。

自分の中にあるかもしれない特別なもの。それがなにか分からないが、満月と美鈴、三人で進むと決めている。だからその旅路の終着が望むものであるように。そんなものであることを願って。レミリアは喉にせり上がってくる熱いものを飲み込んでゆっくり、言い間違えぬように、誓いを立てるように心を言葉に変換する。

「私の力は未来を捻じ曲げる。私の欲しい未来を私は掴む」

「そりゃあ凄い、本当ならね。運命を変えらなくても言うのかい?」

「敗北が運命だというなら私はそれを否定する。悲劇なんて蹴っ飛ばし、望む幸せを私は掴む。私は人さえ率いる夜の主。奴隷でも家畜でもなく友として。私に掴めぬものはない! だから魔法使い! 私がお前も率いてやるぞ! 権力? 力? 知識? そんなものより大事なものがあることを私は知っている! 私が当主になった時、それをお前にも与えよう!」

爛々と輝く紅い瞳は血より濃く、太陽よりも輝いている。目に浮かぶ二つの宝石に魔法使いは大声を上げて笑い、お腹を抑えて本を背後にほっぽった。

「あっはっは! みすばらしくはなったが、強くはなったねお嬢ちゃ

ん。あの城の滲みのように佇んでたお嬢ちゃんが。吸血鬼らしくないお嬢ちゃんが吸血鬼の当主にか。見たくはあるね、魔法使いは好奇心に弱くてねえ。確かに私ならあの野心家のいるポエナリ城までお嬢ちゃんたちを送ってやれるよ。ただそこはあの野心家の本拠地だ。傍らには最強の人狼二体を連れている。ルーマニアで、力だけならスカーレット家が一番だ。吸血鬼一匹と人間一人と妖一匹で勝つ気かい?」

レミアアは不敵に笑うと背後にいる満月と美鈴の顔を一度見上げた。笑う二人に笑い返し、レミアアは強く胸を張る。

「最強の人狼二体? ならこっちは最高の用心棒と最高の門番。負けの方が難しいわね。私の持つ宝物は、決してなにも劣らない。貴女もそれに加わりたいでしょノーレッツジ卿?」

「いやあ私は歳だからね、好奇心を満たすだけで、それは孫でもできたらそれに任せようかね。それを見返りに貰おうか」

「構わないわよ、未来に未来を賭けるわけね」

「そういうことさ、面白いから引き受けはしよう。術式は組んどいてやるからまた明日来な。その時にはお嬢ちゃんたちが少なくとも真正面から勝負できるようにしてやるさ」

「だからお帰り」と手を振る魔法使いに、今度はレミアアは可愛らしくお辞儀をし、身を翻して部屋を後にする。重々しい扉が閉まり世界が隔てられるのを背に感じて、レミアアは崩れ落ちるように満月と美鈴に寄りかかった。

「お見事お嬢様、未来を捻じ曲げる力とはよく言ったの」

「ええお嬢様、正しく当主のようでした。素敵でしたよ」

「あ、当たり前でしょ、私は貴方たちの主なんだから」

背に感じる二人の熱が暖かい。どんな場所でも二人が居ればレミアアは望む自分に背伸びできる。実際にできた。それがどうにも嬉しくて、振り返るのは少々恥ずかしくレミアアはそっと前へと振り返らずに足を出す。

夜のオスマン帝国ほど煌びやかな国も少ないだろう。松明に照らされた石造りの街は、静かに堂々と光を照り返し、月のように美しい。その中を歩くレミリアの足も軽く、重力を感じさせず軽やかに石の道へと足を落とす。鼻歌交じりに踊るように街を歩くレミリアに満月も美鈴も苦笑するばかり。

「おいお嬢様、そんなにはしやぎ動くど転ぶぞ」

「いいじゃない満月、明日にはルーマニア、遂に、遂に妹の元に辿り着くのよ！ はあ、長かった……」

明日には鬨いが待っているんだが、と満月は思いはするも、レミリアを見ていると下手な心配はいらないように思えてくる。手を振るレミリアに手を振り返す美鈴を尻目に満月は煙管を啜えようと懐へと手を伸ばし、その動きがふと止まる。

——カツンツ。

と、道端に小石が跳ねたような軽い音。そんな小さな音にレミリアと美鈴の動きも止まる。夜に虹が架かったように、七つの光が暗闇の中線を引く。金色の髪を夜風に揺らし、二つの紅い瞳が紅い瞳を静かに見つめる。誰か？ などという無粋な問いなど必要のないその姿。浅い呼吸を繰り返すレミリアの喉に言葉がつかえ声が出ない。見間違えるはずなどなく、そして忘れることもない。

「……お姉様？」

「フ、ラン……？」

「お姉様だ……レミリアお姉様！ お姉様がいる!!？」

「フラン……、貴女なの？ 本当に……貴女なの？」

目の端から雫を零して破顔する吸血鬼の妹に迷いはなく強く何度も頷いた。そんな姿にレミリアの視界も潤んでゆき、カツンツ、と差し出される足が合図となって、フランがレミリアの胸へと飛び付い

た。

「お姉様！ 会いたかったお姉様！ 私ずっと！ ずっとずっと！」

「フラン！ フランフランツ!!? ごめんなさい私ッ！ 私もッ！」

私ッ!!? 遅くなつてッ!!?」

「いいの、私本当に嬉しいの！ お姉様に会えて嬉しくて！ 私！」

「れみいッ!!?」

フランの金色の髪に指を這わせる。その顔を覗こうと涙を隠そうともせずに顔を寄せようとしたレミリアの体が強く後ろに引っ張られた。力任せに引っ張られ、掻き混ざる視界に地を転がっているのだと気付くの一瞬の時を要した。

最後の一瞬にレミリアの身を叩いた満月の声の残響を振り払うようにレミリアは顔を上げ、カランツ、と転がり石道を小突く煙管の音にレミリアの表情が滑り落ちる。

ぽたぽたと。

ただ、ぽたぽたと滴る赤い雫。

満月の胸を貫いて伸びる鋭く綺麗な白い爪。

それがフランの手から伸びている姿が夢のようで、

フランの笑顔が変わらないのが幻のようで、

「お姉様、会えてとっても嬉しいわ！」

笑顔で無邪気に再会を喜ぶフランの表情に嘘はなく、

だからこそ何か壊れた気がした。

レミリアちゃんと吸血鬼

夜のイスタンブールに少女の笑い声が響く。

楽しそうに、嬉しそうに、金色の髪を振り撒いて浮かべる天使のような笑顔。差し出された白い手から伸びる白爪に人間をぶら下げて、爪を伝い落ちる朱雫に唇をつける。口紅を引いたように朱に染まった唇をフランは舐め、レミリアが待ち焦がれて止まなかった弾けるような笑顔を贈ってくれた。

「ああお姉様、また会えて私本当に嬉しいの！ これをどう表現すればいいかしら？ どう形にすればいいかしら？」

真剣に考え込んでいるように見えるフランに、レミリアはなんにも言ってやれない。起きた出来事を飲み込め切れない。愛する妹がここまで共に居てくれた男の胸を貫いている。それもただ楽しそうに、自分がなにをしているのか気にしたそぶりすらなく。

呼吸をすることも忘れて呆然と地に座るレミリアの意識を、空気の潰れたような音が叩き起こす。喉に溜まった血を吐き捨てる用心棒にレミリアは我を取り戻し、濁った意識を振り払うようにその名を叫んだ。

「満月ツ!!!」

「うかはッ……ッ！ このやろっ……!」

笑うフランには守るといふことなど頭にはないようで、無防備に振るわれた人間の拳を顔で受けた。悲鳴も上げず、驚きもせず、後ろに転がり「どうしよう?」と呟き続け首を傾げるフランにレミリアは再び口を引き結んだ。己に埋没し続けるフランの姿は、人間とも、悪魔とも、吸血鬼とも違うなにかがズレたそんな姿。

置物のようにただ呼吸を繰り返し、現実を受け入れられないレミリアの前で満月が膝を折って崩れ落ちる。「なにをしているのだ?」といつもなら呆れたように零す呟きもなく、ただ口から血を吐き出して胸を押さえる。引き抜かれた爪が開けた穴から血を滴らせ続ける満月の姿に、レミリアの呼吸は荒くなり、妹より尚、今にも消えてしまいうようなほどに力ない満月の名をレミリアは叫ぶ。

「満月……満月ッ!?」

「満月さんッ!!?」

美鈴と共に駆け寄り用心棒の顔をレミリアが覗き込めば、満月が浮かべるのは苦しげな顔でもなく弱った笑顔。なぜそんな顔をする？

そんな疑問に満月は答えてくれない。

「まず……った。俺としたことが……、れみい、美鈴殿を、責めるなよ……殺気も敵意も感じなかつ……たから、つい……出遅れた」

「満月さん……」

「なに言ってるの！ 誰も責めなんて！ なんで！」

こうなった？

ようやく会えた妹が、ここまで一緒に来てくれた用心棒が、

なぜ？

なぜ？

湧き上がり続ける疑問に終わりはなく、ただその疑問にレミリアの思考が塗り潰される。満月の傷を確認しようと血の滲む満月の胸に険しい顔で手を置いている美鈴の姿をただ呆然と見つめているだけ。そんな混濁したレミリアの意識の狭間に滑り込むように、パチパチと濁いた拍手の音がうち鳴って、レミリアは眉を強く吊り上げた。

なにもめでたいことなどなく、一度二度と手を叩く音を聞くごとに分からぬ疑問は怒りに変わり心の領域を侵食してゆく。誰が？ 美鈴でなければ満月でも勿論ない。この場に唯一残る妹へと、これだけは許せないレミリアは顔を向けるが、フランは変わらず首を傾げ虚空を見つめているだけ。手を打ち合う音を辿って、フランから上へと目を動かした先にそれはいた。

「おッ、まえはッ!!!」

「久し振りに見る姿が人に縋る姿とは、やはり失敗作だな哀れな娘よ」

レミリアの射殺するような視線を物ともせず、滑稽な見世物を見たと言うように手を打ち続ける瘦身の男。闇を纏ったような黒いスーツを夜風に靡かせ、アッシュブロンドの髪を気怠げに振るその男こそレミリアの父、吸血鬼ドラクルⅡスカーレット。久し振りの父子の対面に感動の二文字はなく、血の繋がりを示すようなドラクルの紅い瞳に

レミリアは強く目を引き絞る。

なぜいる？

そんな疑問を吐く余裕などないほどにレミリアの中で渦巻いた激情に流されるまま、レミリアは無言で手に浮かべた魔力の刃をドラクルに向かい投げ付けるが、蠅を払うように拍手を止めたドラクルに手に弾かれた。

「一度敗北しみつともなく逃げたというのにまた戻ってくるとはな。敗者がなにをしに帰って来た？ 謝りにでも来たのかレミリア？」

「誰がッ！ 私は今度こそお前を倒し妹を取り戻すために来た！ お前こそなんでここにいる！」

牙を剥いたレミリアに、ドラクルはとてつまらなそうなものを見るように眉を落とす。そんなことも想像できないのか？ と口にせずとも、尊大な態度がそう示している。

「お前が今日ここにいるというのを『見た』からだ。折角だから会いに来てやったのではないか。身の程を知らぬ小娘に再び身の程を教えてやるために」

「よく言う！ そんな小娘ひとりを恐れ賞金まで首にかけ、刺客まで送ってきた奴がぬけぬけとッ！」

「私がお前を恐れる？ アレは保険だ。どんな小さな小石だろうと邪魔をされると困るからな。その甲斐あってしつかり完成したぞ？」

今宵は姉のお前にお披露目してやろうという私の優しさが分からないとは」

ドラクルの言葉にレミリアの言葉はぴたりと止んだ。文句なら際限なく思い浮かぶ、それを吐き出し続けることも容易い。だが、どうしてもドラクルの言葉がレミリアの意識を引き止めた。完成、お披露目、なにを言っているんだとレミリアへ一瞬考えるも、すぐにそれがなにか理解する。ぶつぶつと呟き虚空をのぞむフランの姿が、レミリアの怒りに油を注ぐ。

「貴様……フランになにをしたのッ！」

「なにも？ 強いて言うなら原石を磨いてやったに過ぎない。フランドールがどういふ存在か、私よりお前の方が詳しくかろう？」

産まれながらに母を壊しこの世に出た妹。フランの性質は破壊である。レミリアだって薄々そんなことは気付いていた。だが、フランが口にした「お姉ちゃん」という言葉が、それだけではないことも示していたのに。

「フランから……破壊以外を奪ったの?」

「違うな、一番に邪魔だったのはお前だ。お前がフランドールから去ったから、馬鹿なことなど考えず空気のように城に居続けられればフランドールもこうはならなかった。お前がフランドールを完成させたのだ。その点だけは褒めてやるぞレミリア」

「そんな! そんなの……」

怒りは風前の灯火となり、向かう先を百八十度変えた。敵に向かっていった矛先は己へと向き、ぐっさり深く突き刺さる。大事な妹のためを思って我慢できずに打った手が、最もフランを壊した原因。「なんで?」と、抱え切れずに零れ落ちたレミリアの眩きを、拾って欲しくもない相手が拾う。

「なぜ? なぜだと? レミリア、お前はこの世で最も大事なものはなんだと思う?」

「は? ……そんな、なの」

「力だ! 愛や情などというどうだつていいものではない、この世は力こそ全て! 仲間を思いやり平等に? 見も知らぬ誰かを思いやってなど馬鹿らしい。そんなことをすれば思い上がった者たちによる争奪が待っているだけだろう。人間を見ればよく分かる。だからこそ私が全てを掴んでやるのだ! 絶対的な者がいれば、その者は生物の枠を超え文句の言葉さえ出なくなる」

「なによ、それ……。お前は神にでもなる気なの!?」

「神? 違うな、私は神さえ超える! いずれ人間は神に祈らず私に祈るだろうよ。なんだつて私に差し出すように」

大事なものもくだらないものも、ただ絶対的な力で叩き潰す。それこそ竜巻のような災害のように。ただそれは生きた災害だ。シエルターに籠つても、向こうからやって来て無理矢理扉をこじ開けて来る。跪き、手を組んで、ただただ許しを請う姿。それを目の前に並べ

ようとドラクルは吐いている。そして、それができるかもしれないだけの力がある。ただ、要らないものもあると言うように、ドラクルの紅い瞳が青い髪を貫いた。

「だからこそ弱者は要らない。お前のことだひとりぼっちの憐れな娘」

吸血鬼らしくない吸血鬼。お前に夜は相応しくないと小さな吸血鬼に吐き捨てる。そんなこと言われるまでもなく、レミアは嫌という程分かつている。だがしかし、その一ひとりぼっち言は余計だった。

その必要なかった一言が、トドメどころか燃料となつてレミアの心に火を灯す。ひとりぼっち。少し前ならその言葉で心がポツキリ折れていた。が、今はレミアはひとりではない。レミアの顔を移した先にいる二人。満月と美鈴の顔を眺めて、力の抜けた拳をレミアアは握り直す。

「ああそう……、そんな弱者にお前は負けるのね」

「なに？」

「二つ間違えているわ、私はひとりぼっちなんかじゃない」

立ち上がったレミアの背後で揺れる二つの紅い髪。三つの影を見下ろして、つまらなそうにドラクルは長い息を吐いた。弱い吸血鬼と異国の妖怪と異国の人間。しかも一人は死に掛けた。たったの三人ぼっち。相手にするのも馬鹿らしいと身を翻す。

「なら三人仲良くあの世に行けよ」

「なに、逃げるわけ？」

「逃げる？ いいや、この場に私は必要ないのだ。なぜフランドールの完成を私が第一に考えていたと思う？ いい事を教えてやろう。お前だろうと誰だろうと、フランドールには勝てんのだよ。お前がどんな手を打とうとな。最後に妹に遊んでもらえ。……フランドールいつまで呆けている、やり方は教えただろう？」

ドラクルの呼び掛けにはフランは小さく肩を跳ねさせて立ち上がる。大きく頭を左右に振って、「やっぱ壊そう」と呟きながら。虚ろだった紅い瞳に光が灯るのを見送って、ドラクルへ闇の中に溶けるように消え去った。「待てッ！」と叫び足を出そうとするレミアの前

にフランは立ち塞がると柔らかい笑みを姉に差し向けた。

「フラン！ 貴女……本当に」

「お姉様！ 折角会えたんだもの！ 久し振りに遊びましょ！ 壊れるくらいに！」

「や——」

止めよう、と口に出そうとした言葉は言い切れず、地を踏み目前に飛来したフランから逃れるようにレミアは仰け反った。頬を掠るようになり抜けたフランの後を追う赤い飛沫が宙を漂う。切れた頬に手を添えて、振り返った先にいる妹の笑顔を見てレミアは口端を強く歪めた。言葉は不要。なにもフランには届かない。耳触りの良い言葉をどれだけ並べたところで右から左へとフランの中を通り抜け芯には決して響かない。

動かないレミアの姿を遊んでくれるのだとフランは一人自己完結し、七色の宝石が揺れる羽を大きく広げ姉の胸へと飛び込むように強く腕を引き絞る。

「アハッ！」

「ツぐぐ!?」

——ボグッ!!?

打ち合った小さな右拳と右拳。柔らかかそうな拳同士がぶつかり合ったとは思えぬ衝撃音が夜の静寂を貫いた。林檎を手で握り潰したような重い音が手から漏れ、それに押し出されるようにレミアとフランの腕が弾け骨が飛び出す。

（腕がツ……逝ったッ！）

たったの一合で腕が駄目になる。崩れた腕の痛みに歯噛みするレミアの目の前で笑顔を浮かべたまま、フランは糸の切れた人形のように入っていない右腕を振った。

「……はッ？」

痛みが一瞬頭から消え去り、間抜けにレミリアは口を開ける。宙に飛び散った赤い雫が停滞したかと思えば一斉に淀みなく動き出す。ジグソーパズルを組み立てるように、赤い雫は雨が降るように、崩れたフランの右手に落ちてゆき、元の形を組み立てる。パシヤツと地を赤く染める血はレミリアだけのもの。肉体の回復とは違う再生の仕方、レミリアの開いた口が塞がらない。

(なんなのそれはッ！)

まるで血液を操ったかのような現象。単純な妖怪の肉体再生とは違う。身体を霧に、蝙蝠に変化させる吸血鬼の力の応用とでも言うように。

元に戻った右腕をフランは姉に差し向けてその手のひらを大きく広げる。手の中に浮かび上がる小さな丸い球体を目にして、レミリアの目が見開かれた。拳を放つ、刃を薙ぐ、それと同じくらいフランにとっては当たり前な破壊の形。それをレミリアには止めることなどできず、ただ閉じられてゆく右手を見送ることしかできない。

「きゅっとして」

どかんとレミリアの内側が爆ぜた。身体中にヒビが走り、割れたカップのように体から血液を撒き散らす。一瞬で潰れたトマトのように大地に崩れたレミリアの気がほとんど消え去ったことに美鈴は急ぎ顔を上げ、小さな吸血鬼の姿に感情のまま言葉を吐いた。

「お嬢様ッ!!!」

瀕死の満月と瀕死のレミリア。たった一人にあつという間に。守る暇もなく壊される。「あ……」と零した美鈴の心の籠ってない呟きは己の無力さを呪つてのこと。

次こそは。

そんな風に山門を離れたはずなのに、訪れた次は呆気ない。お前は誰も守れないと言うように笑う少女の声に、堪らず美鈴の中で何かを外れる。ゆらりと揺れ立ち上がった赤い長髪にフランは目を移し、再び右手をゆるりと伸ばす。手を広げた先にいる美鈴に笑い声を叩きつけながら、右手を強く差し出し続ける。

「あれ？」

首を傾げるフランの前に一歩美鈴は足を落とした。それができればもう一歩。怒気に髪を揺らしながら、青い瞳を暗く輝かせ。

「あれ？　なんで？　なによお前」

右手に目が浮かばない。右手を軽く振るフランの姿を視界から外さぬように美鈴は瞬き一つせず、強く大きく舌を打つ。体の内側が気持ち悪い。見えない小さな手で体の内側を弄られているような妙な感覚。その手の小さな気を、身の内に締めた気によって強引に押さえつける。「貴女体の中に手があるの？」と可笑しそうに笑うフランの顔へと、美鈴は躊躇なく拳を落とした。

「アハッ！　痛い痛い！　貴女面白いわ！　もつと遊んで！」

「申し訳ありません、例えお嬢様の妹様でも！　私はッ！　私は――ッ!!？」

振られる山門の妖の動きは精彩を欠き、ただ感情のままに拳を振るう姿に普段の流麗さは微塵もない。ただ殴りたいから殴ると言うように拳を握る美鈴の姿を、他人事のようにレミリアは視界の端で眺めていた。

大切な従者が大切な妹を殴っている。どうしてこうも見たくない景色ばかりが並ぶのか。満月を貫いたフラン。フランを壊したのはお前だと笑うドラクル。拳を向けてくる妹。妹を殴る美鈴。どれもレミリアが見たくもないものばかり。フランにお前は勝てないとドラクルが言った通り、これが運命とでも言うかのように。決まった未来は変えられない。音もなく目の端から涙を零すレミリアは、その雫ももう自分では払えない。

そのはずなのに、風に押されるようにふいにころんとレミリアの顔は天へと向いた。

「ま……ん、……げっ？」

「お互い、ぼろぼろだな、れみいよう」

青白い顔で、胸から血を流しながらも静かに笑う人間の男。

なぜそんな顔をするの？

言いたくても言葉はか細い吐息になるだけで口から抜けてゆく。レミリアの視界の中で満月は瞳を動かして、美鈴とフランの姿を見る

と、「止めたいか？」と小さく零した。僅かに縦に振られるレミリアに満月は笑みを深めるとレミリアをの口を開いた傷に押し付けるように優しく抱いた。

「俺は……、死んでもいいんだ。あの日からずっと死にたかった。俺はもう……駄目だ。今なら、好きだけ血を啜れ。乾いた喉を潤して、一息吐いたら好きなことを……、俺は……れみい、美鈴殿を——」

「だ……めよ。ダメ……満月ッ」

口を開くごとに口の中に満月の血が滑り込む。飲みたくないのに無理矢理喉を潤して、レミリアの体のヒビを埋めてゆく。包み込んでくれている満月の体から力が抜けてゆくのをレミリアは全身で感じ、戻って来た力のまま無理矢理体を引き剥がす。いとも簡単に剥がれた満月の体に、思わずレミリアの目の端から雫が溢れた。

「ダメ、ダメダメっ！ 満月！ 待ってて！ すぐに終わらせるから！ それまで絶対ッ！」

口元を真っ赤に染めて、ゆっくり満月を地に下ろしレミリアは強く振り返る。未だ殴り合う美鈴とフランを目に、心の底から湧き上がる激情を理性で無理矢理押さえつけ強く強く拳を握った。

「なにをやっているの美鈴ッ!!? 貴女は守るために来たのでしよう!!? 拳を向ける相手が違うでしょうッ!!?」

「お嬢様ッ!!?」

叩きつけられた少女の言葉に嬉しそうに顔を綻ばせた美鈴が顔をレミリアに向けた途端、滑るように動いたレミリアの顔を真近に見て思わず動きが止まる。身が竦んで動けない。強く不動で立っているわけではない。柔らかく妖しく佇んでいるのに、恒星よりもなお強く闇夜を染めるように輝く紅い瞳。ただそれで見つめられているだけなのに、意識を鷲掴みされたように動けない。

「お姉様！」

「フラン、貴女も……、今は去りなさい。私は必ず戻ると貴女に言ったわね？ だから家で待ってなさい。その時は貴女が与えてくれたものを返すわフラン」

「お姉さ」「聞き分けなさい。それがレディへの第一歩よ」まっ!!?」
突き出した拳を一步で潰され、ガラ空きのフランの脇腹にレミリアの拳がめり込んだ。屋根を砕き吹き飛んだフランに、レミリアはほんのちよつと乾いた息を吐き出して、すぐに身を翻す。

体の上に乗った崩れた屋根を押し退けて身を起こしたフランはぼうつとレミリアの背を見つめ両手で強く顔を覆う。

(あんなお姉様の顔、初めて見た……アハッ)

笑顔でも悲しげな顔でもない姉の顔。垣間見せた主の顔。驚き、狂喜、なんとも言えない、怒られたのとも違う姉の言葉。ただ優しく突っ立っていただけのレミリアとは違う初めて見た姉らしさに、フランのなにかが揺れ動く。

「会いに来てくれるって！ 会いに来てくれるって！ 帰らなきや、帰らなきや会いに来てくれなくなっちゃう！」

飛び去るフランを見送り、美鈴もようやく肩の力を抜いた。ホツとしてしまっている自分に気付く強く拳を握りしめる中で、「満月!!?」と男の名を呼ぶレミリアの声に、美鈴の意識が引き戻された。慌てて美鈴も駆け寄るが、その足に力はない。もうどうにもならないだろうことが美鈴には誰よりも分かっていた。満月の体に縋るレミリアに掛けられる言葉が見当たらず、ただ静かにレミリアの横に腰を下ろす。

「満月！ 終わったわ、満月！ だからしっかりして！ 美鈴！」

「……お嬢様、この傷ではもう」

「嘘よ！ そんなこと、美鈴！ 気を操って傷は塞げないのツ!!?」
「精神を整えたり、体力の回復ならばできますが、物理的に傷を塞ぐのは……」

強く奥歯を噛み、レミリアが満月の頬に手を添えても瞼を開けてはくれない。血の気が引き、今にも消え去ってしまうほどに熱のない満月の体に、レミリアは弱く顔を俯かせた。

「ダメよ……、ダメ。絶対ダメ……だから……なにか……」

「お嬢様……」

親指の爪を噛みながら泳ぎ回る紅い瞳に、美鈴は一度目を瞑り、満

月の頭を膝の上に置き額に手を添えた。せめて最後の一瞬まで、意識が消えてしまわぬように気を整える。レミリアはまだ諦めていないだからレミリアより早く従者の美鈴が諦めるわけにはいかないのだ。

(満月さん、貴方は)

レミリアにフランの爪が伸びた時、誰より速く動いたのは満月。殺気や敵意、刺々しい気を感じなかったが故に、レミリアがフランに触れる姿に心惹かれるだけで美鈴は動けなかった。守ると口にしたはずなのに。それでも美鈴を責めるなど笑った満月の心が、やはり美鈴には分らないから。

(どうかできるならまだ行かないでください。お互いの国のこと以外にもまだ貴方とは話したいことが……)

お互いなにかを失った者だから。敢えてそれを満月も美鈴も詳しく口には出さないけれど。お互いの心情を最も汲み取れるのは美鈴と満月。身のうちの意識を掴まずに手放している満月の“気”の動きを触れているからこそ美鈴は理解している。でも、それでも、まだ行ってくれるなど手放された気を美鈴が無理矢理引き止めて、そんな美鈴の願いを聞き届けるかのように、美鈴の視界の端で鮮血が散った。

「お嬢様ツ!?」

「美鈴、そのまま満月を離さないで！ 満月がくれたものを今返す！

大丈夫、きつとできるわ！ 私にはできるツ！」

自分の手首を爪で裂き、嘔き出す血液を満月の胸に垂らしてゆく。突然の自傷行為に美鈴は驚くがレミリアは真剣そのもので、勝手に塞がろうとする手首の傷が塞がらぬように、レミリアは何度も手首を掻き筆った。

「フランを見て分かった！ 吸血鬼がなんの妖怪か！ 吸血鬼は血の妖、自分の血を操り形にできる。私と満月の血を混ぜれば傷を塞ぐことができるはず！ いえ、やるのツ!!? でも、そんなのなにが起こるか分からない。だから、満月を守って美鈴！」

「あ……、はいッ！ お嬢様！ お任せを！」

吸血鬼の血を身の内に巡らせ満月がどうなるかなど誰にも分かつ

たものではない。自らの一部を人なぞに差し出す吸血鬼の例などあるはずもなく、遊びでもなく、ただ救うために己の一部を差し出す夜の王など類を見ない。レミリアの血を受け、これまで動かなかった満月の体が小さく跳ねる。掴んでいる満月の意識を決して手放さぬように、美鈴は満月の体を抱え込んだ。

「待ってて美鈴！ もう少しでなにか掴めそうなの！ もう少しで！」

血の一滴さえ己の一部。手足と同じ。人の血管の中を流れる自分の一部に意識を集中し、形ない赤い液体を手を動かすが如く動かそうと意識を向ける。破れた血管の外へと、もう大事なものが溢れてしまわぬように受け止めて、空いた穴を埋めるようにレミリア強く形ない手を伸ばす。

「行っちゃダメよ満月！ ルーマニアまで力を貸してくれるって、頼っていいって言ったでしょ！ まだルーマニアに着いてない！」

まだ貴方に頼らせて！ 美鈴だけでも、貴方だけでもダメなの。二人一緒にやないとイヤ！ だから戻って！」

煮詰まったレミリアの頭を「なにをやっているのだ」と満月はいつも小突いてくれる。レミリアの迷いを「お嬢様」と言いながら微笑み美鈴がいつも背を押してくれる。そんな二人がいたからレミリアはここまで来れた。その二人のどちらも絶対にレミリアは手放さない。その言葉を表すかのように満月の胸の穴は塞がって、静かな呼吸音が戻ってくる。ゆっくりり上下する満月の胸にレミリアは微笑み、その上に優しく崩れ落ちた。

「それで戻って来たわけかい。やれやれ、血塗れの人間と血塗れの吸血鬼のお嬢ちゃんを背負ってやって来たかと思えば、あんたまで倒れるもんだから面食らったよ」

「申し訳ありませんノーレッジ様。部屋をお借りしてしまい」
「別にいいさ、それにしたって……」

申し訳なさそうに縮こまり座る美鈴から目を離し、スヤスヤと寝息を立てているレミリアと満月をちらりと見て魔法使いは薄く笑った。どんな旅をすれば、ただ自分の弱さに打ちのめされ蹲っていた小さな娘が、自分の身を切つてまで人間を助けるようになるのか。魔法使いの頭脳をもつてしても理解できない。情と言つてしまえばそれまでだが、単なる情とは違うなにかが渦巻いているように見える。

「愛つてやつかね、私にもよく分からないものだ」

「そうなのですか?」

「一千年生きても分からないものは分からないもんだよ。だから面白いけどね。それを知ろうと思つて数百年前に子供を作つてみたりもしたけど分からず仕舞いさ、お転婆な娘は愛想つかせて出てつちまうし、魔法使いならなにより知識が第一だからね。好奇心には勝てないよ。全く面白い」

パイプを啜えて煙を燻らす初老の老婆に美鈴は肩を竦めて力なく笑う。そんな中身の詰まつてない美鈴の笑い声に魔法使いは手を振つて、独りでに浮いたポットが紅茶を淹れるのを確認し終わると美鈴の手元まで送り出した。

「ありがとうございます」

「ん、で? あんたはなにを悩んでるんだい? 初めてここに来た時とは打つて変わつて力ない。そんなんで勝てるのかね?」

「……私は」

口籠もり、美鈴は満月とレミリアが未だ夢の世界にいるのを目にすると一口紅茶を口に含み唇を濡らした。言おうか言うまいか、あまり言うべきことではなく、なによりレミリアと満月には聞かれたくない。レミリアと満月の意識がここにないからこそ、美鈴は軽く目を伏せてゆつくりと口を開く。

「私は、どうにも無力です……。守ると言いながら、私の力は守ることに向いていない。満月さんと組手をする中で、湧き上がる闘いへの欲求が消えてはくれない。力を求め師の元を離れ、訪れた結果に、手に

入れた力は使うまいと戒めても滲み出てしまう気配を満月さんには気付かれてしまう始末。お嬢様の妹様との時も、結局感情に流されてしまいました。私はどうにも未熟です……」

カップの中の波打つ紅茶に目を落とす、水面に映る自分の顔を美鈴は見つめる。良い自分であろうと努力はしているつもりだが、どこかで必ず嫌いな自分が顔を覗かせてくる。闘いを、闘争を、遙か昔から求めているものが結局変わらない。カップを手に動かない美鈴に魔法使いは煙を吐いて、くだらないと言うように手を振った。

「何故なら俺はサソリだからかい？ 誰もが自分に呪いを掛けて生きている。根っこは結局変わらない、千年生きる私が言うんだ間違いないさ。それを嘆き生きるのか、それともそれを飲み込み生きるのか。選ぶのはあんた次第だよ。どうするんだい？」

好奇心に目を光らせる魔法使いの視線を受けて、再び美鈴はカップの中の紅茶に映る自分を見つめる。ただ嘆くのか、飲み込み進むか。その問いの答えはレミリアが示した。再び手に入れたものが壊れてしまうのを、レミリアが拾い上げ防いでくれた。進まなければ掴めない。だから美鈴はカップを強く傾け紅茶を飲み干し、「やっぱり飲んだね」と魔法使いは愉快そうに指を鳴らす。

その音を目覚ましにするかのようにむっくりと身を起こしたレミリアに美鈴と魔法使いの視線が集中し、レミリアは二人の顔を見比べ、横で未だ眠っている満月に目を落とすと深く長い息を吐いた。

「——お世話になってしまったようねノーレツジ卿」

「別に構わないよ、お嬢ちゃんに従者のおかげで暇は潰せたしね」

「それで、私はどのくらい寝ていたのかしら？」

「一日。日が昇って落ちた。もうとっくに術式はできてるけど、どうするんだい？」

「そう、なら行きましょう。時間が惜しいわ。もう待ってられない」
うんと伸びをしてベッドから足を出すレミリアに魔法使いは目を丸くした。迷わずに行くと言ったレミリアの姿が、あまりに自然で思わずそうかいと納得しそうになる。

「起き抜けにもう行くのかい？ その人間だつてまだ起きていないだ

ろうに」

「満月はここまでよくやってくれたわ。昼間は人間たちの時間。でも今は夜、私たちの時間。夜に人は寝るものでしょう？　これまでの分、満月にはゆっくり休んで貰いましょう。ねえ美鈴？」

「はいお嬢様、満月さんの分も私がお嬢様をお守りします」

迷いのない美鈴の瞳を見据え、レミリアは小さく微笑んだ。ただ、そのまま美鈴の服装に目を留めてレミリアの動きが少しの間止まる。チャイナドレスのような服ではなく、美鈴が着ているのは使用人の服。目を瞬くレミリアへの答えは魔法使いが口にした。

「お嬢ちゃんたちぼろぼろの血塗れだったからね。用意できるのがそれしかなかったのさ。子供用のドレスはあったからお嬢ちゃんのは別だけどね」

「いいじゃない、急拵えでも似合っているわ、この戦いが終わったら美鈴の服もちゃんとしないとね」

「それまでに着慣れておくように致しましょう」

「ええ」

「それで、どうするんだい？　行くならずに送れるよ、ポエナリ城の玉座の真正面にね。相手の懐のど真ん中に行くことになるけどいいのかい？」

強く笑うレミリアの顔が答え。一々言う必要はないと言う笑みに魔法使いは楽しみに指を弾き、術式を発動するための呪文を紡ぐ。膨れ上がる魔法使いの魔力が石の床に紋様を描く中、レミリアは首に掛けていた十字架を外し満月の顔の横へと置いた。ペンを走らせた紙も添えて、満月の額に軽く一度口づけし、美鈴の横へと足を出す。

「行きましょうか美鈴、どんな力であろうとも、私は貴女を信じてる」
「お嬢様……意地悪ですね、起きてました？」

「さあ？」

とぼけたようにレミリアは笑い、窓から見える夜空へと顔を向ける。赴くのはレミリアと美鈴だけ。死にかけて満月まで連れてはいけない。でも、その名はいつも近くにある。夜空を見上げれば浮いている。夜闇を照らす満月が。大気の影響でレミリアの瞳のように紅

く輝く様を眺めて。

「こんな月に月が紅いから、楽しい夜になりそうね」

そんな眩きを残して、レミアと美鈴の姿はトプカプ宮殿から消え去った。

十五夜満月と島原の乱

銃声と叫び声。大地一面が赤く染まった血の池地獄。空気さえ赤っぽく見え、吸い込む空気がむせ返るほどに血生臭い。名も無き骸に要はないと、多くの屍が地に転がり、名のある首級を求めて修羅が蠢く。肉を削り斬る柔らかな音、火縄銃の発砲音が一つ鳴る度にどちやりと血の池地獄に骸が落ちる。響き続ける掛け声と殺人の音は狂気を呼び、島原、海辺の城、原城へと止め処なく流れ込んでいた。

その合間をひゆるりと一人の黒い総面の面頬を付けた男が川を越えるかのように横断していた。刀を肩に置き走る姿は飛脚のようにも見えるが、手に持つ刀と人肌が隠れる程に血濡れの体がそれを否定する。人の河を縫うように、滑るように男が合間を走れば、ずりりと音もなく走った後の侍の首がずり落ちる。急に崩れ落ちた人に河の流れは一時止まるも所詮一瞬。それを尻目に男は舌を打ちながらただ先を急ぐ。

「急に首が!?？」

「鎌鼬か!?？」

「構わん進め! 大将首まであと少しよ!!??」

王手の掛かった状況で手を緩める馬鹿はいない。一揆勢約三万七千対、幕府側約十二万五千。四倍近い相手に寧ろよく持ったと褒めたい程だ。「こりやあ負けだ」と男が蠢く侍たちの流れを見て諦めている中、視界にキラリと銀閃が滑り込んだ。おっとと男がたたらを踏んだと同時に、目の前の侍の頭は吹き飛び刃は男の頭上へ消え去る。軽く息を吐くと、男は迷いなく足に力を込めて大きく跳んだ。目指す先は侍を射抜いた鉄礫の射出点。城壁の上に佇む幾人かの鉄砲衆、その中の一人の男の隣。

「すまん三みえむら会村三みえむら会村金作、種子島出身の武将。糸針の穴をも撃ちと

おす鉄砲の名手殿、助かった」

「構わんさ三さんざ左大矢野三さんざ左衛門、原城大江丸の大将、それにしてもこりやあ参った」

至る所から侍に城の中に踏み込まれ、穴開きチーズのようになって

しまっている城。どこを見ても敵だらけ。刀を振れば、銃を撃てば敵に当たるとは言え、多勢に無勢は変わりない。両手を上げて降参したところで待っているのは処刑ともなれば、もうどうにも手がなかった。敗戦という言葉が誰も頭の頭の中を駆け巡るが、それでも三左と金作は笑みを浮かべる。

「泰平の世にこれだけの戦が出来れば満足よなあ。それで？ どうじゃ三左、大江丸は？」

「とつくに落ちた。千々石千々石 五郎左衛門。島原の乱の一揆勢の軍師、大矢野三左衛門と共に原城の大江丸を守っていたとか殿が下がれと言うてな、四郎様の下に行けとよ。負けは負けでも大将さえ残っていれば後はどうとでもなると。二の丸はどうした？ 三會村殿」

「ガハハ、とつくに落ちたわ！ 今はこうして数人と最後の悪あがきよ！ 行けい三左」

笑って弾の込め終わった火縄銃を受け取る金作を見て、三左は小さく口を引き結ぶ。誰が見ても分かる、ここを命の捨て場所だと決めた顔。三左の背を押し送り出した五郎左衛門の顔と同じ。三左は小さく引き結んだ口を僅かに開き、つい「三會村殿は来ないのか？」と零してしまふ。それに一瞬金作は笑みを消すが、すぐに再び笑い声を上げた。

「儂はもう十分戦った、だからここで戦い納めじゃあ。四郎様はまだお若い、三左、お主もな。だから四郎様はお主に任せた。それに儂はまだ首級を一つ討伐軍の大将、板倉重昌を討ち取ったのは三會村金作。しか挙げてないからのう、三左の三つには並びたいところじゃ」「いや、それは将なのになぜか向こうから最前線に突っ込んできたからだし、三會村殿が挙げた首級は大将だろうに……」

「ガツハツハ！ 老将は放っておいて先に行けい！ 少しばかり時は稼ごう！ 総大将を頼んだ！」

喧騒の中でもよく響く金作の笑い声に、三左は一度俯き小さく笑った。死に場所を決めた侍に無粋な言葉は不要である。「三會村殿、おさらばです！」と走り出す三左に金作は銃声でもって応え、三左の前に人の河に風穴を開けた。頭を吹き飛ばされて崩れ落ちる侍を踏み

台に三左は大きく跳び上がり、城壁の先へと駆け上がってゆく。

至る所に見える幕府側の御旗、本丸さえ囲み尽くしている侍たちの間に落下し、その勢いを利用して無理矢理三左は人垣を抜ける。空から降ってきた謎の男に、「おうツ!!?」「オウツ!!?」と侍たちは刀を構えて立ちはだかろうとするも、辻風の如く走る三左は相手をせず、名も名乗らずにすれ違い様に首を撥ねる。

「相手をしている暇はないツ! 退けいッ!!?」

斬っても斬っても終わりが見えない。勝ちがほぼ手中に収まっているからこそ、出来るだけ手柄を上げようと挙つて敵が襲い掛かってくる。徳川の世になって以来、豊臣が滅んでから巻き起こった久々の大戦。これを逃せばいつ戦があるか分からない。血気盛んな侍たちに三左は大きく舌を打ちながら人の壁を強引に抜けて本丸の中へと足を落とす。

(クソツ、少し掠った)

赤い雫を宙に散らしながらも足は止めない。始まる前から敗戦の色が見えていた中、軍師として頭を巡らせていた五郎座衛門の今際の際の頼みだ。その最後の策ぐらい成功させなければ、武士としての意に反する。だから傷の一つや二つ、できたところで足を止めてなどいられない。

「何奴! 名を名乗れい!」

「邪魔だ貴殿らツ! 去ね!!?」

名を名乗っている暇などない。狭い室内、するりと抜け出ることなどできず、立ちはだかる侍を一人二人と力任せに斬り捨てる。ペキリツ、と音を立ててへし折れた刀を放り捨て、床に転がる骸を乱暴に踏みつけ、三左は無理矢理目前に控えた襖を蹴り破る。

「肥後細川藩士! 陣佐左衛門!!? 天草四郎時貞、その首貫い受けるツ!」

「渡すか阿呆ツ!!!」

刀を上段に構えた侍の背に勢いに任せた三左の蹴りが飛来する。弾丸のように飛び込んで来た三左に侍たちが反応するも間に合わず、一人蹴り飛ばしたまま身を捻り、薙がれた三左の脚に巻き込まれ木の

壁に幾つもの影がめり込んだ。

足を振って調子を確かめ、壁を背に座っている総大将へと三左は顔を落とした。

一見女に見えなくもないが、よく見れば体つきから男と分かる美少年。陶器のような肌の白さが、薄暗く血に塗れた世界の中では浮いて見えた。白い布で長めの黒髪を頭の後ろで縛り、日ノ本では見慣れぬ洋服に身を包んでいる。座禅を組んでいるかのように座る天草四郎時貞の顔に歪みはなく、分かっていたと言うように三左の方へと顔を上げると柔らかく笑った。

「来たな三左、……なんだその面は？」

「若いと舐められますからな、顔を隠すためでござる」

「三左の敬語はなれぬのう。それで？　なぜ来た？」

「四郎様を逃がすためでございますれば！　四郎様さえ生きておればどうとでもなると、千々石殿がな！　行きますぞー！」

言うが早い三左は四郎を引つ掴み外へと飛び出す。海沿いに建てられた原城ならば、海沿いに抜けられればどうとでもなる。そのためには十二万に上る包圍網を突破せねばならないが、そのほとんどは功を求めて城に突っ込み、人の波に後押しされて後戻りは難しい。だからこそ人ふたり、煙に紛れたただ逃亡に専念する三左の足を追うことはできない。

「おい三左！　主怪我をしておるぞ！　大丈夫なのか？」

「喋ると舌を噛みますぞ四郎様！　なるべく端を行っておるから問題ありません！　それに千々石殿が面頬つけた俺の影武者を立ててくれたお陰で逃げるなら今しかない！　俺だつて宮本武蔵殿などとはち合いたくないですからな！」

「はっはっは！　そうか！　三左が言うなら大丈夫だろう！　向こうの木の方が良さそうだぞ三左」

「四郎様が言うならそうなのでありましょうな！」

二人笑い空を舞う。人目の向かぬ中をかつ飛んで、喧騒が少し遠くなったところでようやく三左は四郎を下ろす。少し遠くになった原城から立ち上る薄っすら朱に染まった煙を見上げ、三左は小さく肩を

落とした。離れたところで幕府側にいる忍びたちを引き剥がすことはできない。追いつかれるのは時間の問題、眉を顰める三左と違い、四郎は木に寄りかかり薄っすら笑いながら腰を下ろした。

「四郎様、休んでる暇はないですけど、ここを抜けなければどうにもなりませんせぬ」

「ん？ 大丈夫き三左、我には見えておるよ、三左と二人なら大丈夫じゃ」

コロコロ笑う四郎に、一気に三左の肩の力が抜けた。四郎は奇跡の体現者。海の上を歩いた、神の言葉を口にした、枯れ木に実を実らせた、などと多くの奇跡を起こしている。中でも未来を覗くことができることがなにより強みだ。幕府との戦いを三ヶ月も続けられたのは、四郎のその力があつたからこそ。四郎が大丈夫と言えば大丈夫。力の抜けた三左を四郎は手招きし座れと促す。

「二人つきりは懐かしいのう三左、大矢野島で遊んでた頃を思い出さぞ。あの頃が一番楽しかった。だと言うにお前が家を出るから」

「二つどころに留まるのは苦手でした。修行の旅は楽しかったですよ」

「三左は武人じゃからなあ、変な技覚えおって、我より人外地味である」

「それはない」

微笑む四郎に三左も苦笑し、面頬を外し大きく息を吸った。血の匂いのしない空気が懐かしい。深く息を吐き出して、三左も四郎の横へと腰を下ろす。

「負けたな四郎様よ……、担がれた神輿に文句も言わず座る必要がありましたか？」

「力があればこそ、民の願いを聞けるものなら聞かんな。切支丹ではない三左には分からんかもしれないが、ただ、お陰で三左が旅から戻った。三左も一度十字架を握ってみればよいのに」

「……へッ、俺は大戦があると言うから来ただけでござりますれば。それに、それは四郎様がやらねばならぬことなのですか？」

「できるのだからやったまでじゃ、三左もそうだろう？ 頼られたな

ら応えてやるものじゃ。なあ？」

「まあ、そうですね？」

頼られたからと武人でもないのに三万七千の上に立つ四郎をどうにもおかしいと思いはするが、だからこそ担がれたのだと思ひもする。三左が参戦したのは四郎が総大将になったからというのが半分、覚えた技が試せそうだからというのが半分だ。見知らぬ誰かに頼られて、その全てに手を差し伸べようなどという気は三左にはない。

「まあなんにせよじゃ、久々に二人で語れて嬉しかったぞ三左！」

「なんですかそれは、これから何度までできるでしょうに」

「そうじゃなあ、三左と二人で行けば、遠い未来の勝利まで我には見え
ておる。三左と二人なら……」

「そりゃあ最高の言葉でござりますな。分かっている勝利とは」

鼻を鳴らして笑う四郎に合わせて、三左も笑うが同時に草むらが小さく揺れる。笑顔を三左が顰めた瞬間、四郎に向かい飛んで来た手裏剣を三左は手で叩き落とし、木陰から這い出てくる二人の黒装束の間に一息で滑り出た。

打ち出される苦無の横を縫って放つ三左の拳が忍びの腹部にめり込むが、苦無が肩を抉り空に消える。返しの蹴りでもう一人を蹴り飛ばしながら、三左は肩から噴き出す血を払った。

「四郎様！ 行きますぞ！ 敵の追っ手が——」

——
ぴちやり。

と、地に落ちる赤い雫。三左の肩口から舞い散った黒い血とは違う赤い血が、四郎の首筋から垂れている。首を押さえる華奢な手とは反対の手に三左がはたき落とした手裏剣を握り、四郎は笑ったまま手裏剣を放り捨てる。

なぜ四郎が怪我をしている？

分かりきった答えに無理矢理疑問を思い浮かべるが、結局答えは一

つきり、四郎が自分で自分の首を斬った。

「なにやっつてんだ四郎ツ!!!」

「ははっ、ようやく敬語が解けたな三左……」

「馬鹿言つてんなツ！ 傷を見せろ！ 早く止血をツ!!？」

伸ばす三左の手を四郎は力なく叩き落とし、四郎はただ笑うばかり。四郎の頭の中がどうなっているのか三左には理解できない。およそ致命傷に見える四郎の傷に、「なぜだツ!!？」と叫ぶ三左の顔を優しく見つめて四郎は柔らかく尚も笑った。

「三左と二人で行けば勝てるがな……、それだと道中で三左が死ぬ」

「だからなんだツ!!？ それで勝てるなら」

「……三左が死ぬのだけは我はイヤじゃ。我がいなければ三左は」

「なんだそれはツ!!？ お前ふざけ……ツ!!？ クソがツ!!？」

強く握り締めた手を差し出す先がまるで見えず、ただ強く地に拳を叩きつける。ずるりと砕けた拳から血が滴るのも気にせず二度三度と拳を落とす三左の手に、真っ白い手が重ねられた。

「三左、我は残念ながら人を率いる器ではない。三左が仕えるべき主はきつとどこか他にいる」

「そうでなくたって、お前は俺の……ツ！ なんで……」

「三左と同じじゃ……、三左、東北に行け、東北にはなあ、幻想郷という幻の集まる不思議な都があるそうじゃ、東北にある遠野がその玄関口のひとつ、そこで三左の力を必要としている者がいるのが見えた……、そこで半年ばかりは身を隠せ」

「馬鹿、そんなの……」

知るか！ と言いたいのには、四郎の笑顔の眩しさに押し込められるかのようにその先が言えない。三左が強く口を引き結ぶのを見やり、四郎は髪を結っていた白布を解くと、血に濡れた三左の手に弱々しく巻きつけた。

「できれば……三左と一緒にぼるとがるに行ってみたかったのう、二人で小さき頃に見つめた海の手へ……、行け三左、未来の主の元へ……、三左を拾ってくれる者のところへ……大丈夫、きつと我と三左はまた会える」

「そんなこと……」

「行け三左！」

遠くで草むらが揺れる音を聞きつけて、少し厳しい目をした四郎に三左は押されヨタヨタと数歩後退さる。細い体躯の四郎のどこにそんな力が眠っているのか。四郎に巻かれた朱に染まった白布を握りしめ、言葉にならない呼吸を繰り返し、四郎の手が力なく地に落ちるのを見て三左はなにかが切れたように走り出す。

三左だつてここで死んでもよかつたのに……。

勝利が分かっているのに、未来が見えるのになぜわざわざそれを捨てるのか。

五郎左衛門も、金作も、四郎までも皆三左を置いて去ってゆく。

だからと言って自分で自分の命は捨てられない。

それを繋いだのは他でもない去りし者。

だから三左は走り続ける。

戦さ場だ。命を賭ける戦さ場が必要だ。皆が消えた戦さ場に身を置かなければ気が済まない。命を捨てる場が欲しい。きつとそこに皆が待っている。だけど、それは、どこにある？

「クソッ！ クソッ！ 馬鹿野郎がツ!!!」

叫びはただ虚しく、島原の地に木霊した。原城から聞こえてくる勝鬨の声から逃げるように、三左はただ東北を目指してひた走った。

ふと、髪とインクの匂いが鼻先を掠めた。ゆっくりと目を開けた満月の視界に映る高く積み上がった本たちが、塔のように聳えている。小さく目を動かした満月の顔の先で壁一面に並ぶ本棚が待ち受け、小さく頭を左右に振って満月はぼやけた視界を整えるが、頭の靄が晴れはしない。

「痛ッつ……」

軋んだように痛む胸を押さえながら、古い記憶と今の記憶が重なり合う気持ち悪さに満月は長い息を吐いた。意識を失う前、最後に覚えているのはレミリアの泣き顔。あれからどうなったのか満月にはさっぱり分からない。死んだのかと思わなくもないが、胸の痛みがじくじくと、これは現実であると訴えてくる。

「おや、思ったより早いお目覚めだね。吸血鬼の血のせいかい？
ふーん面白いねえ。いやいや、面白い」

噎れた老婆の笑い声に満月の顔が向けられる。長い紫色の髪が愉快そうに揺れる姿を目に留めて、満月は小さく頭を掻いた。トプカプ宮殿に居座る魔法使い。その姿を満月はしばらく呆けたように見つめ、魔法使いはまた大きく笑った。

「島原の亡霊？ 記憶をちよいと覗かせて貰ったよ暇潰しに。極東つてのはおっかないねえ、修羅の国かい？ 誰もが笑って人を斬る。騎士に近いが、それより野蛮かね？」

「……今なんの刻だ？」

「あんたが倒れてから一日が経った。吸血鬼のお嬢ちゃんは少し前に出て行ったよ。それを置いて」

指差す魔法使いの指を追って傍にあるチェストへと満月が目を向ければ、置かれている歪な十字架と一枚の紙。「いままでありがとう」と下手くそな日本語で綴られた文字を見て、堪らず満月はそのメモ用紙を握りつぶした。

「なんて書いてあるか読めねえ……」

下手くそ過ぎて適当に線が引かれているようにしか満月には見え

ないが、共に置かれた十字架で全てを察する。レミリアと美鈴は満月を置いて先へと行った。つまりはそういうこと。報酬を渡したということは、これで旅は終わりということ。用心棒と主の関係は終わり。ルーマニアの地を踏んでいないのに――。

「れみいも俺を置いてゆくのか……」

フランに胸を穿たれた時、別に死んでもよかったのに。戦場に赴くと言うレミリアについて行けば、死に場所に行けると思っていた。同じく戦いに負けた者。レミリアと美鈴と一緒になら、戦場で失ったものを拾えると思っていたのに。

置いていかれたという現実が、棘のように満月の内側に突き刺さる。

「なにを頂垂れてるんだい島原の亡霊？ 死にたかったのに死ねなかつたのがそんなに問題かね？ 生者にあるまじき生への不真面目さだね」

「……そういう魔法使い殿はどうなのだ？ 千年も生きているのだから？」

吐かれる魔法使いの毒に目を尖らせて満月は睨みつけるが、それをパイプを咥えた魔法使いの紫煙に吹き散らされた。余計なお世話と言うように、笑いながら魔法使いは頬杖を突き窓の外へと顔を向ける。

「ああもう十分に生きたねえ、不老の術を解いて今は老いを楽しんでるところさ。ただ魔法使いという種のサガか老化が遅くてね、あと三百年は生きるだろう。それまでに孫の顔ぐらいは見たいもんだね」
「老いね……、俺にそれは必要じゃあない。俺は死に場所が欲しいのだ。四郎の言っていた主なども見当たらず、俺は俺の行き場を未だに見つけられぬまま……」

十年二十年と、ただ時を重ねたいとは満月は思わない。ただ早く、逸早く、戦場に出たいのだ。自らが死ねる土地へ。仲間たちが待つ大地へ。

武士と生まれたからには、技を求め、誰かのためにその力を振り使った。四郎のために、親友のために力を使い切れたのならどれだけ良かったか。だがその機会は永遠に失われた。欲しかった機会が失われ、永遠にもう掴めない。ないものを追うことができぬならいったいなにを追えばいいのか。

満月の握り締めた拳はあれからなにも掴めない。四郎の白布を握り締めたまま、開かれぬことなく握り締められたまま。レミリアと美鈴と長い旅路の中でも変わらず、フランに穿たれた時、そろそろ手放してもいいのだろうかと思ってもそれも駄目。なら何ならいいのかわからない。

拳を握り歯を食い縛る満月を横目に、魔法使いはつまらなそうに紫煙を吐いた。なにをやっているんだと言うかのように頬杖を突いたまま。

「あんたも救われないねえ、折角拾われた命を粗末にするのかい？」

「……なに？」

「吸血鬼のお嬢ちゃんが命懸けであんたを生かしたのに無駄にするんだねと言っているのさ」

人に吸血鬼の血を混ぜるなど、およそ取るような手ではない。なにが起こるのか分からない凶事を、離れそうになる意識を美鈴が力付くで繋ぎ止め、レミリアが運命を捻じ曲げた。経ったの一日で満月が目覚めたのも驚きだが、普通に喋り動いていることも一等おかしい。魔法使いをして初めての出来事に、ただただ関心するばかりだ。だと言うのに、それを容易く放り出そうという満月に魔法使いは僅かに眉を寄せた。

「あんたの未来も自分の未来も吸血鬼のお嬢ちゃんは諦める気がないらしい。なにがあれば半年であれも変わるのか、少なくともそれは美鈴とかいう子とあんたの影響だろうに」

「俺の？」

「そうだろうさ、全くどうやって知り合ったのか知らないがね」

どうやってなどと言われても、夜の満月の下、出島の港の路地裏でたまたま満月の先に待っていたのがレミリアだっただけである。そ

の時に見せられた首飾りネックレスを手に取って、満月は掲げ見つめた。「大事なものよ！」と強く瞳を輝かせて牙を開いた吸血鬼の姿を昨日のように思い出せる。

「そりゃあ吸血鬼のお嬢ちゃんが持ってたやつだね、銀食器を無理矢理握り締めて作った十字架なんて、そんな安っぽいので雇われるなんて、あんたも変わった奴だねえ」

「安っぽいか……」

十字架に残された指の跡。その指の跡こそフランの指。レミリアが握り締めていた時は、その跡に指を沿わせて握っていた。それを思えば、安っぽいなどとは決して満月には思えない。フランの想いが形として残った十字架。この世にひとつしかない優しい十字架。その指の跡に満月も指を沿わせてみるが、まるで大きさが合わない。

「小さな手だ……」

そんな小さな手でレミリアは満月の命まで掬った。更に覗かれた未来の行き先までも変えようと。

なのに……。

「俺だけがあの頃のまま……」

未だに手を握り締めている。新たなものを掴もうともせず。

折角掴まれた命なのに……。

「ああ、そうか……、れみいが俺を掴んだのか」

満月が選んだつもりでも、満月を掴んだのはレミリア。その小さな手で満月を引き、行こうついて来いと背中を見せる。その背中になんだかんだ満月について来た。ついて来てしまった。同じく一度大敗をきつしながら、まだ未来を掴むと歩くレミリアの眩しさから目を離せなかったから。死に場所を探して歩いていた満月とは違うその小さな背中に。

主を決めるのは従者にあらず、従者を決めるのも主ではない。主と従者がお互いを認めてこそ、初めて主従となる。レミリアは既に美鈴と満月を選んでいる。美鈴もレミリアを選んだ。なら満月は？

「俺は……」

四郎の言った未来の主。満月を率いてくれる者。それは選んでく

れる者ではなく選ぶ者。満月が認めぬ限り、未来永劫主など現れない。死に場所を探し彷徨う亡霊に、選ぶべき主など存在しない。だから……。

フランの首飾り^{ネックレス}を首に掛け、満月は魔法使いの方へと振り向いた。迷いのなくなつた満月の青い瞳を覗き込み、魔法使いはゆつたりと口角を上げる。

「……魔法使い殿、俺の着物の中にあつた包みはあるかね？」

「あるけれど、それがなにか？」

「くれ」

満月の言葉に合わせて魔法使いが手を振れば、本の下敷きになつていた黒い包みが浮き上がり中の物が姿を見せる。黒い総面の面頬と、朱に染まつた白い布。目前に浮き上がつて来た赤い布を手にとると、満月は髪を後ろで纏めて布で結い、面頬を被り頭を振るう。捨てたはずの戦装束。西洋に服に居合わせぬ装いを纏い、これまで握り締めていたものを放し、新たなものを掴むために。

「魔法使い殿、俺も送れ。俺も決めよう、主を決めるのは今ぞ！ 未来を変える背中について行こう！ 俺も、俺はッ！ 今度こそきつと！！？ そういうことだろう！ 行こうるーまにあ！ 俺の仕事はまだ終わってはいない！」

「分かつたからここで叫ばないでくれよ……、ほら行ってきなお嬢ちゃんの従者」

「おう！ 今宵こそ俺はッ！ 先へ進もう！」

足元で光る六芒星へと満月は静かに一步を踏む。その一步こそようやく踏み出した本当の一步。数年間彷徨い続けた呪いから抜け出す本物の一步。その一步はルーミアまで続いている。主の邪魔するものは斬り捨てると刀を握り締めて。

「……気付かなかつたねえ」

より紅くなつていた髪を靡かせた満月が消えた先を見据えて、魔法使いは紫煙を零す。人外に一步を踏み出しながら、それを引き止めるのはレミリアの心。それを引き止めるのは美鈴の心。それを引き止めるのは四郎の白布。人であり吸血鬼、人でも吸血鬼でもない紅いレ

ミリアの従者がルーマニアへ飛んだ。

レミリアちゃんとフランちゃん

カツンツ、

とレミリアの小さな足が石の床を叩く音が小さく響く。その小さな足音の反響はすぐに数多の妖しく光る瞳に吸い込まれるように消えていった。小さな吸血鬼の紅い瞳の先に座す紅い瞳。玉座に足を組み座る吸血鬼は、突如宙に浮かぶように現れたレミリアと従者を見てもため息ひとつ漏らさない。両脇に控えたメイド服を着た二匹の人狼の視線を払うように美鈴が一步レミリアの前へと足を出し、レミリアは小さく一息吐いて周りで光る瞳に目を這わせた。

ポエナリ城十三世紀にワラキアの最初の統治者によつて設けられた要塞、十五世紀にヴラドⅡツエペシュが改造し、主要な要塞の一つとなる。十七世紀に廃墟となる。難攻不落の要塞と言われるドラクルⅡスカーレットの居城は薄暗く、灯りは背の高い燭台が太い蠟燭の先に灯された小さな火だけ。ひび割れた石床や壁を照らすのはそのほとんどが窓辺から差し込む月光だ。柔らかな月明かりが生み出す影の中、数多の色に輝く妖たちの目を見てレミリアは「綺麗ね」などと少し場違いな感想を抱き自重の笑みを浮かべた。

「来たのかレミリア」

「私は帰ると言っただけだわ」

投げかけられたつまらなそうに紡がれた父の言葉に、レミリアもまたくだらないと言うように吐き捨てた。全て手の内と言うように余裕な態度を崩さぬ吸血鬼の姿が腹立たしい。「ノーレッツジか」と呟くドラクルに、レミリアは微笑を浮かべて一步、美鈴の隣に足を運ぶ。「あら、分かっていたのではないの?」

「未来というのは幾つもの枝分かれしている。お前がノーレッツジを頼るのは一番可能性としては低かったが、プライドもなく魔法使いを頼るか」

「貴様を倒しフランを取り返すためならなんでも頼るわ、私がこの旅で覚えた最初のことは誰かを頼ること」

逃げ続けた東の果てで、頼れる時は誰かに頼った方がいいぞと用心棒が言ったから。誰かを頼る。その本当の意味をようやく旅でレミアは知れた。妹を救うため使用人たちを頼り裏切られたが、その時はただレミアは喚いていただけだ。ただ必死にお願いをしていただけで、レミアはなにも差し出していない。自分が信じていないのに、相手からだけ信じて欲しいなどムシのいい話。自分が信じなければそもそも信頼など得られない。今は信じられる者がいると美鈴に横に立つレミアにドラクルは目を落とし、「くだらない」と一蹴する。

「最近に覚えたのが誰かを頼ること？ 随分無意味な旅をしたらしい。従者とは道具だ。ただ使うだけであろうが」

「変わらず傲慢ね、だけどそれは私もよ。一人でないからこそ私は負けない」

「口だけは達者になったか、ノーレッジを頼り自ら墓場に来ただけだろう」

ドラクルの薄い笑い声に引かれるように、石の床を踏む鈍い音が影の中から伸びてくる。床に刻まれたヒビ割れの影からすら妖の手が伸びてきそうなほどに張られた緊張の糸にレミアが小さく息を飲む。揺らめく眼光の軌跡は美しいが、そのひとつひとつが驚異の塊、気を滲ませる美鈴に触発されるように、影の外へと一歩妖の足が伸びた。月明かりを踏む妖をレミアが睨んだとほとんど同時、

——ボンっ！

と、風船の弾けたような間の抜けた音を上げて妖の頭が弾け飛ぶ。「ふふふっ」と二の足を踏む妖たちの足を張り付けにするのは、少女の柔らかな笑い声。影の中七色の光線を引き瞬く紅い瞳。その輝きを目で追って、レミアはほんの少しだけ目尻を下げる。

「フラン」

「お姉様が帰って来たわ！ お姉様が帰って来た！ 私に会いに！」

窓辺に寄りかかるように影から這いずり出てくる笑顔のフランに

レミリアも薄い笑みを返し、そしてすぐに笑みを消す。ドラクルは緩く手を振って、従者に下がれと指示を出した。爛々と輝くフランの前に足を出せば、何人たりとも壊されるのみ。狂気を磨き抜かれたフランの前に美鈴は足を出そうとするもレミリアがそれを手で制した。

「……お嬢様」

「美鈴、フランは私の妹よ。貴女に頼るのはまだ後よ」

微笑むレミリアの顔を見つめ、美鈴も笑うと一歩下がる。フランの前にレミリアが、レミリアの前にフランが立つ。レミリアが半年思い描いてきた再会とは少し違ってしまったが、再会であることに違いない。瞼を落とし唇を小さく嚙んだ後、レミリアは顔を上げてフランを見つめた。追って来た顔を愛おしげに。

「ただいま、フラン。迎えに来たわ」

「おかえりなさいお姉様！ 本当に帰って来てくれた！ でも迎えに来たってなに？ どこかへ行くの？」

「ええ……、未来に、貴女を連れて」

首を傾げるフランに、レミリアは苦笑しながら一歩足を前に出した。

「フラン、これからはもうなにも壊さなくていいわ。私がそんな未来を描いてみせるから。だから」

ただ優しく手を取って欲しい。そう思い差し出すレミリアの手をただフランは得体の知れぬものを見るように眺め、少しの間唸ると尚も首を捻る。

「なんで？ 嬉しかったら壊すでしょう？ 悲しかったら壊すでしょう？ 素敵なものもそうでないものも壊せばもう変わらない。私だけのものだもの。だからお姉様も、私のものよね？ アハッ」

大事だから壊してしまおう。

いらぬものも壊してしまおう。

小さな手で握り潰してしまえば、万物はフランだけのもの。だから

レミリアさえもその手で包みたい。そうすればもう永遠にレミリアはフランだけのもの。全てが行き着く先は破壊。ただ純粋にそれを願うフランの姿にレミリアの手が力なく下がる。ただその手を小さく握って。

「そう、フラン……。それが貴女なのね。今の、いいえ、貴女の全て」
「？ 変なお姉様、私は私よ？ だから壊していいわよね！」

右手を前に伸ばすフランの姿に、諦めたようにレミリアは目を一度閉じた。全てはフランのため、そのために動き負けて始まった旅。フランに負けぬほど大事なものを拾い続けた長い旅路。どんな姿でもフランは大事な妹であることに変わりはない。しかし、そんな妹にも差し出せないものがある。

「フラン、私は壊れるわけにはいかないの。私を信じてくれる美鈴と満月のために、私のために、他でもない貴女のために」

「よく分からないけど、遊んでくれるのねお姉様！ 久し振りに思い切りッ！」

「ええそうね。貴女にとって壊すとは遊ぶことなのね……。遊びましょうフラン、初めての姉妹喧嘩と洒落込みましょうか！ 妹を叱るのも姉の役目ね！」

窓辺に置いたフランの手に力が籠る。小さな手の圧力に耐えられず、ヒビ割れ割れた壁と窓が夜の空気を吐き出した。風に靡く青い髪から漂うように立ち上るレミリアの紅い妖気に呼応して、フランの身から迸る妖気。部屋に充満し鬨ぎ合う紅と紅の空気に弾かれるように美鈴が大きく背後へ跳んだのを合図に、レミリアとフランは足を踏み込んだ。

ドッ！！！！

石の床が乱暴に凹み、二つの紅い閃光と化した吸血鬼が空間を押し潰す。空間が軋みズレたような音と衝撃に思わず美鈴は目を細めた。

間髪入れずに美鈴の背後で弾け飛ぶ壁。同じく打ち崩れた外壁は、渦巻く紅い空気を外へと吐き出し、部屋の中を駆け巡ろうとしていた砂埃を外へと追い出す。その空気に乗るようにガラガラと音を立てのしかかっていた瓦礫をレミリアは手で強く弾き、夜闇に瞬く七色の輝きを睨み付けた。

「お嬢様!!？」

美鈴の叫びに応えるように、レミリアは牙を光らせ衝突の衝撃に詰まっていた息を大きく吐き出した。ただのぶつかり合い、力と速度に任せた衝突は引き分け。満月の光と大量に啜った満月の血がレミリアに力を与えてくれる。動きを確かめるようにレミリアは軽く手を握っては開き、普段より動きの良い体にレミリアは笑い声を零す。

「やっぱり私は一人じゃない方が強いみたい……、行くわよフラン！もう終わりなんて言わないでしょ！ 私が貴女を満足させてあげる！」

「アハハッ！ やっぱりレミリアお姉様は最高だわ！」

一呼吸の間を置いて、フランの姿が掻き消える。目で追うのも難しいフランの動きにレミリアは口端を痙攣らせながらも笑みは崩さず、逃げそうになる体を無理矢理前へと押し出すように足を出した。床を砕き目の前に落ちてくるフランの笑顔を目前に、大きく振られるフランの手にレミリアは逆に肩の力を抜く。雪崩を前に緩やかに立つた美鈴のように。

「言葉では足りない。フラン、私の旅を教えてあげる」

力で力にぶつかっても、破壊の象徴たるフランの前では意味がない。故に鋭く闇さえ斬り裂くようなフランの腕をその力の向き先をより力を与えて向きを変える。トンツ、と軽い音に押されるようにフランの腕はレミリアの顔の横を通り抜け、フランの体が周囲を取り囲む妖の壁へと強引に突っ込んだ。

力任せに捻じ切れる妖たちの体をクッションに、フランは呆け降りかかる紅い液体に服を濡らし重力のまま床に落ちる。コツンと頭を床に打ち、それをスイツチにフランは再び笑顔を浮かべた。

「凄く凄く！ 面白いわお姉様！ もっと遊んで！」

妖を足蹴に蹴り潰しながら、鮮血を蹴るようにフランが空を走る。レミリアは細く息を吐き出して、命に伸びてくる手をただ反らし続ける。自分が弱いなどということとはハナからレミリアは知っている。だが、それでもやらねばならぬことがあることも知っている。だからすべきは引くことではない。降りかかる力に臆さず一步を差し出して、弾くでも壊すでもなく与えるのみ。レミリアを中心に跳ね回るフランに巻き込まれ、周囲の妖が巻き込まれ壊れる。朱く染まってゆく部屋の匂いに鼻を擦り、フランは身にこびりつく血を振り払うように何度も舞った。

「アツハツハ！ ほらお姉様いつまで踊っていられるの！」

「フラン楽しそうなのも良いけれど、もう少し周りを見たほうがよくってよ？」

私の用心棒のように。そう口には出さずに、レミリアは一步横へと足を出す。それを追うように駆けるフランの足が、地を濡らす血液に取られて滑り態勢が崩れた。開けたフランの腹部の隙に差し込むように、レミリアは拳を振り抜き弾く。空気を吐き出し壁に突っ込むフランからレミリアは目を離さず、隙を見せることもない。残心。決めた後も心は離さず。「そうよね？」と口は開かず目も向けず口角を上げるレミリアを見つめて、美鈴は小さく笑う。

「かはっ、お姉様、流石お姉様だわ！ 私だけのレミリアお姉様！」

「やっぱりお姉様はお姉様だった！」

「当たり前でしょう？ 私には貴女の姉だもの」

「分かってるわ！ 私は分かってた！ みんなお姉様をバカにしてたけど私だけは分かっていたの！ お姉様だけが私を見てくれる！ 周りの奴らはみんな臆病者だもの！ 誰も私の手を取ってくれない！ 誰も私を見てくれない！ でもお姉様だけは違うもの！」

「フラン貴女……」

フランだって壊すことが良いことだと心の底からは思っていない。それでもどうしても、嬉しい時、悲しい時、楽しい時、気持ちが高ぶるとつい手に取った大事なものを握ってしまう。そうすると何故かそれが壊れるのだ。

握ってしまうフランが悪いのか？
壊れるような脆いそれが悪いのか？

それは蛇が自分の尾を飲み込むかの如く終わりのない問答。その悩みの摩擦がいつもフランの心を削ってゆく。遠慮して、我慢して、気にしなくていいとドラクルが言ったから、だからフランは好きにすることにした。堂々巡りする疑問に答えを出そうとするフランを引き止めてくれるレミリアが居なくなってしまったから。

でも今は？

今はレミリアが帰って来た。目の前にいてくれる。

レミリアが壊れるのかどうなのか？

そんな疑問を置き去りに、握ってしまいたくて仕方がない。もう手放さないように力を込めて、それでもし壊れてしまったなら……。

「仕方ないよね？ それにそうだったら、お姉様は私のもの」

フランの右手が虚空に伸びる。

大事ななにかを掴むように。

右手にレミリアの“目”を浮かべて。

「お嬢様!!!」

「平気よ美鈴、下がっていて」

飛び出そうとする美鈴にレミリアは微笑み、フランに顔を戻すとな

にもせず立ったままレミリアは優しく笑顔を向けるのみ。その姿にフランの笑みの方が消える。誰もフランに“目”を掴まれれば焦り止めようと突っ込むのに、全てを受け入れるかのようにレミリアはなにもしない。少し躊躇するように手を握らないフランを眺め、レミリアはホッと息を吐いた。

「どうしたのフラン？　手が止まっているわ？　貴女の言った通り、私は貴女を拒まない。たったひとりの妹だもの。言ったでしょう？　貴女に与えられたものを返すと」

「お姉様……あつ」

向けられた姉の優しさに、思わずフランは手を握る。パキリと日々に入る“目”の動きに合わせて、レミリアの体にヒビが入った。身を裂かれるような痛みの中、レミリアは歯を食いしばりながらも、決して笑みは崩さない。

「ぐっ……!?？」

喉から外へ走る出そうとする叫び声をなんとか押し込め内に飲み込む。フランの“破壊”を受け入れる。無意味なことかもしれない。無謀と言われればそれまでだ。それでもこれしかレミリアには思いつかなかった。万物を握り潰すフランに、壊せぬものもあると教えるために。愛する妹と離れぬために。

（私はフランの姉だものッ！）

これぐらい耐えられなければ、レミリアは望む自分にはなれない。美鈴と満月とフランと、自分を信じてくれる者の想いを手放すことなく応えたい。そんな自分に、当主になると決めたから。

（私は誰も裏切らないッ！）

パキパキツ、と耳に心地いい破壊の音が鳴る度に、レミリアの体が

崩れてゆく。血を撒き散らしながらも身動きせず、詰まったような吐息と呻き声を零しながら、レミリアは手のひらに爪が食い込むほどに手に力を入れて拳を握る。自分を決して離さぬため。

「お姉様……私」

「手が、止まってる、わ、フラン。私は、貴女の姉よ。舐めるなッ!!!」

——ペキリッ。

握り潰された「目」に合わせ、レミリアの口から朱が零れ落ちる。ばたばたと床に垂れる朱玉と合わせて床に崩れるレミリアの体からは力が抜け、ただ静かに床に転がった。手と足が千切れて地に広がる血溜まりは終わりを示しており、吐息も漏れないレミリアの体を見下ろして、フランの膝も弱々しく折れた。

「……お姉様?」

返される言葉はなく、微笑みもない。動かないレミリアを穴が空くほどに見つめてもなにも変わらず、目を擦っても視界の先の景色は変わらない。静寂は静寂のまま、つまらなそうに椅子に座したままのドラクルの姿が分かっていた結果だと言っていた。それが運命と。

「お姉様? お姉様? ああ……そうなのねお姉様」

フランに壊せぬものはないと。

愛も姉も、結局フランは握り潰せてしまうのだと。

「アハッ、アハハッ!」

乾いた笑いが静寂を破る。転がった結果に笑う以外にできそうにない。どれだけ強大な想いも意志も、フランの小さな手に収まれば壊れるだけ。それを奪ってくれる者もいない。もしそんな者が居たのならどれだけいいか。壊れぬ者が居てくれたらどれだけいいか。で

もそんな者はいないのだと、つまらぬことが分かっただけ。

「きゃははっ！ そうなのね！ やっぱり私は」

「——楽しそうね、フラン」

笑い声がぴたりと止まる。ぴちゃりと血溜まりを叩き起き上がる青い髪。覆水を盆に返すように、血溜まりがレミリアのヒビを埋める。ヒビ割れてもレミリアの核は不思議と砕けず。

運ばれる命で運命と呼ぶ。

流されるそれを運べる者はただひとり。

流れて行くなと小さな手で掴めるのはひとりだけ。

「お姉様？」

「……なによフランその顔は。ひとりくらい……、壊れない奴がいてもいいじゃない？」

「レミリア、お前なにをした？」

急に飛んできた男の声に、レミリアはふらつきながらも立ち上がり振り向かずに手を振った。

「あら、お前が驚くの？ ひよっとして見えてなかったのかしら？」

「貴様……」

怒気を滲ませた吸血鬼の呟きにレミリアは笑い、呆けるフランをレミリアは見つめる。血を練り体の形は整えても、体はふらつき立っているのがやっつとでも、それでもフランの前に立ってみせる。ただ姉のプライドを芯に。折れないように突き立てて。

「フラン、私は貴女を否定しない。破壊が貴女の純粋さなら、私はそれも受け入れてみせる。私に大事なことを教えてくれた貴女だから。私もそれを貴女に返すわ」

「お姉様、私、私ッ！」

弱々しく歩いてくるレミリアにフランは手を伸ばし再び「目」を浮かべるも、手が石になってしまったかのように動かない。自分の手とレミリアを何度も見比べ口を歪ませるフランの体をレミリアは優しく抱き締めた。手で払えばすぐに剥がれてしまうようなレミリアを、どうにもフランは振り払えない。

「フラン、私は貴女の破壊を奪えない。でも、それでも一緒にいることはできる。弱い姉でごめんなさい。でも、私を姉でいさせてくれる？」

「そんなのッ！ お姉様はお姉様だものッ！ でも私！ 私ッ！」

「いいの、今はただ眠りなさい。こんなに月が綺麗だから、きつといい夢が見られるわ。明日からはきつとずっと一緒」

「うん、うん……お姉様」

レミリアの身から湧く紅い力に意識をゆだねるかのように力の抜けるフランを抱き締めながらレミリアの膝からも力が抜けた。なんとか保たせていた気が緩んでしまう。そんなレミリアに突き刺さるもう一つの紅い視線に、レミリアは小さく息を吐き出し顔を向ける。苦い顔をした吸血鬼の顔を見るために。ずっと見たかったその顔を。

「どうしたの？ 顔から余裕が消えたわよドラクルⅡスカーレット」

「……どんな手を使ったのかは知らないが、不愉快だレミリアⅡスカーレット。お前の顔を見ているだけで頭痛がするようだ」

「あら寝不足なんじゃない？ どんな手なんて、ただ私は諦めたくないただけよ。で？ どうするの？」

「どうするだと？ 決まっているだろう。邪魔者は消すのみ。お前は新たな当主になると言っていたな。なら当主として相手をしよう」

ドラクルが指を鳴らすのに合わせて妖たちの呼吸が合わさる。踏みならされた足に床に散らばった血溜まりが爆ぜ、無数の妖気の色が沸き立った。フランを抱えたままレミリアはぐるりと周りを見回してため息をひとつ。そうして小さく笑い、レミリアの言葉を待ち望んでいるだろう相手に待ち望んでいるだろう言葉を向けた。

「美鈴、頼らせて」

「はい、お嬢様」

踏み鳴らされる足音を、美鈴が一步で踏み潰す。足の形に凹みヒビ割れた床と揺れる城。レミリアの前に門が聳える。決して崩れぬ強固な門が、紅い髪大きく振って、白い布に覆われた腕を緩やかに広げた。そんな妖一匹を見つめ、城主の冷笑が差し向けられる。

「たったひとり従者を従え当主になるか？ レミリア、それが私とお前の差だ。それでいったいなにが成せる？ 一人が二人に増えたところだなにが変わる」

「二人なら、少なくとも私だけではできないことができる」

「なら三人ならなんでもできましょう」

「——は？」

妖たちの足音に、無音の足音が静かに混ざる。新たに挟み込まれた声色は、蠢く流れる読点を打つかのように、にじり寄ってくる足音を堰き止めた。実態のない無数の剣先に意識を貫かれ、呼吸の止まった妖の中で何体かの首が滑り落ちる。始まりはなく終わりもない。軌跡に乗る侍が、時を飛ばしたかのように景色を切った。使用人の洋服に身を包んだ面頬を付けた見慣れぬ男。鮮血のように紅い髪を血に濡れた白布で一纏めにした男は、肩に担いだ刀を鞘に納めるとレミリアの前に膝をつく。

「お待ちせしましたお嬢様。るーまにあまでと、約束は違えますまい。ですから置いていくなどと言わないで頂きたい。俺は、俺は貴女を主と決めました。今からでも、俺も貴女と歩みましょうぞ。貴女の未来に連れて行って下さい。その小さな背に」

「えつと……、えつ？ あ、貴方満月!?？」

「どこからどう見てもそうでしょうに」

「どこからどう見ても分からないわよ！ なによその髭は！」

首に掛けられたフランの十字架がなければ残された満月の面影など全くない。せいぜいより紅くなつた髪くらいのものだ。被っている黒い面頬の髭に口元を歪めながらぼかんと口を開けたレミリアだったが、満月と分かれば話は別。なにやらものすごく改まっている満月の面から覗く青い瞳を見つめて、レミリアは言いづらそうに唇を小さく舐める。

「嬉しいけど、でも貴方……、だって、死に掛けたのに……。今だって、死ぬかもしれないのよ？」

「俺は一度島原で死んだ。その命を拾ったのはお嬢様です。ならこの命、貴女のために使いますよ。俺は貴女の刃となろう。だから、どうか俺の手を取っていただきたい。俺も貴女の隣に。ですから」

首に掛けていた十字架を外し満月はレミリアに差し出す。報酬は要らず、この先も共にいるために。その十字架にレミリアは手を伸ばし受け取ると、そのまま満月の首に掛けた。

「それはもう貴方のものだわ満月。それは私の大事なもの。だから貴方が持つていて。これから先も私のそばで。これからも一緒に……。いてくれるの？」

レミリアの笑みに満月は深く頭を垂れた。そうして差し出されたレミリアの小さな手を取りその甲にほんの少し額をつける。

「はッ！ この命ある限り！ ここで死んでも本望でござりますが、お嬢様にその気はないのでございしよう？」

「ええ、勝つわよ満月！ 美鈴！ もう私に迷いはない！ 最高の従者が二人揃った！ もう私に足りないものはないわ！」

「ええお嬢様。お嬢様はそのまま妹様を抱いててあげて下さい。お二人は必ず私がお守り致します。塞がった左手の代わりは私が」

「右手の代わりは俺が致しましょうぞ」

立ち上がり並んだ従者たちの背を、ただ安心してレミリアは見つめる。レミリアの紅い二つの瞳を写し取ったかのように紅い髪を靡かせる従者たち。三人揃えばなんだってできると満月の言った通り、どんな脅威が立ち塞がっても、美鈴と満月なら大丈夫だとレミリアは知っているからこそ、ただ優しくフランを抱き締める。ドラクルに続く壁は美鈴と満月が砕いてくれる。

そんなたつた二人の従者を潰すため、無数の瞳が引き絞られた。多くの妖気に囲まれる中、しかし、美鈴と満月が気にするのはたったの二つ。いつの間にかドラクルの両脇から消えている影。無数の妖よりも頭一つ二つ抜きん出ている殺気を辿り、影から伸びてくる煌めく爪を美鈴と満月は上方へと反らす。

「ガツハツハ！ やるねえ、やるね！ 悪くないぜえ、久々のイキのいい獲物だぜ！ なあハティ！ もう辛抱堪らねえ！ 狩だツ！ 狩の時間だぜツ！」

「はしたないわスコル。そうやって血走った目を振り撒いて、ただの獣のようじゃあないですか。もう少し落ち着きを持って貰いたいものだわ」

「よく言うぜ！ テメエも内心涎だらだらだろう？」

牙を剥き出して喉を鳴らし笑うスコルと呼ばれた人狼の頭を、ハティと呼ばれた人狼が遠慮なしにぶつ叩く。鈍い音と共にスコルの足は僅かに石の床に埋まり、「キャンッ!?」と耳障りな声で大きく吠えた。

馬鹿みたいな二匹の人狼だが、満月と美鈴は笑うこともなく満月は肩を、美鈴は頬を一度撫ぜた。指に付いた赤い雫を二人とも手を振って払い落とし、目は変わらず二匹の人狼に向いたまま決して動かしはしない。

「オイオイそう見つめないでくれよう、濡れちまうぜガハハ！ テメエらの首を食い千切った時、どんな顔するか想像しただけで……くくくッ」

深い茶色の跳ねた髪を振り乱し、ナイフのように鋭い目を三日月のように細めて笑う女の人狼、スコル。口内に溢れる涎に際限はなく、口端から垂れそうになるそれを頻りに舌を伸ばし舐め取っている。爪を研ぐように人差し指と中指の爪を擦り合わせ、目からは数度火花が散った。

「申し訳ございませんこんなので、ですがここが貴方方の墓場であることには変わりなく、骨だけ残して後は美味しくいただきますので」
スコルを諫めながらも、言うことは同じ。眼鏡を掛けた茶髪の三つ編みを揺らした姿勢のいいもう一匹の女の人狼、ハティ。能面のように変化のない表情の中で、圧縮された殺気が光となって瞳の中で瞬いている。体の前で重ねられた両手からは目に見えて爪が伸び、表面は整えられていても闘争心は隠されていない。

良い子ちゃんぶっているハティが気に入らないとスコルはハティに向かい唾を吐き捨てるが、ハティは微動だにせずそれを頬に受け、取り出したハンカチで綺麗に拭いた。

「ツチー・つまんねえ女だな。まあいい、さあどう料理しようか？」

内もも？ 外もも？ スネ？ あばら？ どこから食って欲しい？

ウチらの動きも目で追えないようなトロイ奴らが従者なんて、レミリアお嬢も見る目ねえよなあッ！」

「……よく喋る、寝起きに聞く鳴き声ではないな。困ったものだ、なあ美鈴殿？ 俺たちは犬の餌なのだそう。骨までしゃぶるとは見かけによらず、いや見かけ通りか？ 儉約家らしいぞ」

「そのようで、犬に吠えられ目は覚めましたか満月さん？」

「あの二匹の人狼よりはな。すまないな美鈴殿、待たせてしまつて」

「ふふつ、大丈夫ですよ。まだ私たちの闘いは始まっていますし、私は、きつと来ると思っていましたよ」

「はあ？ テメエらなにくつちゃべつて——……」

怪訝な顔を浮かべたスコルの視界が、薄つすら朱に染まりスコルは目を瞬いた。手を伸ばした先の額は薄つすら切れ、赤い雫が垂れている。およそ一瞬の間を縫って交叉された美鈴の拳。伸ばされたスコルの爪の下を潜るように伸びた美鈴の拳の鋭さに、ようやく気付いたスコルの顔が破顔した。

それと同じく、首を傾げたハティのヘッドドレスがパサリツ、と音を立てて地に落ちる。綺麗に走った刃の跡に目を落とし、月光を反射するハティの眼鏡の奥でより殺気が圧縮される。爆発しそうなそれをハティは飲み込み、我慢せずにスコルは吠えた。

「ガッハッハ！ なんだおいッ！ 予想よりずっと野蛮で素敵だぜツ！ ウチはスコル！ 最上の獲物を追い続ける狩の僕！ さあ、ずつとお預けくらつてたんだ！ ウチを楽しませろよなあッ!!？」

「……私はハティと申します。獲物の先に行く神速の僕。ただ一言、おきたばり下さいませお三方」

叫ぶスコルと恭しくお辞儀をするハティ。二匹の人狼を前に満月と美鈴は肩を寄せ合い、刀と拳をそれぞれ構える。美鈴をちらりと満

月が見やれば、お先にとウインクされるので、満月は遠慮なく胸の内に燻る熱を吐き出した。

「その意気や良しッ！ 命を賭けるは今ッ！ 待ち望んだ戦場を彩つてくりやれよ人狼殿！ 我が名は十五夜満月ッ！ 東の極よりやつて来たレミリアお嬢様の従者が一人!!？ さあ俺に勝利を寄越したもうッ!!？」

「ふふっ、久々に気が高ぶるッ！ 我が名は紅美鈴ッ!!？私の背の先へは何人をも通さぬ門の妖ッ！ 大陸より背を追ったレミリアお嬢様の従者が一人!!？ 覚悟はいいか？ 門の下で朽ちる覚悟はッ!!？」

二色の青い瞳が輝き、二色の赤い髪が隣り合う。向かい合うは二匹の獣。東の流儀に身を染めた、武侠の従者たちがケンを抜く。狩で磨き抜かれた犀利な爪と、武に磨き抜かれた破邪のケンが光と影を同時に裂く。

レミリアちゃんと二人の従者

風が見えているようであった。

畝る空気の流れが月明かりに煌めく爪によって裂かれる様はスクラッチアートのようである。獣の唸り声だけが辺りに響き、月明かりと影の中を行き来する眼光と爪の軌跡を漠然と視界に捉えながら、深く長く呼吸を繰り返し満月と美鈴はお互いを背に緩く拳を握り刀の柄を握る。

人狼。ウエアウルフ。紀元前より書物に似た存在が記述される程歴史が古い怪物である。なにより、ヨーロッパ、中央アジアと、狼を祖と仰ぐ狼祖伝説は世界中の至るところで存在し、日本でも狼祖伝説が存在している程だ。故に人が狼に変身すると言う行為は、怪物と化すと言うよりも、神聖なものであると見られることも少なくない。だが、ことヨーロッパに限っては、神の天罰によって狼に変えられたという話が残されているように、獣人という存在は恐怖や禁忌の対象となり、十四世紀から十七世紀の魔女狩りにおいて多くの獣人が殲滅の対象となった。

そんな神聖さと恐怖が同居している人狼の中でも、ドラクルの伴う女人狼、スコルとハティは別格と言えた。他の周りの妖は問題ではない。問題はたったの二匹である。目では追いきれない速度で玉座の間を駆け巡る人狼二匹に満月は舌を打ちながらも肘で軽く美鈴の背を叩く。

本気のレミリアの動きと同じ、視覚で捉えられなければ、勘で対応するしかない。「勘」とは、漠然と五感が掴む情報の集積によって生まれる第六感。誰もが持ち合わせるものであるが、第六感を作り出すものは人によって大きく異なる。美鈴は「気」を追うことで、満月は間を読むことで第六感を作り出す。

それでも尚――、

チリツ……、と闇夜に小さな火花が散り、満月と美鈴の肩口から細

かな血が宙に舞った。振られた刀と拳は空気を風いだようになるの感触もなく、隙を縫うように走る爪が肉を裂く。

「よく合わせるなあッ！ ガハハッ！ 悪くないぜえ」

爪先に垂れる朱玉を舐め取りながら笑うスコルの顔に満月も美鈴も目は向けない。そんな余裕はなかった。何かを意識を集中するよりも、絶えず肌で空気を感じていた方が対応できる。とは言え、それでも一歩出遅れる。

「さあいつまで耐えられる？ あんまり早く死んでくれるなッ！ 萎えちまうからなあ!!？」

「口より手を動かさないスコル」

「へいへいハテイ、テメエもな。ぼうつとしてると全部ウチがいただくぜッ！」

口は達者でも油断はなく、狩に身を浸す狼の爪が門を無理矢理抉じ開けるが如く隙間に爪先を押し込んだ。どれだけ鋭かろうとこの世の万物には「流れ」というものがある。清流も激流も、同じ流れに取り込まれば流されるだけ。五つの白線を反らすように緩やかに差し出された美鈴の手が狼の爪に添えられるが、

「痛う……!!？」

激流の中で佇む巨岩のように爪は流れを割り美鈴の左腕に五つの赤い線を引いた。筋繊維の避ける音に耳を傾け笑うスコルの顔を睨みつけ、腕の上を這う爪を筋肉の締め付けによって押し留める。一瞬静止した人狼の姿は臃げではなくなり、世界に固定されたように姿を現したスコルを目に、美鈴は足を踏み込んだ。

ペキリツと、美鈴の二つの足の形に凹みヒビの入った石の床。気を爆薬に打ち込まれた足は杭と同じ、局地地震の揺れに耐えられず遠巻きで多くの妖が転がるのを見送りながら、美鈴の返しの拳が人狼の腹部に深く沈む。

ぬるり。

「なッ!!？」

滑るように拳の勢いから逃れる人狼の体。美鈴の驚愕の声に笑い声を合わせて、人狼の爪が美鈴の額を薄く裂いた。飛び散る血潮を拭うことなく、跳び去るスコルを見つめながら異様な感触だった人狼の体に見舞った拳を美鈴は軽く振る。ただ避けられたのではない。まるで美鈴の動きに呼応するように完璧に合わせられた動き。それも、「気」の揺らぎの一切ない完璧な。

「激流だろうが清流だろうが、どんなものもウチを捉えることはできない。ハテイもな」

苦笑するスコルに美鈴は僅かに背後へと目を向けた。変わらず佇む満月の背。呼吸の乱れも気の乱れも、一切ないが血に塗れた満月に、小さく美鈴は口端を引き結ぶ。

「……満月さん？」

「美鈴殿の震脚に合わせたつもりだったのだが……、掴めなんだ……」

揺れに耐えることなく身を任せ、ブレた満月の隙に伸びたハテイの爪に満月も刃を合わせたはずだった。地の揺れに乗り体のブレを逆に大きく、揺れ動く剣先は無数に増え、飛び込む獣を串刺しにしたように満月には見えたが、切り裂かれたのは満月の体。まるで幻を斬ったような感覚のなさに、満月は内心で大きく舌を鳴らす。

「思ったより遅いのですね人間」

「言ってくれるッ」

月光を反射する眼鏡を睨み満月は軽く刀の背で肩を叩く。始まりと終わりのない軌跡でも、己より速いものに触れることは叶わない。住んでいる世界が違うと言わんばかりの速さの違いに、満月は舌を巻いた。

「……満月さん、面倒ですよアレ」

「同じく、あの眼鏡殿、あの感触はアレに近いな」

拳と刃を避ける人狼の感触は、膂力によって起こるものではない。身で感じる空気の畝りが普通とは異なる。速さ力が異なろうと、世界に肉体を置いている限り、身を浸している空気に嘘はつけない。で、あるならば、美鈴の拳と満月の刃を避けた要素は別のもの。美鈴と満

月は目を細め、互いに前に立つ人狼を見つめた。

「影ですね」「光だな」

二つの答えに返される笑みは二つ。

常に太陽を追いかけて、日食はこの狼が太陽を捕らえた為に生じると考えられたと北欧神話で伝えられる狼、スコル。

絶えず月を追いかけて、月食はこの狼が月を捕らえたために起こると考えられたと北欧神話で伝えられる狼、ハティ。

太陽を追い続ける限り影は消えず、この世にいる限りどんなものにも影がある。速度も大きさも関係なく共に同じ動きをする影は捉えられず。

月を追いかける限り陽の光は追いつけない。時の中にいるために生物はこの世に存在できる。故にハティの速度は最も光に近く、目に映る姿は虚像と同じ。目に映る姿の数歩先に眼鏡の人狼は立っている。

『影になる程度の能力』と『先を行く程度の能力』。文字に起こせばこうであろう。太陽を追う者と月を追う者。二対で一体の狼。満月と美鈴は小さく互いに目配せし、そしてほんの少し笑みを零した。

「美鈴殿、影を捉えられるかな?」

「満月さんこそ、光を掴めるんですか?」

「……満月? 美鈴?」

弱音を吐いているような従者たちに心配そうなレミアの声が掛けられるが、二人の従者が主に返すは柔らかな笑み。「試してみよう」と口には出さず、満月は刀を、美鈴は拳を握り直す。四つの笑みが向かい合い、四つの音の違う足音が静かに響く。

「ウチを殴れるか門の妖ッ!」

「それが私の役目ですッ!」

突き出される狼の爪に細く息を吐き出して、美鈴はそのまま突っ込

んだ。構えもなく前に出る美鈴に僅かにスコルは目を見開き、美鈴の腹部に深くめり込んだ爪に舌を打つ。

「捉えた！」

「んだとツ!?？」

引こうとした手が美鈴の腹から引き抜けない。爪が肉を破り赤い水音を立てる音だけが鳴り、美鈴は口端から血を垂らしたままゆつくり差し伸ばした拳をそのまま人狼の胸に当てた。

「……この体勢で避けられますか？」

踏み締められた足のエネルギーをそのまま体を捻り腕へと伝え押し出す。拳の動きに追従し動く人狼の肉の感触をそのまま巻き込み美鈴は抉ろうとするが、

「甘いんだよ」

そのまま千切れずスコルの体は溶けるように掻き混ざる。拳を支点に回るスコルの牙が美鈴の右腕を削ってゆく。カリツつと、骨を噛むような音に美鈴は奥歯を噛みながらそのまま放つ腕を止めず、拳を打ち終わった衝撃で無理矢理人狼の牙を弾く。右手から滴る美鈴の鮮血を目の端に捉えながら、満月は差し出した足に合わせて刀を薙いだ。

頭で描く軌跡の数歩先に置くように、振り切られた刃が硬い音を打ち鳴らす。その感触に満月は笑みを浮かべることなく、宙に突如浮かび上がった割れた眼鏡に眉を顰めた。

「私の世界にようやく指先を漬けた風情で触れられると思われるのは不愉快です」

手探りに差し出された手如きに触られる人狼ではない。後を追って来たものが隣に並んだだけであり、そこはようやくハティの普段と同じ場に立った人と人狼のどちらが先に一步を踏むか子供にだつてすぐに分かる。一撃を外せば返しの一撃は避けられず、満月の目の前で瞬いた光が満月の額を貫いた。

「満月!?？」 美鈴!?？」

砕け散った黒い面頬がパラパラと地を叩く音にレミリアの悲鳴が混じる。その悲痛な声を嘲笑うように叩く男の声。

「レミリア、お前の従者^{どうぐ}では勝てないぞ」

未来を覗く吸血鬼の一言に、レミリアのフランを抱く手について力が入った。右腕を抑える美鈴と額を抑える満月。未だに命の灯火は消えず、ただ二人の荒くなつた吐息と身から溢れる赤い血が、その灯火を萎ませてゆく。そんな従者二人を見上げ、レミリアの顔は固まつた。

傷も血も気にせず、二色の青い瞳にブレはない。目の前に居座り続ける人狼から目を離さず、戦いの色は衰えない。

「勝てない」などと言われようと、そんな言葉はレミリアの二人の従者の耳には届いていない。ただ今に没頭する二人の従者に、レミリアは溢れそうになる弱い言葉を強引に胸の内へと飲み込んだ。従者が諦めるよりも早く主が諦めるわけにはいかない。

だから引き金を引くのは別の者。

獲物を追い込む二匹の人狼。

「ガツハツハ！ まだやるかよ！ 悪くねえ、だがもつと必死になつてほしいぜ？ それこそ獣みたいに！」

「面倒ですね、先にレミリア様を殺りましょうか」

「おっおく、そうすりや必死になるか？」

楽しげに笑う人狼の声を引き金となつて美鈴と満月の顔から苦痛の表情が滑り落ちた。美鈴も満月も傷を抑えていた手を力なく落とし、数歩足を下げるとお互いの背を着ける。

「……面を破つたな、破りおつた……。よくも破つたな……。よく破つてくれたツ」

「……誓いとは己が己に突き立てるもの。それを引き抜くのもまた自分ですか……。私の前で……。また門に手を掛けたな……」

待ち望んだ戦場がここにある。

待ち望んだ脅威が門を開けにやってくる。

地獄のような日々の中、それでも残されたのは修羅である。

「どれだけ日々を重ねても、闘争心は冷めてはくれない。どこにいようと結局身を置く場所は戦場だけ。逃げることも、守ることも、形を変えても残されたものは拳と刀。行き先を変えても、それは手放せないものだから。」

「……とっておきを使うかよ美鈴殿」

「……生を拾うのですか満月さん」

「どうにも本質は変えられない。拳と刀を握るしかない。それしか、それを手放してしまつたら、己が己ではなくなつてしまう。島原と山門の軌跡をなぞるように、満月と美鈴の構えが変わる。」

「逃げるのも守るのも、これまでの自分を飲み込んで、結局握るのはケンだけだ。」

「望む私でお嬢様を守れぬのなら、これまでの私でお嬢様を守る」

「逃げることに飽いたなら、元の道へ引き返すしかないであろうよ」

「追いつ返すのも面倒だ。封じた拳を今握ろうッ！ お嬢様に届く前に、お前をただ殴り殺しお嬢様を守るッ！」

「追う者がいなければ逃げる必要もない。だから俺に勝利を寄越せッ！
もう俺に敗北は必要ないッ！ だからただ勝利を俺に寄越せッ！」

ギラつく青い瞳に人狼の唸り声が返された。激しい流れも緩やかな流れも踏み潰すように踏み出された美鈴の一步に、僅かにスコルの足が下がり、自分の足を見下ろして人狼は忌々しそうに牙を剥く。

「テメエ……、なんだそりゃあ、さつきと百八十度感じが変わった……。その拳で殴る気か？」

「心配も、傲りも、油断も、必要ない。もつと必死になれ人狼。私に二の撃は要らず」

地に根を張ったような真逆の構え。拳銃を差し向けられたような緊張感に、思わずスコルは生唾を飲む。満身創痍に見える門の妖から滲む妖力とも魔力とも異なる修練によつて質を上げる“気”の輝きに、突つ込む事をついスコルは戸惑つてしまう。

『二の打ち要らず、一つあれば事足りる』

そう言わしめた大陸の武術家、李書文。中国拳法の中でも屈指の破壊力を誇ると言われた八極拳の門派の一つ李氏八極拳の創始者である。とは言え八極拳が表舞台に出て来たのは十八世紀の話。だが、それ以前に八極拳の源流となつたと言われる拳がある。

巴子拳。

五指の第二関節を折り曲げて握る中空の手形。差し向けられた独特の形の拳から目を反らさず、スコルはゆっくり姿勢を倒した。美鈴の言葉に嘘はないと感覚で察する。たつた一撃、それだけあれば事足りると美鈴の瞳が言っている。強く引かれてゆく緊張の糸に、スコルを追い越し無数の影が美鈴に迫った。高速で動く人狼が立ち止まつたのなら、他の妖の道が開ける。

雪崩れ込むように走り出した妖たちに、スコルは舌を打ちつつ影に紛れた。それでも美鈴のやる事は変わらない。ただ迫る敵の門を撃ち開くのみ。口から余分な力を細く吐き出しながら、身を焦がすような“気”だけに身を浸した。

——私は親のようにはなれないでしょう——

竜生九子。

竜が生んだ九人の子。場所を変え手を変えそれぞれの子がどれだけ功績を打ちたてようと、どれだけ努力を続けようと竜には至れず。力を求めた結果、戦場で倒れた。

師に助けられ、技を学び、それでも尚力を求めて竜を目指し、大事なものを全て失った。

竜を目指し学んだ拳を二度と振るうまいと美鈴は誓ったが、

(私が竜を目指す事はもう二度とない。私に居場所をくれた人がいる。だから私は私になろう)

これまでを飲み込み、自分になる。

そのために美鈴は拳を握る。

「これが私の全てツ!!!」

美鈴は美鈴のまま拳を放つ。間に合わなかったあの時とは違う。今美鈴の背には、大事な者が居てくれる。迫る脅威が居てくれる。美鈴がいればきつと大丈夫だと、背にいる者の顔が決して歪む事がないように。

踏み落とされた足が地を砕く。突き出された拳が空を破る。微を辿るような細密な動き。針の穴を通すように、空間に目掛けて点を穿つ。吐き出されるのは“気”の息吹。陰陽混じる太極拳の気の流れを一点に纏めて放たれた拳は、脅威の壁に穴を開けた。

——ドツン!!!!

気の震えは空を揺らし、空間ごと轢き潰す。その一撃竜の咆哮が如

し。世界に打ち込まれた頸の衝撃は、影を生まずに万物を貫く。細胞が震え崩れる妖たちの煙を吐いた吐息で美鈴は打ち消し、床に崩れる人狼を見下ろした。

（息がツ……できねえ!?）

ごぼりと血と唾液の混じった息を吐き出し、立とうと力を入れてもスコルの体は言うこと聞かず、定まらない視界の中でもこつりと落とされた足音に、慌てて人狼は身を引いた。それでも体は上手く動かずただ石の床の上を転がるだけ。

「……久し振りに拳を抜いたからか、上手くいかないんですね。一人残った。でもそれは、今からまた磨きましよう。お嬢様のための拳を」

「カハツ……!? テ、メエ……、デタラメな拳を……ハテイ！ こつちから先に殺れ！ おいハテイ！」

「黙れスコルツ！ 自分でなんとかしろッ！ そんな余裕はないんだよッ！ ……貴様ツ!!？」

一歩も足を動かさず、脂汗に身を包むハテイを歪んだ視界にスコルは捉え目を瞬き強く擦る。ハテイの相對している影が増えている。揺らめく紅い髪が一つ二つ三つ。数の増えた人間の男、耳を叩く心臓の鼓動のリズムから、一人であるはずなのに一人ではない。実態を持った虚像たちに、ハテイの歩みが遂に止まった。

「貴様ツ、それはなんだ!?？」

「口が悪くなったな人狼殿、貴殿の世界には行けぬから、俺の世界に来て貰っただけのこと。貴殿のような感覚が鋭敏な相手ほど俺の世界は特別だろう？」

呼吸で、動きで、視線で、剣気の揺らめきで、描き出される軌跡を勝手に相手が虚像として拾う。感覚の鈍い老人などにはまるで効果がない歩法だが、相手が達人や怪物であればあるほど囚われる軌跡の世界。始まりがなく終わりもない。永遠に蠢く軌跡の道。一度手を突っ込めば抜け出す事は難しく、それを決められる者はたった一人の男だけ。

「負けはもういい。だから俺に勝ちをくれ。手からすり抜けるものは

もう知らない。俺は主を決めたから、主に俺は勝利を与える。勝てない？ 知るか。まだ見ぬ未来などなぜ信じられる。俺は勝つから、お嬢様、俺は勝ちますから。俺とお嬢様と美鈴殿なら。だから勝てると言ってくれ、そしたら俺は『今』勝ちますから」

「……勝つわ満月、貴方なら。だって私の最高の……」

「それだけ聞ければ、俺は何処へでも行けますともツ！ 貴方と共にツ!!？」

一步を踏み出す人間に、人狼の深い笑みが向けられる。

「馬鹿が人間ツ！ 私を斬るのは貴様だろうツ！ それが本物の貴様だツ！ それさえ分かればツ!!？」

腕を振り被ったハティの体を銀の閃光がずるりと舐めた。人狼の一步よりなお速く、人狼の腕が転がり、足が一本踏み出したまま残された。地に転がる人狼に突き付けられる無数の刃に、ハティの目が点となる。青空のような青い瞳と、月光に輝く紅い髪が揺れる姿は、人の様で人ではない。

「貴様……人間か？」

「なんだっていい、俺はレミリアお嬢様の従者十五夜満月。それだけ分かっていれば他のはいらない」

「……お前たち、なにを寝ている。さっさと立て」

牙を擦り合わせる人狼二匹に突き刺さる夜の王の声。スコルもハティも肩を跳ねさせ立ち上がろうとするが、言うこと聞かない体は無様に石の床を舐めるのみ。再度口にされる「立て」と言う言葉の無力さに、レミリアは目を引き絞る。

「見れば分かるでしょうドラクル＝スカーレット。貴方の従者の負けよ」

「それはないんだよ。私には勝ち以外見えていない。負けることなどあり得ない」

「随分都合のいいことしか見えていないのね。お前の目は節穴だ」

「……レミリア＝スカーレット。貴様か？ 貴様がなにかしているのか？ それともその異国の従者か……不愉快だ」

椅子を立ったドラクルに、周りの空気が薄ら寒く凍りつく。身から

溢れる鮮血のような紅い妖気に、全身を地に染められたかのような自分を幻視した。それが未来の姿と言うような空気から逃げるように、たたらを踏んでいた妖たちが一斉に足を出す。その石の床を擦る合唱に、レミリアの前で満月と美鈴は再び肩を寄せた。

「お嬢様お下がり。まだ壁は残っているようです」

「さて、どれだけ斬ればいいのかやら、選り取り見取りでございませうな」

「うるさい奴らだ。お前たち、敵はたったの三匹だぞ、さっさと壊せ」「はい」

重苦しい場の空気を、陽気な少女の声が撃ち壊す。七色の宝石をぶら下げた骨張った翼を揺らめかせ、レミリアの腕の中で小さな手が伸びる。差し伸ばされた破壊の使徒の手が伸ばされるのを目に収め、妖たちの壁は立ち止まるが、握られる小さな手に合わせて壁の一面が握り潰された。

弾ける肉と骨と血飛沫にレミリアたち三人の目は点になり、間の抜けた姉たちの顔を見回してフランは大きく笑い声を転がし続ける。

「ちよ、ちよつとフラン？」

「お姉様！ 今度は一緒に遊びましょ！ 寝ていたら勿体無いわ！ 凄い目覚ましもあつたことだし！」

あつ。と口を開けて美鈴は自分の拳へと目を落とし困ったように頭を掻いた。世界を揺さぶった修羅の拳は、破壊の眠り姫の夢の世界の門まで開け放ってしまったらしい。力なく笑う美鈴にレミリアも小さく笑いたため息を吐くと、フランと共に立ち上がる。

「仕方ないわね……、フランは夜更かししたいのね？」

「ええお姉様！ 今日最高の夜になるわ！」

「フランドール……、貴様ッ！」

「娘に嫌われたな吸血鬼殿、父親なんてそんなものだろうさ」

ギョロリとドラクルに紅い瞳を向けられて、満月はおつと両手を上げた。高笑うフランの声が癩に触るとドラクルは妖気をより深く滲ませ、身を震わせてフランはレミリアの背へと隠れた。

「レミリアに続きフランドールまで……、私の血が薄いのか、役に立た

ない。結局、信じられるのは己だけか」

「あら、ようやく重い腰を上げるのね。まだ勝てると言うつもり？」
「当たり前だ。私は誰より私の勝利を疑わない。誰より私は私のことを信じている。見えるぞ私の前に転がる貴様らが。未来を今に持つて来よう」

石の床を踏む革の靴の音色に、レミリアの目が細められる。背にいるフラン、両脇に立つ美鈴と満月の顔を見回して、レミリアはひとり小さく笑った。

「フラン、後ろのは任せるわ、好きにきなさい。アイツとは私がケリをつける。私には二人の友がいるから心配なんて要らないわ。この旅を今宵こそ終わらせましょう。今宵は満月!!? 月の下では嘘もつけない! 貴様の全力を私の全力で叩き潰すツ!!? 私は私の未来を手に入れるツ!」

今宵が夜の王を決める夜。吸血鬼と吸血鬼。満天の夜空に浮かぶ丸い月の下で、力が足りない、全力を出せない、そんな言葉を形作る言い訳など存在しない。空気を満たす血に染まった紅い月がレミリアの旅路の終止符のように瞬いた。永遠に忘れられぬ夜が幕を開く。

今宵は満月。

レミリアちゃんとレミリアⅡスカーレット

必ず戻る。

そうレミリアが誓い約半年。

極東修羅の国、

五千年の歴史を刻む国、

絹の長道、

灼熱と極寒を繰り返す砂の大海、

世界最大の山脈、

王たちの霊廟、

屋敷に引き籠もっていたのでは見ることは叶わぬ世界の色彩。

極東の侍と中華の拳士。

見慣れぬ風貌の従者を二人、初めてできた従者を二人、異国の益荒男たちますらおを伴なって渡り歩いた世界の旅路は、レミリアの価値観を大きく変えた。

絶対的な父親が全てを握る夜国の中で、最愛の妹の為にただひとり拳を握るも大敗を喫した日は遙か昔、信頼と友情と忠義と信念。ゆっくりと積み上がっていった大切なものが、今や手放せない形となってレミリアの傍に立ち背中を押す。勝利と敗北。たつた二つに分かれている道先のどちらに向かうことになるうとも、その軌跡こそが大事であるともうレミリアは知ったから、ただの一介の小娘から夜の主へ、刀ケンと拳ケンを右手と左手に、持ち主が振るわなければどちらも何処へ向かう事もない。

だからこそ、レミリアは誰より速く一步を踏み出す。

自分たちの道先を己自身で決めるため、決められた未来を踏み躪るために、勝利に向けての一步をレミリアは――。

「ッ――ッ？」

顔に走った衝撃に、レミリアの顔が大きく仰け反る。視界の中に舞う朱雫の欠片と、息の詰まる変形した鼻を抑えながらレミリアは強く目を見開いた。踏み出そうとする未来を否定するように、一步先に手を差し向けるドラクルⅡスカーレットの一撃がレミリアの足を縫い

止める。

「お嬢様！」

感覚で機微を拾えても反応する事は叶わず。レミリアよりも幾数年月長い時を生きる大人の吸血鬼。紡がれる二つの叫びに支えられるように、後ろに吹っ飛びそうになる体を足を踏ん張る事でレミリアは押し留めた。忌々しげに目を細めるドラクルの顔を見上げ、レミリアはひん曲がった鼻柱を摘むと、痛々しい音を鳴らし鼻の形を正す。

「……留まるか」

「御不満かしら？」

腕を組み夜空に舞う蛍のように宙を滑るドラクルに微笑みを向け、レミリアは服の汚れを払った。

未来を見る。

ルーマニアを統べる吸血鬼が絶対たる所以。不敵な笑みを向けながらも、レミリアは背筋に冷たい汗を流す。やることなす事先に居座るドラクルに、矛を向けたところでその先には既に居らず、見ている世界がそもそも異なる。先が分からず我武者羅にレミリアが動くことも、ドラクルは見えている先を世界に落とし込むように動けばよいだけ。

目指す終着点が分かっているということがどれだけ余裕を生むことか。

レミリアの歩んだ世界の大路も、ルーマニアという帰るべき終着点に明確にあったからこそ、心折れそうになった時に助けになったところが少なからずある。ルーマニアの支配者に戦いを挑むということがどういふことか、レミリアだって分かってはいた。だが、出だしの一歩さえ潰される始末に、笑いながらも恐怖を覚える。出口分からぬ迷宮だと知っていながらも足を踏み出すことと同じ。

だからこそレミリアは冷や汗を垂らし、

そして、だからこそドラクルは眉間に皺を刻む。

レミリアが一步を踏み出すことも、その結果どう動くのか、異国の従者はどう動くか、全て分かっていた上で、最も効率的にレミリアの動きを潰すため出鼻を挫いた。そこまでは思い通り。目に映る先と

今が重なった瞬間、しかしそれが直後ズレとなつて視界を割る。

頭が千切れるか、それとも壁に突き刺さるか、従者が支え三人仲良く地に転がるか。分岐する道先の何処であろうと転がっていた小さな吸血鬼が、膝さえ折らずに立っている。悔しさに歪めるはずの顔は笑みを浮かべ、あつたはずの未来を吹き消すように立つ小さな吸血鬼が理解の外に爪先を着けた。

「貴様は、いつも私の期待を裏切つてくれる」

未来を見るドラクルと、同じく強大であつた吸血鬼の妻との間に生まれたレミアが、国を大きくする種となるはずだつた未来を容易に打ち破つた事に始まり、吸血鬼らしからぬ優しさと、なんの特別な力も見せない小娘が、再び未来を少しづつ削り出す。何も無いはずだつた。それを見たはずなのに、まるで一人だけ別の未来に生きているようにレミアの動きがほんの僅かにズレてゆく。既知は未知に。未来など分らないと、誰にとつても普通のドラクルには普通ではなく、特別だつたドラクルを普通に貶める小さな少女が何者であるのかさえ分からなくなる。

百年近くも側に居たのに、血の繋がっているにも関わらず、これまでドラクルが見てきたものを否定して立つレミアの姿が、未来とも過去とも結びつかない。

「貴様はなんだレミアアスカーレット」

フランに壊されるはずだつた未来を壊し、負けるはずだつた従者を奮い立たせる。未来の分岐点を背負つたような少女は、鋭い犬歯を覗かせる吸血鬼の言葉をゆつくりと飲み込みながら、飲み込み終えると小さな吐息を吐き出した。

冷酷で強大な吸血鬼には至れず、思慮深く聡明な賢者というわけでもない。我儘で無鉄砲で愚者で優しく勇敢な妖しい小さな吸血鬼らしからぬ吸血鬼。未来を決める運命の少女。それ即ち――。

「レミアアスカーレットよ、他にある？」

両手を枝垂れさせ、壊れやすいなにかを大切に包むように肘を曲げ胸の前に掲げるレミアの柔らかな姿形に、二人の従者の口元が緩む。怖さでも、強さでも、冷酷さでもなく、妖しい優しさを世界に滲

ませる吸血鬼の微笑みを見つめ、ドラクルの中で何かが噛み合った。

同じ姓を持つとも、その在り方は対極に位置し、分かり合えぬならそれは敵であることに変わりない。道端の小石から名のある宿敵へ、少女は確かにルーマニアの夜王の道端に足を落とした。

踏み潰せぬのなら腕を伸ばすしか残されていない。赤い妖気を立ち上らせ、瞬く赤い眼光が引き絞られる中、滑らかに空を滑っていた吸血鬼の足が鋭く小さな夜の王の前に落とされたと同時に二つのケンがそれを制す。

「邪魔をするか異国の従者^{どうぐ}」

「二度はない。俺はレミリアお嬢様の刃でありますれば、誰であろうがただ斬るのみ」

「例えお嬢様の父君であろうとも、私の背に座すモノに手を触れる事はなりませんよ。まあつまり——」

「死ね」

短な言葉が全て。

夜明け前の空のような青い髪を靡かせる少女の紅い双眸を写し取ったような紅が二人。

目配せすらせずに二人の従者が共に動く。己がすべき事は各々既に理解していた。

主に勝利を。

そのために目の前の敵を打ち払う。だがしかし、それが容易にいかないことも既に重々承知であった。『未来を見る』、ドラクルのその絶対的な芯とも言えるものを動かさぬ事には勝利はない。持久戦になればどちらが負けるかは自明の理。レミリアに何かがあると漠然と満月も美鈴もドラクルも分かっつていようとも、レミリア自身にさえその正体が分からぬ中で、それに頼る事はできない。なればこそ、ドラクルの力を見破ることが勝利への第一歩。その一歩を踏むのはレミリアではなく従者の役目。

振られる刃と拳が振り切られるより速く身を滑らせ下がる吸血鬼

から目は離さず、満月と美鈴はレミリアの前で肩を寄せる。

「さて、どう見る美鈴殿、未来を覗くそんな知人が俺にもいたが、それを撃ち破ろうなどと考えた事はないでな」

「我々武人は相手の呼吸や僅かな動作から経験則で動きの先を読めるようにはなりますが、実際に未来を見るわけではないですしね。困りました」

「とは言え禅問答のように座してれば答えを拾えるわけでもない。どこまで未来が見えるのか分からぬが、不足の事態というのを起こしてみるかね？」

「痛い役目は」

「俺が引き受けようとも」

「満月、美鈴……」

目配せし笑う満月と美鈴の背に掛かる小さな少女の声。僅かに動いた二色の青い瞳が紅い瞳と重なり合い、レミリアはぎゅっと手を握ると僅かに笑った。その微笑に笑みを合わせて満月と美鈴はふっと体の力を抜く。と、同時に極東の侍の身が増える。

二つ三つ四つ五つと揺れる紅い髪。眼に映る実体を持つ虚像の群れが一樣に刃を振りかざしルーマニアの夜王に殺到した。速さで追いつけぬのなら、数で進路を塞ぐのみ。軌跡の波がただ一人に向けて渦を巻き、刃の雪崩が目前に迫ろうと腕を組んだまま手を出さず、紙一重で無数の刃の中を踊るドラクルに満月は小さく舌を打つ。

「曲芸か極東の従者よ、見ている分には愉快だ」

「その笑み引き千切ってくれるッ！」

「できるものならな」

軽く零された言葉と共に、緩く振られたドラクルの右拳が満月の側頭部を横薙ぎに叩く。無数の虚像の足が止まり消える中、切れた眉間から血を噴き満月は小さく頭を振った。正解など見えているとつまらなそうに首を擡げる吸血鬼に歯を食い縛り、より一步を出した満月の身が、本人の予想以上に前に飛ぶ。背に大きな痛みを貼り付けながら。

満月の意識に関係なく、満月の背に隠れるように動いた美鈴の一撃

がドラクルではなく満月を叩いた。己が動きを乱されながらも、形変わった未来を形作り振るわれる刃にドラクルは臆する事なく足を引く。目前を通り過ぎる刃を見送り放たれる弾幕を身に受けて後方に爆ぜた満月は血を吐き出しながらも足は止めず、美鈴に並んで口を拭う。

「……他人の意思の中に未来を見ているわけではないらしい」

「満月さん大丈夫ですか？」

「まだな」

「では次は——」

「お前が来るか大陸の従者、誰が来ようと変わらんぞ」

美鈴が足を差し出そうとした着地点にいち早く落とされる弾幕に、美鈴の動きが僅かにブレた。一步先へ、一步先へ。相手の未来を潰すように、敵というより陣地を埋めるように差し出される妖気の弾丸。棋士が駒を進めるかのように指先一つで動きを制し、満月と美鈴の身が合わさった瞬間を吸血鬼の指先が射抜いた。

従者の名を呼ぶレミアの叫びに応えるように、弾幕を受け白煙を上げる刀を振るい満月と美鈴は背を合わせ、身から滴る血の雫を拭う事なく静かに呼吸を整える。

「未来を覗けるとはこれほどか……どこまで見えているのやら」

「気の動きに乱れもないと来ましたか。さて……」

「無為な事よ、休憩は終わりか？」

「ええ、お終いよ」

満月と美鈴の背を戸を開くように開けて間に降り立つレミアに、満月と美鈴は目を瞬き、ドラクルは強く顔を顰める。「ひとりぼっちは寂しいもの」と首を傾げて微笑を浮かべるレミアに満月と美鈴も笑みを返して身を前へと倒した。崩れぬ笑みにほんの少し目尻を吊り上げ、ドラクルはその姿にこそ舌を鳴らす。些細な未来の変貌が、目に付き気に障り仕方ない。口元に描かれる線の向き一つが、大きな違和感となり心を突く。その違和感の元を断つため、小さな青い影を掻き消すようにドラクルの一撃がレミアの首元に飛来した。

レミアはその一撃から目を逸らさず、身動きせずにとだ立つの

み。ドラクルは瞳に映る未来に眉を寄せる。ドラクルの強さは言わばジャンケンで後出しできるのと同義。出だしが同じであるのなら、ルーマニアの夜王の一撃であろうと必ず防ぐとレミリアが信じる者が二人も今は側にいる。

吸血鬼の爪と刀が打ち合い舞う火花を潜り抜け、分かっていたと二撃目を振るうドラクルの拳に小さな手が添えられる。

「未来が見えるから、吸血鬼だから、技など研ぐ必要ないものね。でも私にはそれを教えてくれる師が二人もいた。背が小さいとね、懐に潜り込みやすいんだそうよ」

「貴様レミリアッ！」

敵を木っ端微塵にしようと言うような暴力の一撃はふわりとレミリアの頬を擦るだけで終わり、一步を今度こそ踏み締めたレミリアの小さな拳がドラクルの身を吹き飛ばす。一撃目が無駄に終わるなら、二発目にそもそも照準を合わせていたのはレミリアも同じ。口から血を垂らすドラクルを見つめ、レミリアは確固とした答えを拳に握った。

「そう、見えていないのね。お前には私の旅路が見えていない。自分の見える範囲しか見えていないんでしょ」

ドラクルから言葉は返されず、鋭い視線だけが返される。天から見下ろす神のように世界の全てを瞳に写しているわけではなく、二つの眼の見える中でだけ未来を見ている。だからいずれ己が赴く場、己が前に誰かが立つのが分かっても、瞳に映らぬ誰かが知らぬ場で何をしてもドラクルには分からない。そう答えを出したレミリアの言葉にドラクルは口内の血を地に吐き捨て、肯定も否定もしなかった。

レミリアの答えは半分当たり。レミリアの言う通りであるが、間違いでもある。

二撃目の打ち合い。ドラクルは美鈴の一撃を見ていたはずが、その未来に割り込んで来た少女が一人。旅路は知らずとも、レミリアが何ができるかはドラクルにも見え分かつている。だが、その動きが見ていた形とまるで異なる。お前の未来は間違っていると嘲笑うかのように自由に未来を描き変えるレミリアだけがドラクルを否定してい

た。

「レミリア……貴様の力は未来を変えるか」

「ずつと言っているでしょう、私は私の未来を作るために来た」と

少しの動揺もなく言い切るレミリアに、小さいドラクルは目を細める。不定の未来を作り出す。それこそ人生。ただ誰もが知る普通をレミリアは言っているだけだが、レミリアの想いとドラクルの考えは違う。ただ意思の力で変わるようなものは未来ではない。全てを含めた軌跡の行き着く先こそ未来。絶対変わらぬはずのそれを変えてしまうレミリアの歪さに、レミリア自身すら気付いていない。

(危険だ……)

それでいて好機。

名称すら定かでない特異な力の正体をレミリアさえ気付いていない今だけが唯一レミリアを穿つ機会であると、ドラクルは静かに妖気を引き絞る。レミリアの未来だけが読めぬ今、遠い未来にレミリアがどんな存在になるのかさえ不明瞭。目で見ている未来さえ信じられない事実には、吸血鬼は強く奥歯を噛み締める。

何があつた？

どこで違えた？

屋敷の隅で膝を抱えて百年近くも蹲っていた少女が、一年も満たぬ間に夜の主に相応しい空気を纏い目の前にいる。必要なものは出会いか、機会か、試練か、何もできないはずだった者が、何も持たぬはずだった者が、いつの間にか全てを手にそこに居る。

「いいだろう、レミリアアスカーレット。お前こそが私の未来に横たわる初めての壁だと認めよう。だが、所詮それも乗り越えられぬものでもない」

「あら強がりかしら？」

「その言葉、覚えておけよ」

口端から垂れた朱線を指で拭い去ったと同時に、ドラクルの姿が掻き消えた。満月と美鈴の目には映らずとも、レミリアはその姿を紅い瞳で逃さず追う。ドラクルは追わず、レミリアの視線を追って美鈴は手を円に動かす。横合いから飛んで来た蹴りを流すため、反れた一撃

に返しの一撃を放とうとした美鈴だったが、分かっていたと合間を縫ってただ突き出されたドラクルの手に態勢を崩される。

「レミリア、貴様が見えずとも、その二人は別だろう？ その二人はお前の刃だと？ いいや、お前の首を締める首輪だレミリア」

レミリアを放っておけば、なにをしでかすか分からない。

で、あれば、間接的に崩せばいい。態勢を崩した美鈴に押されて動きの抑えられたレミリアに、ドラクルの暗い瞳が落とされる。如何様な武人であろうとも、技の出を潰し、なにをするか分かっていけば態勢を崩すことなど造作もなく、その間があれば吸血鬼にとつては事足りる。だが、その間を埋めるための刃がレミリアの元にはもう一本。

「美鈴殿！ レミリアお嬢様を抱えて下がれ！」

「満月！」

「馬鹿が、私の狙いは初めから貴様だ」

美鈴と満月の未来は変わらず。レミリアもいなければ未来は動かない。レミリアと二人の従者を繋ぐ信頼と優しさが、邪魔であると切り捨てるドラクルの言葉通り、二人を守るために動く場所と動きも分かっているドラクルに満月を穿つ事など容易い。満月の振るう刃の軌跡の間を縫い、蹴り上げられたドラクルの足が紅い頭を引き千切る。

「引き千切られたのは貴様だった人間」

「……………満……………げっ？」

潰れた蛙のような声を絞り出す笑みの消えたレミリアにドラクルは深い笑みを差し向けた。バツンツ、と糸の切れたような音を残して静まり返った空間に少し遅れて落ちてくる鈍い音。首の失くなった体はしばらく理解が追いついていないと言うように立っていたが、崩れた壁から吹き込み夜風に押されて地に落ちた。

月夜に照らし出される肉の断面からは血が滴り落ち、レミリアが名を繰り返しても返ってくる言葉が一つもない。

「まず一人。レミリア、お前の周りから削ってやろう。今のお前一人なら障害にはならん。次はその従者を、次は言うことを聞かないフランドールを潰そうか。お前は最後だ。言っただろう私一人いれば事

足りる。幸せな未来でも夢を見たか？ お前の優しさがお前を殺す」
「え……あ……」

レミリアの身から覇気が消える。
勝利。

見えないはずだったそれを、二人の従者が見せてくれる。その道へと背を押してくれる。二人がいれば自分は負けない。

そう信じていた。

そうレミリアは信じていた。

長い旅路の中で、なにがあらうと横に並んでいた顔が一つ、虚空を見つめて冷たい床に転がっている。

その生気の消え去った青い瞳が、レミリアの未来をぼろぼろと形ないものに変えてしまう。

「うそ……まんげ……っつ？」

中身の詰まっていない少女のか細い呟きに、美鈴は意識を取り戻し構えるも遅く、先に行く吸血鬼の足に踏み飛ばされた。壁にめり込む美鈴へと振り返り、壁から這い出ようとする美鈴の口から細い滝のように血が垂れる姿に、レミリアから血の気が失せる。

「小娘ひとりで未来を変えられると思ったか？ レミリア、お前は危険だ。だがその芽は小さく摘み採れる。生まれて初めてひやりとしたぞ。その点は褒めてやる」

「お……まえ、お前!!？」
「喚くな」

乱暴に頭を掴まれて、その手を引き剥がすこともレミリアには叶わない。一対一、自力なら未だレミリアは及ばず、レミリアの拙い技などという小細工では埋められぬ差を、他でもない力で教えられる。目の端に涙を浮かべるレミリアは、夜の王から小娘に戻り、ドラクルは小さく微笑んだ。

「お前の負けだ。ひとりぼっちの哀れな小娘」
負け。

再び渡されるその言葉に、レミリアは強く目を閉じた。
半年前と変わらない。信じて、勝利を夢見て、振るった拳は届かず

終わる。

無力さと悔しさに押し潰されて影の中で一人声なく泣く。

自分の内に閉じこもり、ただ己を卑下する日々。

長い旅路も結局は――。

「――お嬢様」

背に掛かる美鈴の弱い声にレミリアは僅かに肩を跳ねた。

「っ――」

負け、そうなのかもしれない。

弱い、そんなことも知っている。

でも違う。

(私……)

届かない、それは違う。レミリアの拳はルーマニアを統べる者に確かに届いた。

ひとりぼっち、それは違う。信頼できる友が二人、離れず側に居てくれる。

結果ではなく過程が大事。そう教えられたのではなかったか？

そう知ったのではなかったか？

例え負けでも、同じ負けでも、半年前とは雲泥の差。

だからレミリアは小さな手を握り締める。

(私は……レミリア＝スカーレットだもの)

フランだけが優しく呼んでくれる名を、今は二人も嬉しそうに呼んでくれる。自分が誰で何者なのか、教えてくれる者がいる。「レミリアお嬢様」と背に掛かる美鈴の言葉に力が戻る。溢れそうになる涙を手で払い、紅い瞳が小さく輝く。

「私は……まだ負けてない」

「なに？」

「私は……レミリア＝スカレット、陽の上る果てから旅をして来た吸血鬼。私はお前を倒しに戻った。それまで旅は終わらない。そんな……終わらない旅に最高の友が二人付いて来てくれたから、私は私になったから、私は勝つの、負けないの」

両手を胸の前で枝垂れさせ、大事なものを抱え込む。二人が主らしいと言ったその姿を、レミリアは馬鹿らしいと鼻で笑ってしまったけれど。でも、恥ずかしくてもそれを悪いとも思えなかった。

「美鈴は私をいつも守ってくれるの。それで、満月は私に勝利をくれるの。だから私は負けないの。ねえ満月、貴方私に言ったわよね、勝てるって言えと、そうしたら、今私に勝利をくれるって。頼っていいって言ったでしょ！ 貴方に頼らせて！ いつまでも！ 私勝つから！ 貴方は私の最高の友達だから！」

「壊れたか、滑稽な。せいぜいあの世で喚いていろ」

「その言葉ッ！ 覚えておけよドラクル＝スカレット！」

振り上げられた吸血鬼の爪にぎゅつとレミリアは目を瞑った。振り落とされるギロチンなど見なければいけないのと同じだというように、敗北を拒絶するように閉ざされた世界の中で、レミリアの肌を裂く感覚などまるでなく、死とはこうも静かなのかと暗闇の中に意識を浮かべるレミリアの耳に小さな布擦れの音が届く。

「あいも変わらず無茶を言いなさる」

聞き慣れた男の声がレミリアの意識を揺さぶった。

ハッと目を開けたレミリアの先でドラクルの腕を掴む首のない侍。

座りが悪いと頭のアった場所へと手を伸ばしながら、頭を搔くように手を動かす満月の身に堪らずドラクルは拳を叩き込む。

「満月ッ!?？」

弾け四散した満月の身にレミリアは名を呼び掛けると、「なんでござりましょう」と床に落ちている満月の首から困ったような声が返された。

目を瞬き見下ろしてくるレミリアに笑みを向ける満月の首に血溜まりとなった体が流れるように集まると、傷のない体となって形を成

す。体の調子を確かめるように刀を振るう満月にレミリアの口から声は出ず、呆然とするドラクルの顔面に満月の拳が沈み込む。

「うちの可愛いお嬢様を虐めてんじやねえぞ」

「ぐっ、馬鹿なッ!?? 貴様は! 貴様は人間のはずだ! なぜ死なない! なぜ立っているッ!?? なんだお前はッ!!?」

「十五夜満月、レミリアお嬢様の従者でござる」

「ふぎけるなッ!」

力任せに振るわれたドラクルの拳を満月は手で受けるも引き千切れ、二つ目の拳に身が砕ける。物理的に細切れとなった満月の体は、しかしすぐに元に戻った。妖気もなく、人である空気が変わらないのに何故か死なない満月に、レミリアとドラクルの動きが止まる。満月の死をドラクルも見たのに、それを否定する存在がもう一人。

「満月貴方……」

「レミリアお嬢様、約束は守りますとも。勝つのでしょう?」

「……うん、うん! 勝つ! 私と貴方と美鈴で! 三人で!」

「では一切の仔細なし。貴女に勝利を我が主」

レミリアの顔に笑顔が戻る。

それを見られれば満足だと足を踏み出す満月の身を吸血鬼の刃が真つ二つに引き裂いた。が、結果は変わらず、満月の笑みは崩れることなく、その軌跡は止まらない。

「なんだ! なんなのだお前は!?!?」

「ただやられるばかりも痛いな。行くぞ吸血鬼、極東の技その身に刻めよ。俺は極東の侍よ」

一撃に一撃を返される。ただ物言わぬ打ち込み台であるわけもなく、研ぎ澄まされた軌跡の技が夜の闇を切り裂きだす。分かっていたとその間を抜き去り放たれ肉を削る未来を覗く吸血鬼の暴力でも決して消えない軌跡の侍に未来が塗り潰されてゆく。

『武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり』

最良の行動ができる心境とは、自己を捨てたところにある。己が利で動かず、全体を見渡してこそ最良の結果を生むことができるという。満月の命は己にあらず、それはレミリアに預けている。故にレミ

リアが負けぬなら、満月はなにがあらうと負けぬのだ。レミアアが命を賭して救った満月だから、満月の中に流れるレミアアとの赤い血潮運命の赤い糸が満月を世界に縫い止める。絶対に欠けることのない満月こそレミアアの刃。その刃の向く先は、運命を繰る少女が示してくれる。

「お嬢様が答えをくれた。貴殿の目に未来が映るのであれば、それを覆えばなにも見えまい？ その視界俺で塗り潰してくれるッ！」

「吐かせ人間！ 止まった時がお前の最後だ！」

「なら止まらぬよ」

「馬鹿めッ！ 止まらぬ事など——ッ!?!?」

刃を受ければ嫌でも止まる。吸血鬼以上の不死性を見せる満月であらうと、体を崩せば動きは止まる。そう結論を出しドラクルは刃を腕で受けるが、刃はドラクルに打たれたまま、満月の体が地を滑る。

刀を振るい、そして刀に振られる。満月の動きに刀が動かされるその真逆。振られる刃に振るわれて満月が動く。故に止まらず削るようにドラクルの身を滑り続ける軌跡の技こそ抜ケン術おもりさかづき『錘逆月』。動きの止まらぬ満月の身が赤い線となり視界を揺れ動く中、ドラクルの両の眼を横になぞるように銀閃が走った。

——ガツッ！

打ち鳴るは空を裂く音ではなく硬い音。見えていたと横に走る刃の間に腕を滑らせたドラクルの左腕に刀を捨てた満月の右腕が開いたドラクルの左側から首元へと伸び、強引に引き寄せると額を打ち合う。分かっているも、避けられぬ命には差し支えない意味のない動き。一瞬呆けたドラクルだったが、視界を覆う満月の笑みにツウッと汗が頬を伝う。

「放せ貴様ツ!!?」

「安心しろ、何度死のうと絶対放さん。さて、俺は何秒貴殿の視界を塞げたかな。何秒未来を潰せただろうか」

「数秒潰せたところでなにになる！ お前に私を殺せるかッ！」

「吸血鬼は不死身に近い、俺じゃあ無理だが、きつとお嬢様たちならで

きるさ」

「世迷言を！ 放せよ人間ツ!!?」

ドラクルの身から溢れる妖気の熱に焼かれて満月の身が朽ちてゆく。それでも尚ドラクルを放さず笑みを浮かべたまま満月は大きく笑った。

たかが数秒、されど数秒、その数秒が必要だった。

レミリアは言った三人で。

崩れた満月に、その背後が明かされる。

夜風に靡く赤い長髪を振り、ただ一撃に全てを乗せる拳士の姿。

見えるから技の出が潰される。それは、出されればどうしようもない故に。空間さえ打ち崩す竜の一撃にも匹敵しよう拳士の拳に、心技体、それに加えて四つ目となる『氣』がただ一点に収束した。

「さあ来るぞ、月さえ崩す竜の咆哮が」

——コハアツ!!!

と活火山がけぶりを吐き出すような空気の亀裂が美鈴の口から小さく漏れた。世界を震わす美鈴の叫び。その絶叫を拳に乗せて、吐き出される紅い軌跡が、吸血鬼と満月を轢き潰す。

気の極致。

世界の始まりのような七色の極光が、ドラクルIIスカーレットの細胞を一つ残らず震わせる。その一撃に二の撃は要らず。

ズツと空間が揺れ傾き崩れる城の外壁を破り抜き、夜闇に浮いたドラクルを見つめながらレミリアの手に妖気の線が現界した。

「当たる、当たるわ……いや、当てるツ!!? 私が出来を作るのよツ!!?」

「ふざけるなよッ！ こんなところで貴様らになどツ!!?」

動けば崩れそうな体を捻り、空を滑るドラクル目掛けて手の内に浮かぶ朱玉を握り締めた瞬間、妖気の線を追い紅い魔槍が形を得る。握るは槍の形をした運命。当たらない結果など必要ないと握り潰し、必中の槍が空を裂く。身を翻すドラクルを追いありえぬ角度で空を抉

り曲がる槍の先端が、吸血鬼の身を空に張り付けた。

「あつ」

空を見上げるレミリアの頭上に光る銀の輝き。崩れてしまいそうになる身を泳がせるドラクルの傍に。美鈴の一撃に巻き込まれて舞い上がった満月の持つフランの歪な十字架が、空を泳ぎレミリアの元へと落ちてゆく。

地に転がり笑う美鈴、妖を千切りながら空を楽しそうに見上げるフラン、半分欠けた顔で笑いながら地に落ちてくる満月へと目を流し、レミリアは十字架を強く握った。

「お嬢様」

「……なあに満月」

「もうそれは必要ないでしょう。繋ぎ止めるものなど」

「……………そうね、今こそ返しましょう。フランに、美鈴に、それと貴方にね満月」

歪な十字の殻を破り、紅い十字が城を引き裂く。これまでの自分と決別する墓標とするように、ルーマニアの支配者を焼き潰し、闇夜に突き立った紅十字に照らされて、四つの笑い声が崩落した古城を喧しく包んだ。

「そんな感じかしらね、満足したかしら？」

喋り通して疲れたとティーカップに残った紅茶を飲み干し、レミリアは深くベッドへと腰掛け直す。そんなこともあつたようなと首を捻り笑いながら手を叩くフランと、給仕に徹していた美鈴、目を輝かせる咲夜や小悪魔の顔を見回して満足そうにレミリアは微笑むが、一人パチュリーは眉間に皺を寄せパタリと本を閉じた。

「信じられないんだけど……………」

そんな言葉を吐き出して掛けていた眼鏡の位置を直すパチユリーに、「ちよつとパチエ」とレミリアは手のひらを掲げる。

「本人が言ってるのにどこをどう聞けば信じられないなんて言葉が出てくるのよ、事実よ事実。ノンフィクション」

「レミィこそ私が誰の孫だと思ってるのよ。おばあ様が晩年やたらとルーマニア行きを勧めて来た理由が分かったけどね。ドラクルⅡスカーレットの長つたらしい今際の際の言葉だとか、貴女が十五夜満月にフラれた事だとか色々なかったじゃない」

「アイツの長話なんて全部覚えちゃいないわよ！ それに別にフラれてないからッ！ その言い方だと私が満月に擦り寄ってるみたいになるでしょッ！」

「そう言えばお姉様、いつのまにかあのお侍居ないよね、なんで？」

古くからの一応の知り合いのはずが、地下に籠っていたせいですっかり存在を忘れてたと笑うフランに、レミリアは強く肩を落とすしそっぽを向く。「フラれたから言いたくないのよ」と一人勝手に納得し頷いているパチユリーにレミリアは牙を剥くも声は出さず、代わりに苦笑していた美鈴が手を合わせながらフランの疑問に答えてくれた。

「まだ紅魔館を建てる前の話です、人の人生一生分は働いたと百年経ったところで旅に出られたのですよ。お嬢様は拗ねてしまわれて、その後数年は大変でしたね」

「ちよつと美鈴、いいのよそういう事は言わなくて」

「それにしても美鈴さん、紅魔館の中でも古参だとは知っていましたが、レミリアお嬢様の最初の従者だったんですね」

「なのになんで一番不真面目なのよ……」

感心する小悪魔と呆れる咲夜の視線を受けて、「いやあ」と困ったように美鈴は頭を掻いた。昼寝ばかりして門番の仕事を半分ほど放棄している美鈴の今を咎められると思いきや、「美鈴はそれでいいのよ」と微笑むレミリアに咲夜はなにも言えず、美鈴は小さく頭を下げる。「それでそれで！ その後何があったのお姉様！ まだ四百年分話が残っているわ！」

「ああ、フランはあの後新しい屋敷に籠りきりだったものね。全くも

う……」

「私も気になるわね、一応はおばあ様に聞いているけど」

再び灯り出した従者たちの好奇の瞳に、レミリアは紅茶のおかわりを注いでくれる美鈴と顔を見合わせ二人揃って肩を竦めた。

ドラクルⅡスカーレットが死に、ルーマニアは空前絶後の乱戦状態に突入した。支配者の消えた旧ワラキア公国領を巡り、旧モルダヴィア公国、トランシルヴァニア公国に拠点を持つ吸血鬼の一族が雪崩れ込み、漁夫の利を求めて西洋圏の吸血鬼たちが表立って、または水面下で手を伸ばした結果、ヨーロッパ中を巻き込んだ吸血鬼たちの夜の大战へと発展することとなる。

ドラクルⅡスカーレットを討ったレミリアは、旧ワラキア公国最強の吸血鬼として、時に東洋の従者二人を率い表世界にまで顔を出しながら、幾らかの吸血鬼と同盟を組み百年掛けてヨーロッパを手中に収めた。吸血鬼の中でも世界の半分を踏破した珍しい吸血鬼として、人さえ率いる吸血鬼として、裏と表の両面に名を連ねたレミリアはその後 三百年自由に過ごしていたのだが、満月から聞いていた幻想郷を目指し五百歳にして大規模な引っ越しを完了したというわけだ。

語る事は際限なく、世界の歴史を見つめて来たレミリアの終わりない話を再び聞こうと従者たちが耳をそばだてる中で、急にレミリアの寢室の扉が勢いよく開いた。

現れた一匹の妖精メイドは息を荒く吐き出して、慌てた様子で乱れたメイド服も気にする事なく入室し、レミリアを目にすると慌ただしく姿勢を正す。幾つもの強者の視線に晒されてあわあわと妖精メイドが身を震わす中で、「どうしたのかしら？」と紡がれたレミリアの静かな声を合図に、妖精メイドは要件を吐き出す。

「お休みのところ申し訳ありません！ お客様がお見えになられていますー！」

客。

その単語に一樣に顔が歪められる。

出入り自由というように、紅魔館だけでなく重要な場所であろうとも好きに出入りする者の多い幻想郷の中で、逆に律儀に客として参上

する者の怪しいことよ。泥棒や盗賊の類ではないのかとレミリアとパチュリーが眉を寄せる中で嬉しそうにフランは部屋を飛び出したが、すぐに何かにぶつかつたように扉の前に腰を落とす。

「——紅い屋敷ができたと聞いてな、約束通り見に来たのだが……大丈夫か？ 久しぶりだの妹君。門の妖の姿が見えぬと思えばこんなところにいるとは平和になったものよなあ」

紅い髪が夜風に揺れる。青い瞳が瞬いた。

目を見開く少女たちを見回して、笑う美鈴に客人は笑みを返すと静かに腕を組んだ。今更言葉など必要ないと言うように、始まりとなる『行つてらっしゃい』もなければ、終わりとなる『お帰りなさい』も客人に対しては必要ない。

レミリアは窓の外の夜空に輝く丸い月へと顔を向け、客人に顔を戻すとその名を呼んだ。『ただいま』などと言う暇がないくらい、三百年分の軌跡を埋める文句を言うために。

「遅いわ満月、貴方のせいで私はずっと長い時腕一本で頑張つてたのよ？」

「それは知らなんだ。なら今日から二本でございましょうか？」

「今はもつとかしら？ 話す事は尽きないだろうけど、取り敢えず座りなさいな。夜は長いわ。だつて——」

——今宵は満月 完

『十五夜 満月』

人の一生百年分働いたという事で、ヨーロッパを制覇したのと同時にレミアアの元を離れて旅に出る。三百年世界を放浪した末、紅魔館の噂を追ってレミアアの元へ帰って来た。元島原の亡霊。レミアアの血が混じっている事で、『主と共にいる程度の能力』を持つ。その正体は、レミアアと満月を繋ぐ赤い糸。レミアアが死なない限り満月は死なない。満月の命はレミアアが持つ。侍精神と運命の御子の力が合わさった結果である。紅魔館の執事長。名前の由来は十六夜咲夜の前任者という事で十五夜、そして満月の名。レミアアのネーミングセンスが悪いのはだいたい満月のせい。

『紅 美鈴』

大陸、門の妖。なんの妖か分からなかったため、竜生九子という独自設定を付けてしまった竜の子供。恐らくレミアアより大分歳上。元メイド長であったが、紅魔館を建てたのを気に、念願の昼寝を好き放題できる門番となる。徒手空拳の近接戦闘なら幻想郷でもトップクラスだろうが、弾幕ごっこが主となった幻想郷ではその腕前を披露する機会も滅多にない。が、いざという時これほど信頼できる門番もないとはレミアアの言葉。満月が帰ってきたことにより、満月との日課である組手が復活した。昔の気性が少し復活したせいで、満月と共に並んだ美鈴を相手にした不法侵入者たちが泣きを見る羽目になるのは別のお話。

『レミアア＝スカレット』

紅魔館の主にしてヨーロッパを統べる吸血鬼連合長の一人。『運命を操る程度の能力』にレミアアが気付いたのは、ヨーロッパの吸血鬼大戦中、ある金色の長い髪を持つ吸血鬼に会った際。運命を操る程度の能力は、言わば主人公補正みたいなものであるとこの作品中では考

えている。つまり不可能を可能とする力。満月が帰って来たことにより紅魔館が完成したと大々的にパーティーを開いた。人里では最近満月と美鈴を伴ったレミリアの姿がよく見受けられる。

おまけ 昨夜は満月

十六夜咲夜はなんとも言えない顔で紅魔館の門を見つめた。

普段門の役割を果たしているのかと考えてしまうほどの出入り自由な有様の鉄門は固く閉ざされ、その前にはいくつもの影が転がっている。まさに死屍累々。コハアツ！ と山の息吹の音色にも似た重々しい呼吸音を吐き出す赤い門番の背に、咲夜は大きく目を見開いた。

誰だあれ？

紅魔館が門番、紅美鈴。分かつてはいる。咲夜だつて分かつてはいるが、咲夜の知る昼寝大好き美鈴の姿から五百四十度は捻られたような拳士の姿。瞳の奥で紅い閃光の瞬く姿は修羅そのもの。見ているだけで美鈴の身から滲む竜のように畝つた紅い氣に中てられて肌が粟立つ。控えめに言つて別人にしか見えない。

一撃決殺、二の打ち要らず。

黒いとんがり帽子を風に揺らし、体を半分地に埋めて横たわっている普通の魔法使い。犬神家ごっこをさせられている氷精チルノ。木に引つ掛かり下着を晒している烏天狗の新聞記者。ただの一撃で災害の後、「またまた鈍ってしまいました」と、目を光らせたまま柔らかな声を出す美鈴のギャップに咲夜が萌えるようなことはなく、「たまやー」と、煙管を啜えて手を叩く執事服姿の男を横目により強く咲夜は口を歪めた。

「お見事でござる美鈴殿。三百年経つても腕は落ちていないようだなによりだ」

「よく言いますね満月さん、見ての通り鋭さに欠けます。久しく命の取り合いなどしていませんし、どうですかここはひとつ手合わせなど。久々に見せますよ、百年懸けて作った紅式八極拳」

「美鈴殿から誘つてくれるとは甘美であるが、ここら一帯更地にする気か？ 本気でケンを抜かせるようなこと言わんでくれ。それに、帰つて来て早々お嬢様に怒られたくはないな。それに今俺は見ての通り研修中の身でな」

「全く困った新人さんですね！」

あつはつは！ と二色の笑い声を聞き咲夜は顛顛を抑えて天を仰いだ。元メイド長と元執事長。吸血鬼大戦の真ただ中、レミリアの両腕として一騎当千、獅子奮迅、レミリアは三つの紅を持っていると言わしめた東の従者二人。普段の行いはどうであれ、積み上げられた実績だけで語れば伝説や伝承とそう違わない話に溢れている。最強の門番と不死身の側近。その気質を覗かせる二人の扱いに、咲夜は大いに困っていた。

シエスタは修練の時間に。咲夜の仕事の半分などそつなくこなす新人擬き。「よろしくね咲夜」と満月を押し付けてきた紅魔館の主に咲夜は何も言うことなどできず、教えるどころか教わることの方が多い。

「どうかしたか咲夜殿」と、咲夜の気も知らずに紫煙を燻らす満月に咲夜は溜め息を吐きながら門から目を背けた。

「……お嬢様はどういう気なのか、ここ数日で思い知りましたが、私が満月さんに教えることなどありますか？」

「何を言うかと思えば、そんなのたくさんあるであろうに」

「例えば？」

「疲れた時に暇する場所とか教えてくりやれ」

そう笑顔で吐き出す満月の額にナイフが埋まる。呆れ過ぎて表情の死んだ咲夜は時でも止めたかのように（実際止めた）遠慮なしにナイフを突き立て、満月の額から髪の色と同じ朱色が噴水のように噴出した。それでも倒れることなく満月は笑みのままナイフの柄を持つと引き抜かずにそのまま顔の上にナイフを走らせ、「いい業物だ」と愉快そうに零す。

「流石はメイド長殿、聞いていた通り容赦がないな。良き事だ。お嬢様の刃であればこそそうでなくては」

「……試すためにそのようなことを？」

「うんにゃ、事実暇する場所を知りたいだけよ」

再び突き刺さるナイフも気にせず、「真面目な童女だ」と笑う満月に頭痛を覚えて咲夜は深い溜め息を吐き捨てた。

不死身の従者、永遠に欠けぬ紅い満月。レミリアが死なぬ限り死ぬことのない蓬萊人にも並ぶ不死性。運命が死を否定する軌跡の亡霊。二の打ち要らずの美鈴同様に、一撃必殺を繰り出せる咲夜をして絶対に殺しきれぬ相手。

紅美鈴、十六夜咲夜、フランドールⅡスカーレットという最大級の終止符を数多く内包する紅魔館の中であって、レミリアと同じく終止符を打ち消す武士。だからこそ咲夜はこの新たな古の執事長がどうにも苦手で、また同時に少し羨ましい。己が成長の時を止めれば咲夜とて永遠にレミリアとは居られるが、満月のようにレミリアとの繋がりがあつてもなし、鼻を鳴らす咲夜を前に満月はナイフを体から引き抜くと放り捨て肩に背負った刀を背負い直す。

「咲夜殿は俺といるときいつも眉間にしわを寄せるな、もつと気楽に生きればよいのに」

「あ、満月さんがそれを言うんですか？」

「別にいいだろう美鈴殿、昔の話じゃ。なあ咲夜殿？」

「知りませんよ、だいたい満月さんも執事長ならもつと整然と振舞ってください。妖精メイドに示しがつかないでしょう」

「そうは言うてもこうも平和だとな、俺の身には余る。一つ処で平和に過ごすというのはどうにも性に合わん。だからそれを教えてくれと咲夜殿には言っておるのさ」

レミリアと共にあつて満月が血を見ない時など長くなく、満月にとってのレミリアは言わば総大将、戦場で家臣を率いる殿である。ルーマニアを目指した旅路も、ヨーロッパでの大戦も、そんな時しか過ごしていない。戦時の刃が満月ならば、太平の世の刃が咲夜である。と一人頷く満月に咲夜は唇を尖らせた。

「なんですかそれは、私は寧ろ」

戦いの場でこそ主と共に居たい。そう言おうと口を動かそうとした咲夜の目の前に満月の手のひらが伸ばされ制される。

「昨日があるから今日があるというもので。俺が居なければ今に至らず、咲夜殿が居なければ今はないとな。これも軌跡よ。なあ美鈴殿」
「まあ私はどちらも知っていますけどね」

「ほらこれだ、聞いたか咲夜殿、美鈴殿はああ見えて意外と辛辣よな。言外に旅に出た俺を虐めて楽しんでるのだ。どう思う?」

「美鈴、貴女は仕事をしなさい」

鉄の門を挟んで言葉の突き立てる咲夜に「はい」と、美鈴は頭を掻きながら返し、嬉しそうに満月は手を叩いた。が、「貴方もですよ」と、同じく咲夜に言葉の刃を突き立てられ、「委細承知」と零して満月の肩が落ちる。

「……それで、平時の今の何が知りたいたいのですか満月さん。私に教えられることなどそうそうあるとも思えません」

「だから暇するための」

「それ以外で」

「そうだな、では、うむ、そろそろ咲夜殿のことを教えて貰おうか。まずはそこからよ」

「私の?」

「そうとも、貴殿の軌跡を覚えてくりやれよ」

そう言つて微笑を浮かべる満月の笑みの鋭さが、咲夜はやはりどうにも苦手だ。

「私のことなんて、お嬢様が歩んだ旅路と比べれば酷く短い。語るよ
うなことなど」

「そんなお嬢様の旅路の一端を咲夜殿だつてもう歩んでいるだろうに。軌跡に長い短いは関係ない。うむ、幻想郷はいいところのようだ。結局外にいた間妹君は変わらなかつたが、今は柔らかくなつたな。それも咲夜殿が近くに居たからだろう」

「そんなことは……」

ないと咲夜は言おうとしたが、言葉の先を満月の笑みが否定する。レミリアだけでも、美鈴だけでも、満月だけでも無理だった。狂気を掴んだ者が他に居たとして、それまでにフランドールを支えていた者がいたことは事実。

いざ手を伸ばそうとしたところで、その手を押し出す元がなければそもそも手が伸びることなどない。常に守ってくれる門番が居て、決して壊れぬ姉が居て、助言をくれる偏屈な魔法使いが居て、遊び相手

の小悪魔が居て、常に傍らにメイドが一人立っている。そう口にしながら、満月は静かに指を折り畳んだ。

「あの頃に比べて随分増えたの。掴むには両手で足りやしない。目移りしてしまつて手を伸ばす先を選ぶのも大変であらうよ。なあ咲夜殿、愉快でござるー！」

「貴方は入つてないんですか？」

「俺は流れてなければ気が済まん質でな。一つ処に留まるのはどうにもむず痒い。昔はただ流れていただけだが、陽の光に照らされ雲となつた海水が雨となり海へと帰るように、帰る場所があるからこそ流れるというものだが。そんな俺を妹君の側に置くのも申し訳ない」

満月はレミリアの刃である。その鞘を持つのはレミリアだけ。他の者の懐に収まることはありえない。だから気軽に出ても行けると千切れぬ赤い糸があるからこそ満月はそう言い切り、始まりの日本刀に手を這わせる。

「……お嬢様の放浪癖は満月さんに似たのですかね。昼でも気にせず出て行かれて」

「旅も悪くない。いずれどこかに辿り着ける。なあ咲夜殿」
「……そうですね」

誰もが足を止める場所を探して旅をする。パチユリーノールレッジは祖母の遺言に従いルーマニアへ。咲夜もまた同じ。ただそこにあつたのは輝かしいものではなく、もつと大分血生臭い。満月は悪戯っぽく笑うと、少し咲夜に顔を寄せて小声で告げた。

「俺もずつとよろろっぱを回つていてな？ 白銀の髪を持つうあんぱいははんたーの話は風の噂でよく聞いた。誰とも組まぬ一匹狼。吸血鬼にさえ恐れられた銀の小太刀。くははっ、愉快よな。出会えて光栄ぞ西洋の忍」

名声のため、報酬のため、夜を支配する吸血鬼を追い、己を懸けて刃を握る者。戦者であるからこそ、強者をなんだかんだと気にしてしまふ侍の性が咲夜へと向き、同じく狩人の気性が顔を覗かせる咲夜の瞳とかち合い火花を散らす。結局のところ、レミリアの友人であるパ

チュリー以外、血を追い求める狂戦士。その血が館を染めている。

相変わらずそういう者を探すのが上手いと満月は口元に大きな三日月を浮かべて笑い、ふいつと咲夜は目を逸らす。

「別にそんなんじゃ……他にやるのがなかっただけです」

いつどこで生まれたか咲夜は知らない。誰もいなかった廃れた村でヴァンパイアハンターに拾われたという事を後で聞いただけ。師匠であるヴァンパイアハンターと別れてから、できることなど狩ることだけで、より強い吸血鬼を追い求め夜を彷徨った。

名が上がれば誰かの目に付くかもしれないと信じて。

ただ他人に勝手に付けられた名で呼ばれ続ける。それが誰でもないことを咲夜に叩きつけた。きつと自分も知らない己の名前を呼んでくれる者が何処かにいるはずだと夢を見て。

言ってしまうえば承認欲求。人が生まれて初めて認めてくれるはずの者がきつと何処かに……。

「満月さんは……その名は偽名なのでしよう？ 本名は名乗らないのですか？」

「俺は十五夜満月よ。それ以外の名など知らんなあ。どうしても知りたければ島原の乱の戦没者名簿でも捲っとくれ。どこかにあるさ。それでいいかな十六夜咲夜殿」

「ふふっ、吸血鬼の従者は死人を気になど致しません。私は十六夜咲夜ですから」

「咲夜ー！ 満月ー！ どこにいるのー！ 今日博麗神社に行くわよ！ 今日こそ霊夢に勝つわ！ 戦の準備をしなさい！ ほら満月法螺貝吹いて！」

主が名を呼んでいる。二つの月の名を呼んでいる。満月と咲夜の止まった時を動かした名を。まん丸い月一つでは足りないらしい欲張りな主の声を聞き、満月と咲夜は顔を見合わせて肩を竦め小さく笑った。

「法螺貝って、まーた時代劇でも見て感化されよったな。あの流行り物になんでも飛びつく癖どうにかならんもんかね。昔からそうだ。咲夜殿、散歩の途中で傘をちらつと退かしてやろうぞ。きつと面白い

ものが見られるぞ。お嬢様の一発芸が」

「全く満月さん……是非やりましょう。そう言えばヨーロッパとは言っていました。満月さんはどこを目指して旅に行かれていたのですか？」

「ぼるとがる。今度紅魔館の全員で行ってみるか？」

「私は絹の道を歩いてみたいですね」

「おいおい苦行好きか？ まあまた世界を巡るのも悪くはないか、それも数を増やしてぞろぞろとな！」

　壮大な旅行計画を思い描きながら、主に投げ付けられた法螺貝を満月は叩き割り、咲夜は日傘を広げて待ち受ける。悠々と歩き博麗神社に着いた矢先、ゴビ砂漠が生み出したレミリアの一発芸が炸裂した。

おまけ 草月の日々

「貰いましたッ！」

「そうは問屋が卸おろさんとな」

一撃決殺。『紅式八極拳』の紅い拳撃が空を穿つ。空間を揺らし噛み砕く一撃。拳だけに留まらず、その先に座す空間自体を圧殺する門番の一撃に巻き込まれた満月の紅い影が掻き消えた。紅美鈴ほんめいりんの視界の中で蝮局とくろを巻くように蠢うごめく紅い影たち。『抜ケン術』の『軌跡の世界』、始まりがなく終わりもない。視界を彩る紅線を睨み、二の撃要らずのはずの拳を何度も抜かせる男の影に美鈴は獰猛な深い笑みを浮かべる。

「ふふつ、満月さん！ 次も避けられますか？ ただ避けてばかりではいつまで経っても我が門を開ける事は叶いませんよッ！」

「そう誘うな、誘いに乗ったところで甘いひと時などないだろうによ。それに俺を誘うなら、足腰立たなくなっても知らぬぞ美鈴殿」

「那けっ太好こう? ツ!!? 極東の武士の甲斐性の程を見せて下さいよ！ 私に誘わせたのですから、責任を取っていただけるのでしょうか？」

「吐いた唾は飲めんぞ門の妖！ 俺に手を出させるのだから先に寝てくれるなよッ!!?！」

『紅式八極拳、崩龍咆哮ベンロンパオシャオ』、弾ける『氣』が龍の咆哮のように空間を揺らす。呼吸と拳で撃ち出される指向性を持った破壊の絶叫。空間を軋ませ響く音は即ち龍の鳴き声が如し。鈴を細かく揺らし稲妻が轟くような鋭く重い美鈴の拳の音を耳に、笑みを深めた十五夜満月じゅうごやまんげつの身が震える空間の内で膨らむように紅線を引いた。

『抜ケン術、歪曲煽ワイキョクセン』、終わりなき軌跡の世界に相手を取り込み、ズレる感覚によって生まれる死角の穴を広げ穿たれる不可避の拳。揺れる世界を攪拌かくはんし、『氣』を散らした美鈴の拳と満月の拳が交差する。

お互い僅かに首を捻った先を通過し、顔の横に突き出された腕を追って青い瞳が見つめ合う。生まれた一瞬の静寂は二つの小さな笑い声が埋め、二つの紅い閃光は離れるとすぐに再びぶつかり合う。

紅い館、紅魔館の周りを彩る紅色の衝撃波。空を揺らし地を砕き、

弾かれた空間が生む風に強引に本のページを捲られて、久々に日光浴でもしようかと紅魔館のテラスで本を読んでいた『動かない大図書館』パチュリーノールレツジは、手にした本から視線を外して天を仰ぎ、真上で紅い拳撃の花火が開く様を見届けると、痛む頭を抑えて深い大きなため息を吐く。

「……咲夜、あの門番と執事長どうにかしてくれない？ これじゃあゆっくり本も読めないわ。満月が帰って来てから毎日毎日よく飽きないわね。あれは……鍛錬なのよね？ お互い口説いてる訳じゃないのよね？」

組手にしては口から出ている言葉が際どい。場所と雰囲気さえ入れ替えてやった場合、『悪魔の妹』フランドールスカーレットには見せられそうもない。フランドールが友人と幻想郷の何処ぞへと遊びに出ている為、気にしなくていい事に感謝しつつ傍に立つ紅魔館のメイド長へとパチュリーが目を向ければ、十六夜咲夜は困ったように肩を竦めた。

「あればかりは私にもちよつと……あれを止められるのはお嬢様だけです。時を止めようにもあの二人は止まりませんから」

組手の時は完全に満月と美鈴は二人だけの世界に埋没している。時を止め弾幕を咲夜が放ったところで、武人としての気質を隠さずに全面に発揮している二人は、丁度いい障害物とばかりにその中を縫うように動きそもそも当たらず、止まった中でナイフを突き立てようが、満月は死なぬ為気にせず動き続け、全身に気を巡らせている美鈴には刺さらない。よって咲夜に止めることは叶わず、下手に手を出し続けると、組手に混ざりたいのだと勘違いされて酷い目を見る。

咲夜とて紅魔館に来る前は欧州に名を轟かせたヴァンパイアハンターの一人ではあるものの、欧州での吸血鬼大戦を戦い抜き、絹の道を踏破した二人の本気と比べると細かなところで数歩及ばない。『紅魔の主』、『永遠に紅い幼き月』、『旧ワラキア公国最強の吸血鬼』、『レミアスカーレットがその昔武の師であると仰いだ二人。純粹な格闘技術で美鈴と満月に敵う者は紅魔館に存在しない。よって二人が飽きるまで放っておくしかない』と咲夜は首を振り、空に響く拳と拳の

音に耳を傾けた。

「……満月さんも私を誘ってくれればいいですけど、美鈴も。普段何も教えてくれない癖に組手だけは意気揚々と」

「あつそ、貴女も同類ね咲夜。最初はツンケンしていたのに、随分と執事長と仲良くなったようね。美鈴も昼寝する暇がないくらい楽しいようでは何よりじゃない」

「それは違いますよ、美鈴と満月さんはたまに示し合わせたように二人で昼寝してますから。私の死角を突いて毎回毎回隠れるように、まったく、アレさえなければ二人に目くじらを立てる事もないのにッ」

それは昼寝自体ではなく、咲夜とのかくれんぼを楽しんでいるだけじゃないのかとパチュリーは当たりを付けて呆れるが、わざわざそれを口には出さない。それになんだかんだ咲夜は美鈴と満月に弱い。普段こそ仕事を真面目にしない二人に怒ってはいるものの、いざレミアの始まりの従者としての顔を覗かせる二人の前では逆にやり込められてしまう。美鈴と満月にとって咲夜は可愛い妹分なのだ。なんだかんだと甘い三角形に仲が悪いよりはいいかと再び本へパチュリーが目を向けようとした目の前のテーブルが、急に横合いに吹き飛び砕け散った。

「あつ」

間の抜けたような男女二つの声。床に散らばる木片と、砕けたティーセットを目にテラスの柵の上で門番と執事長は動きを止めて無言で顔を見合わせる。

「……………満月さん」

「安心せよ、こんな事もあるかと、外の世界を旅していた時ふらんすで買ったていーせつとを隠し持っておる。いぎりすのも、なんならーまにあの物もの。美鈴殿は？」

「こんな事もあるかと幾つかテーブルの在庫を倉庫に置いてあります。つまり——」

レミアに、お嬢様には怒られない。

「仔細ないの」「無問題です」

「問題ありよ」

すこんツ、と美鈴と満月の頭に銀ナイフがぶつ刺さり、二人の体が柵の上から転げ落ちる。気で傷を塞ぎながらナイフを抜く美鈴と、関係ないと血を噴き出しながらナイフを抜く満月を咲夜は睨み、怒れるメイド長から逃げるように顔を背けて、満月と美鈴は顔を寄せた。怒っている時の咲夜が二人は苦手だ。

「不味いぞ、咲夜殿が怒髪天ぞ。機嫌を取るならどうすりゃいい?」
「どうでしょう、昼寝にでも誘います?」

「頭に刺さるないふの数が増えるだけよな、組手にでも誘うか?」

「組手で壊したのに駄目じゃないですか? 満月さん咲夜さんの事褒めてあげてみてくださいよ、今日は綺麗ですねとか、意外といけるかもしれません」

「正気か? 美鈴殿は俺に褒められて嬉しいか?」

「満月さんに? 私と満月さんは何年の付き合いだと思ってるんです? 今更褒められても、お嬢様じゃないんですから」

「じゃあ意味ないな」

「あつはつは!」

「聞こえてるわよ?」

全く会話を隠そうともせず笑う二人の頭に再び幾つかのナイフが刺さる。わざとらしく死体のようにテラスの上に転がる二人に咲夜は大きなため息を吐き、全く気にされずに放って置かれているパチュリーも同じようにため息を零して手元の本を転移魔法で消した。椅子にだけ座っていても面白くはない。折角外に足を伸ばしたのになだ図書館に戻るのも面白くなく、頭にナイフが刺さっているのをいい事にそのまま昼寝に移行しようかという程動かない美鈴と満月を見下ろして、パチュリーは椅子に座りなおした。

「それにしてもよく飽きないわね貴方達。毎日毎日組手組手、武術に對して私はそこまで詳しくはないけれど、レミィに会う前から貴方達はそうだったの?」

純粹な疑問。本や文献を漁り理論を組み立て、己が工房から出ずに研鑽を積むパチュリーとは異なり、美鈴も満月も今でこそ絶対の主と

してレミリアに仕えてはいるものの、元は二人とも戦人。戦場を駆け
ていた修羅である。その気質の発散場所を求めているからこそ美鈴
と満月は毎日飽きずに弾幕ごっこよりも危険な組手を嬉々として続
けている。頭に刺さったナイフを抜き、柵に寄り掛かるように二人
は立ち上がると満月は取り出した煙管を啜えて紫煙を吐き、一口吸え
ば美鈴に手渡す。ありがとうとも言わずに一つの煙管を回して吸う
二人の姿は、かつての旅のワンシーンを切り取ったかのように自然で
あり、咲夜もパチュリーも目を丸くした。

「まあ、そうだな。戦場の記憶は忘れんよ。昔は色々な者と手を合わ
せた。西へ東へ刀を背負い旅をしたの」

「武力こそが正義の時代でしたからね、私も今より無茶をしました。
満月さん程手に取れない方も珍しいですけどね」

「美鈴殿程の女子おなごの拳士とて居なからうよ。幻想郷にも居ないような
変なのとも何人か知り合うた」

「……どんな方がいらしたのですか？」

少し畏まった咲夜の言葉に、美鈴と満月は僅かに目配せして視線を
外した。レミリアの父親やそれに類する吸血鬼達の話をするのは、レ
ミリアが紅魔館にいる為勝手に話のは憚はばかられる。そうなると残され
るのはレミリアに出会う前の話しか残されておらず、美鈴と満月は強
く顔を顰しかめた。

「……なんの顔なんですかそれ」

「果てしなく嫌そうね」

咲夜とパチュリーからも微妙な顔を返され、美鈴と満月はこれ見よ
がしに大きく肩を竦すくめてみせる。口の中に広がる苦味と同じく、記憶
を辿れば残されているのは苦い記憶。そんな苦い記憶の中に潜んだ
苦味を消す思い出を、紅魔館の紅い肌を見つめながら思い出す。

「……話せる相手と言われましても……どうです満月さんは誰かいま
すか？」

「まあ幾らかは、ただどうしても戦の話にはなるがな、あれは落とし穴
のようなもので。戦人だけが落っこちるな」

「困った事に這い上がれないんですよね落っこちると、いやあ、紅魔館

に居るとよく思い出しますよ。長江の赤壁を」

軽く呟き口に咥えた煙管を揺らす美鈴見て、満月は強く口端を落とした。珍しく話に乗り気らしい美鈴。「話すの?」「たまには」と目だけで会話し、満月さえ聞いた事がない古の戦を美鈴は口遊む。

『赤壁之戰』
チーピーチーチャン

中国後漢末期の二〇八年、長江の赤壁にて起こった魏呉蜀の戦い。華北をほぼ平定した曹操は、中華の統一を図りさらに南下した。数十万の魏の軍勢を率いた『曹操』と相對したのが、呉を率いた『孫権』に仕えていた『周瑜』と蜀を率いていた『劉備』達の連合軍。戦力差五倍から十倍と言われた軍勢を連合軍は長江の赤壁で迎え撃ち、見事これを撃退したのである。

「公瑾と孔明程の謀略家に会える事はもうないかもかもしれませんね。赤壁が炎と血と夕陽に照らされて輝く様は? 宝石のようでした。子龍、雲長、益徳、子敬、公覆。あれ程の戦舞台にはそうそう立ち会えるものでもないでしょう」

「……美鈴殿、それは二千年程前の戦ではないのか?」

Red wall battle
「赤壁之戰? 美鈴貴女いくつよ」

「おや、女性に歳を聞くとは野暮ですね。打草? 蛇、と。ねえ満月さん?」

「俺に言うな俺に……」

煙管を美鈴に手渡され、満月は不機嫌そうに紫煙を燻らす。美鈴と満月は生きた歴史の集積だ。咲夜の何十倍も生きてきた軌跡は広大であり、語るなら一日では到底足りない。美鈴がそんな軌跡の一欠片を口にしてしまったものだから、パチュリーと咲夜の期待の眼差しが満月へと向き、満月は困ったように小さく身動ぐ。そんな満月の肩を美鈴は小さく小突いた。

「私は是非とも島原の話が聞きたいですね。それが満月さんの全てでしよう?」

「おいおい、早速藪を突ついているぞ?」

「なんなら私が話そうかしら？」

動かない大図書館が己が潤沢な知識をひけらかして虐めてくる。当時生きていないパチュリーが知っているのは、後世に残された文献くらいのもの。有る事無い事話されても堪らないと満月は頭を強く搔き、紫煙が上り夜に向かつて赤らんできている空に消える様を見上げた。誰を口にすればいいやら、四郎はないなど選択肢から消し、多くの者の中から取り敢えず美鈴と同じ智者を二人。

「……謀略家なら俺が上げられるのは二人ぞ。千々石殿と森宗意軒殿よな。賢人と奇人。あの二人がいなければ俺は今此処には居らんぞ」

「満月さんが？」

「気になるのか咲夜殿？」

満月に見つめられて瞳を大きく泳がす咲夜を目に、満月は微笑むと煙管を叩き火種を落とす。雇われ妖精メイドなどとは違い、咲夜も紅魔館に骨を埋めると決めた者。そんな中で誰より年若いからこそ、紅魔館ができる前のその軌跡を知っておきたい。面白い話でもないだろうにと首を捻って想いを巡らし、可愛い妹分のために少しばかり口を開いた。

「千々石殿ちぢわごろうざえもん千々石五郎左衛門。島原の乱の一揆勢の軍師、大矢野三左衛門おおやのさんざえもんと共に原城の大江丸を守っていた。天草十七人衆が一人。はな、緻密にして計算高いこんぴゅーたーのような御仁だった。表情乏しく声も荒げんかったが、あれ程情熱を秘めた男も少なかろうよ。俺と原城の大江丸という場を守っていたな。鍋島直澄なべしなおすみを筆頭に突っ込んで来た北条何某と五辻何某という敵将と真正面からぶつかった。敵将二人は俺が刎ねたが、後に来た援軍に数で潰され大江丸は落ちたがの」

「……冗談？」

珍しく話に耳を傾けて目を瞬くパチュリーに、満月は笑う。ノーレッジ卿の面影を残す幼い少女の驚きの顔は、美鈴と満月には何より新鮮だ。こんな顔が見られるのならとつい口が軽くなる。

「さてな。宗意軒殿キリシタン、島原の乱の一揆勢における惣奉行、目付、兵糧奉行。天草四郎のことを田崎刑部たさきぎょうぶと共に天草に触れまわり、

一揆を促した。天草十七人衆が一人であり、天草五人衆の一人。はな、日ノ本の術と切支丹の秘術を混ぜたけつたいな術の使い手じやつた。敵の術師の多くを破つたのが宗意軒殿ぞ。陰影の戒術の担い手、陰陽師との術勝負は化物同士の喰らい合いぞ。ありやあ幻想郷でも滅多に見れんな」

悪夢の式神と禁術の怪物。あまりの禍々しさに誰も手出し出来なかつた。宗意軒の弟子さえも「気色悪いのう、夢に見そうじゃあ」と呆れる始末。これには天草四郎時貞あまくさしろうときさだも苦笑い。最終的に四郎の威光によつて消滅し、同時に悪意の邪眼で天草四郎の力を削がれた。それを思い出し小さく舌を打つ満月の横で、そう言えばと何かを思い出し美鈴が強く手を叩き合わせる。

「その戦、新免何某という極東最強の剣豪も居たのですよね！ 満月さんやり合いました？」

「……嫌なこと思い出させるの。言いたくないぞ」

「えー、いいじゃないですか。一点点ちよつとだけでも！」

「じゃあ美鈴殿も趙雲殿だか雲長殿だかとの話をしてくれるか？」

「さあ次に行きましょう！」

調子良さげに話を流す美鈴の姿に、満月は鼻で笑い煙管を噛む。満月含めて数人がかり、それでようやく死なずに済んだ二刀を握る天下無双。そんな話はしたくない。軌跡も十字架も何でもかんでも一刀の元に弾き飛ばした豪剣の達人。鬼よりも鬼らしい剣聖。二度と死合いたくないとは正にあれのことだ。

「でも貴方が居て智慧者がいても多勢に無勢で負けたんでしょ？ 籠城戦でも四倍近い戦力差でよく二ヶ月以上保つたわね」

パチュリーの言う通り、一揆勢約三万七千対、徳川幕府側約十二万五千の戦。しかも籠城戦。圧倒的に数で劣る中でよく保つた。寛永十四年十月二十五日、有馬村のキリシタンが中心となつて代官所に強談に赴き代官、林兵左衛門はやしひょうざえもんを殺害した事により島原の乱が勃発する。その後原城に籠城した後、十二月十日、二十日に幕府側は総攻撃を行うが、そのことごとくが敗走させられたのである。それには数多の島原の怪人達、傑物が力を振るつたからであり、満月は名を口にし指折

り数える。

「有家殿ありえ有家監物ありえけんもつ。島原の乱における一揆勢の原城本丸大将（天草四郎と同じく）三ノ丸出丸大将。キリシタン。天草十七人衆が一人であり天草五人衆の一人。蘆塚殿あしづか蘆塚忠右衛門あしづかちゆうえもん。老練の軍師として原城に入城。天草十七人衆が一人。赤星殿あかほし赤星道重あかほしみちしげ。徒士大将の一人として原城本丸付近を守備した。天草十七人衆が一人。――」

上げる多くの名前の中で、『聖人』天草四郎時貞を除き、特に異様であつた怪人達。これまで名を挙げ連ねた者以外で、特に際立つていた七人。七つの指をパチュリーと咲夜の前へと満月は差し伸ばす。

「三會村みえむらみえむらきんさく三會村金作、種子島出身の武将。糸針の穴をも撃ちとおす鉄砲の名手。討伐軍大将、板倉重昌いたくらしげまさを討つた。殿、刑部ぎょうぶ、玄察げんさい、左京進さきょうしん、右馬助うますけ、松右衛門殿まつえもん大矢野松右衛門おおやのまつえもん。原城籠城戦の際は浮武者頭として、山善左衛門とともに遊軍二〇〇〇人を率いた。天草十七人衆が一人であり、天草五人衆の一人。山殿やま山善左衛門やまぜんざえもん。天草五人衆の一人として島原の乱を首謀し、原城籠城戦の際は、浮武者頭として大矢野松右衛門とともに遊軍二〇〇〇人を率いた。この七人は異彩であつたぞ。松右衛門殿と山殿は特殊な役職についておつたからそこまで話せんかつたが」

「今呼び捨ての方混ざつてませんか？」

「ああ、俺や四郎と歳が近かつたのよ。咲夜殿と博麗の巫女殿と魔法使い殿、庭師殿、風祝殿みたいなものよな」

島原に集つた者で重要な役職に就いた者の殆どが浪人だ。関ヶ原の戦に参加し、大坂の陣にも参加した者が多く島原には集まつた。そんな中で特異な技能を持った若い者というのはどうしても限られ、集まればなんだかんだと馴染んでしまう。最年少の四郎を筆頭に、満月も合わせて五人。『天草若人六人衆』の結成であつた。

「刑部は宗意軒殿の弟子でな。でかい十字槍を担いで二ノ丸出丸の大將をしておつた。五百人ばかりで軍勢を押し返せていたのは奴のおかげよ。島原の鬼などと呼ばれていたぞ。切支丹であつたから四郎から貰つた御守りをいつも首から下げておつたよの」

「ワシあ旗奉行じゃあからのう、戦場で迷つたならワシを見つけよ」な

どと宣い、目立つ十字架を決して手放さなかつた男。戦場の中で血溜まりの中に沈まず天に掲げられた十字架を何度も満月は目にしている。

「玄察は医者でな、毎回俺達の治療をしてくれた。頭が回る男で蘭学に明るかつたの。薬箱を背負つた小太刀術の達者ぞ。人体を知り尽くしておつたから小太刀一つあれば人をバラせるとの。我らが長く戦えたのも玄察が居たからよな。島原の杏林ぞ」

「私が居れば死なせばせんね、死人じゃって蘇りゃあな」と振り切れた笑みを浮かべて蘭国のパイプをふかしていた男。忍よりも忍びらしく、満月達六人の中では相談役でもあつた悪たれ。大麻を栽培し幻覚世界に敵を叩き込んでいたガチやべえ奴であつた。杏林医師の美称のこと。は勿論皮肉である。そんな男を思い出し口端を歪めながら、満月は気怠そうに紫煙を零す。

「左京進は夜廻奉行よ、誰よりも夜目が効きおつた。夜でも安全に過ごせたのは此奴のおかげぞ。その代わりに夜行性で昼はいつも眠そうだったな。我ら側の数少ない忍びで、幕府側の忍や暗殺者を数多く仕留めた。島原の夜守よな」

「眠いぞな」、この台詞で全てを表すことができる男である。常に眠たげで目の下には隈があり、鎧を着ることもなく、なんでもない平服に身を包んでいた男。寝ていると思いい目を移せば、いつの間にか消えていた。勝てない勝負はしない主義を公言しており、負ける前に逃げると言いなから逃げた試しがない。サボり癖が身に付いたのは此奴の所為だなど罪を押し付け満月は笑う。

「右馬助は鉄砲奉行ぞ、島原で出会つた三會村殿みえむらに弟子入りした銃の名手よ。幕府側から突つ込んで来た絡繰人形を追い返し、幕府側の軍師を穿つた。いざという時にこそ頼りになる男じゃつたの。島原の射手との」

「おいらにやあ無理だよ」と口にしながら無理を通していた鉄砲撃ち。「無理じゃないわ」と金作に小突かれながら、二人で精密な狙撃を繰り返していた。駆ける馬より速く敵を討ち味方を助ける『馬撃ち右馬助』と恐れられた弱気な男。人当たり良く、潤滑油だったのは間違いない

ない。

「まあそんな奴らが島原には居たの。特徴ある奴が多過ぎて話してもキリがない」

「その方達は……」

咲夜の言葉に満月は口を閉ざして肩を竦め、美鈴も小さく目を伏せ口を閉ざす。思い入れがないパチュリーが、ただ文献に残されていた事実を口にする。「全滅したわ」と。天草軍三七〇〇〇全てが死んだ。唯一生き残ったのは、ただ一人の裏切り者山田右衛門作^{やまだえもさく}。島原の乱において原城に立て籠もった一揆勢の中で唯一の生存者。幕府軍に内通した。その事実にも何も言えない咲夜の代わりに、誰より速く満月が言葉を沈黙に挟む。

「最後は全員散り散りだったからの。俺のように生きながらえた者もいるかもしれないし、そう暗くなるな。生憎俺は島原の乱の後に会った事はないが、四百年も前の話ぞ。無事であっても、もう生きとらんよな」

「この歳になると生きていく友人より、亡くなった友人の方が多いですからね。そんなの気にしてられませんよ」

「そもそも気にしてやるような奴らじゃないしな！ ただの馬鹿たれどもぞー！」

「そうそう！ 好き勝手やって死んでるんですから気にするだけ損という奴ですね！」

「あつはつはー！」

「貴方達大分薄情ね……」

気にしないなどと言いながら、なんだかんだでしつかり名前まで忘れずに覚えている。満月と美鈴の軌跡を作り上げた者達。どれだけ時が経とうとも、その影達は薄れない。珍しく本も読まずに話を聞いていたパチュリーの顔を美鈴と満月は覗き込むと、面白いものを眺めるように嫌らしい笑みを口元に浮かべ、パチュリーは少し引いた。

「な、なによ」

「いやいや、俺も美鈴殿もノーレッジ卿にはかなり長らくからかわれたからな。『ノーレッジ』が目を丸くしていると思うと愉快ぞー！」

「そうですねー、しかも子育てならぬ孫育てが分からないと私に押し付けて、パチュリー様のオムツを替えた話でもしましょうか？」

笑顔の美鈴の言葉がパチュリーの耳を貫き、激しくパチュリーは噴き出した。同じく満月も噴き出し腹を押さえて床に崩れ、精霊魔法が執事長に降り注ぐ。

「笑い転げてるんじゃないわよ満月ツ！　ちよちよ、ちよつと美鈴、少しお話ししようじゃないの！」

「美鈴殿俺も聞きたいぞー」

「不死身は黙ってなさいツ!!？」

「美鈴私も聞きたいわね」

「咲夜ツ!!？」

悪戯っぽく微笑を浮かべる咲夜に向かい満月がサムズアップする。突き立てられた満月の親指は、パチュリーの魔法に削ぎ落とされたがすぐに生えた。不死身だからと遠慮のない暴力が満月に降りかかるが、不死身だからこそどうにもならない。普段物静かで声を荒げないパチュリーの息を荒げる姿に満月と美鈴が満足に笑う背後。夜に向かつて日が落ちた黄昏時の世界に足音が落とされる。

「楽しそうね、なんの話をしていたのか聞かせてくれるかしら？」

青い髪を揺らして微笑む小さな主。レミアアの姿を目に、もはや呼吸をするような慣れた動作で全く同時に三者三様の優麗なお辞儀で迎える従者達にパチュリーは大いに呆れた。ふざけていてもやるべき時はきっちりやる。満足そうに柔らかく微笑むレミアアと、レミアアの持つ紅魔館より麗しい従者達を眺めて、パチュリーは思い付いたように指を弾く。

「美鈴と満月からレミィと会う前の二人の話を聞いていたのよ」

「はあツ!!？」

たったの一手。その一手に優雅さは崩れ去る。パチュリーだつて『ノーレッツジ』。レミアア一行をからかう事など造作もない。一手で王手、一手で詰み。彫像のように固まる満月と美鈴へ、レミアアは錆びたブリキ人形のようにぎこちなく首を動かすと強く手を振り上げ牙を剥いた。

「ちよおツと!?? 従者の軌跡は追うものではないとか言ってたの誰だったわけツ!?? ずるくないツ! ずるいでしようがツ!!? なぜそうなったのツ!?? 吐きなさいこら満月ツ! 美鈴ツ!!?」

「咲夜殿が……」 「咲夜さんが……」

「貴方達咲夜に甘すぎよツ! 咲夜あああツ」

「ちよ、普通ここで私を売りますかツ!?? 勝手に話したのは貴方達でしょ!」

「これは説教ね! 久々にお説教よ! 行くわよ満月美鈴ツ! 今夜は寝かさないから覚悟なさいツ!!?」

「ああああああ……れみりやお嬢様あ」

「れみりや言うなツ!」

レミリアに襟首を掴まれ引き摺られて行く従者二人に、いい気味であるとお変良い笑顔で手を振りパチュリーは見送る。慣れた三人セットの去る姿にパチュリーと咲夜は顔を見合わせ小さく笑う。

そんな紅魔館の日々。